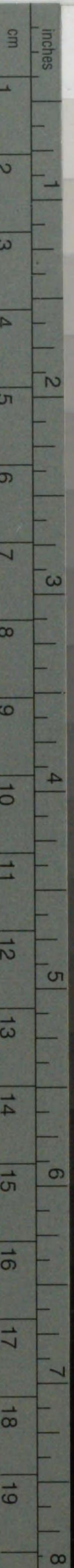


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]

732-76



1200501589761



26. 9. 28



2211

6



對

原

氏

物

語

新

解

卷

二

吉野義則著





## 凡例

- 一 本書は本文篇六冊、附卷一冊から成る。
- 一 本書は湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所藏の河内本を以て嚴密に對校して本文を立てた。
- 一 繙讀の便宜上、原本の假名書の部分に適宜漢字を充て、宛字を正して、假名遣を統一し、詞と地とを區別し、濁點・句讀點を施し、かつ適當に分節してある。
- 一 底本及び河内本に於て誤刻誤寫の明白なものでも、私意を以て之を改める事なく、又假名遣によつて意味の兩様に解せられるもの及び兩本の特色とする點は特に其儘存し、原本の倂をどこまでも忠實に傳へる事に力めた。
- 一 對校の記號としては黑點と括弧とを用ひた。本文右傍の六ポイント活字中、括弧を以て圍んだ部分は河内本で、黑點はそれに相當する詞を缺いてゐる事を意味するのである。



例へば、

いろ／＼の紙（か）なるふみどもを（中）引きいでて

とあるのは、湖月抄本には

いろ／＼の紙なるふみどもを引きいでて

とあるのが、河内本では

いろ／＼のかなぶみを中將引きいでて

となつてゐるといふ意味である。而して一般に假名の清濁は、「お（も）・ぼし煩ふ」の如く、前後の續きによつて變更するのである。

一句讀を切る事は、半ば意味を解釋するのであるから、この點に特に留意し、從來の句讀を改めた箇所が尠くない。

一湖月抄本には本文の右傍に若干校異を施してあるが、印刷の都合上、今それらの校異は左傍に移した。例へば本書に

あな（ら）くるし　むつ（か）まじう

とあるが如きは、もと底本に「あな（ら）くるし」「むつ（か）まじう」などとあつたのを、河

内本と對校し異同を記入する必要上斯く改めたのである。

一註釋は讀者の便を思つて、同註の反復も厭はなかつたのであるが、又多少簡にしたもの、省略したものが無いではない。それは附卷の語句索引によつて明瞭ならしめるやうになつてゐる。

一附卷は源氏物語の解題・語句の索引・系圖及び年表から成り、本文篇と相俟つべきは勿論であるが、單獨に分離しても、常に源氏物語の辭書たるにとどまらず、廣く王朝語・王朝文學の基礎的研究資料たり得る事を信ずるのである。

著 者 識



卷二所收目次

須 明 滯 蓬 關 繪 松 薄 槿 少 玉

磨 石 標 生 屋 合 風 雲 女 鬢

一 毛 一 五 一 四 一 七 一 三 一 五 一 六 一 五 一 五

古  
海



世の中いと煩はしく、源氏は  
月夜との事から弘微殿の怒に觸  
れ、左遷の噂などもあるから、  
せめて知らずがほに強ひて平  
氣を装つて暮して居つても。

ひたいたたけらむすまひは、  
つきのないばつとした所は、  
のほ本意だ。と、した所は、  
故郷おぼつかなくなるべき  
が家の動静がはつきり分りに  
かわらうことを、  
人わろく、女々しい心の動搖が  
不器裁だの意、今までの榮華と  
きし方行く末の身のつらさを思ひ  
續けて。



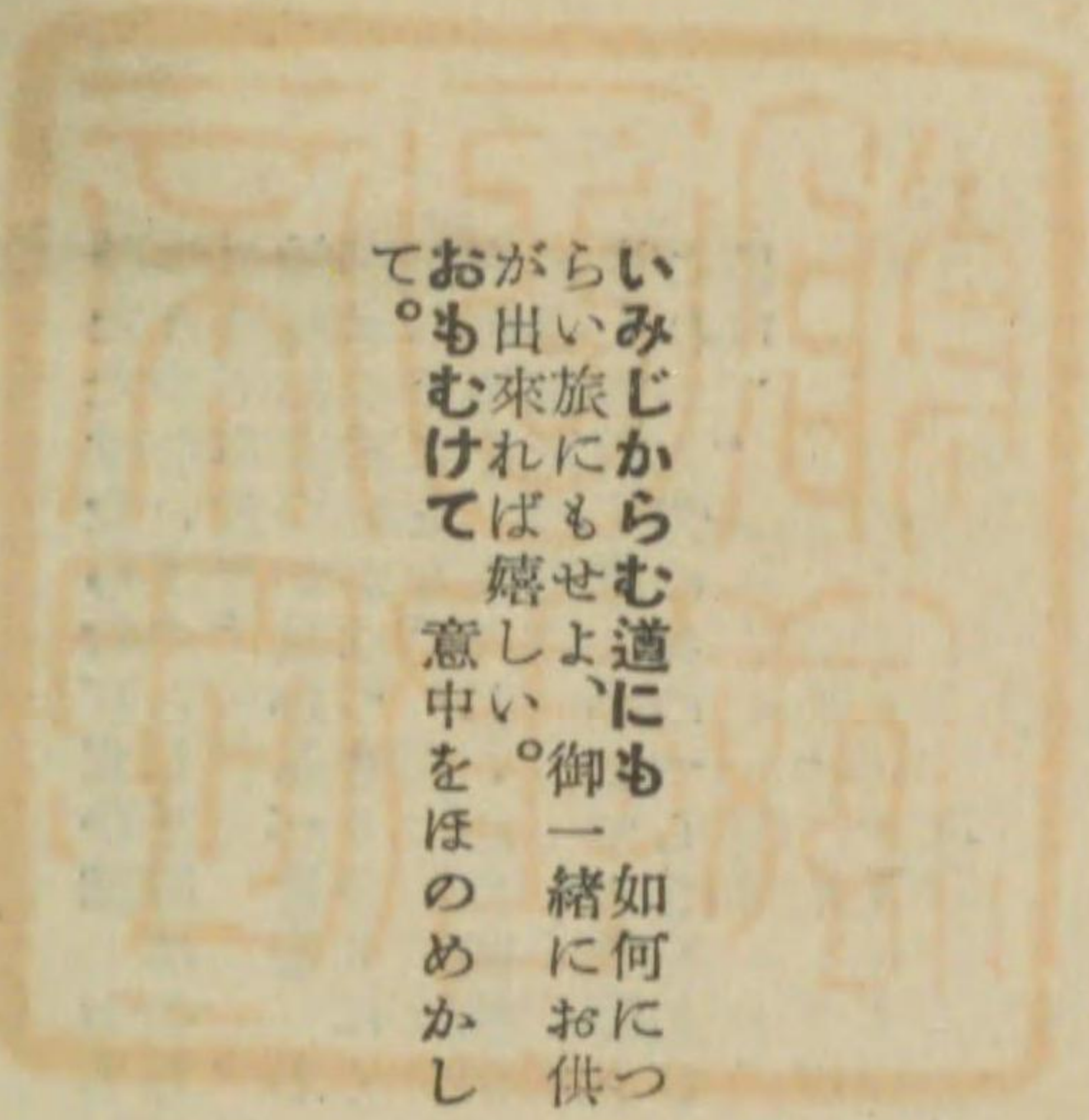
行きめぐりても、古今離別「下  
の帯の道はかた、別るとも、行  
きめぐりても逢はむと思ふ」

須磨

源氏に取つて  
世の中いと煩はしく、具合のわるいはしたなき事のみまされば、これ以上のせめて知ら  
ずがほに(一)あり経ても、(二)これよりまさる事もやと思しなりぬ。(果て)  
かの須磨は、昔こそ人の住處すみかなどもありけれ、今はいと里ばな  
れ心すごく、海士あまの家だに稀かすかにになむ(三)なり(四)聞き給  
へど、源氏の心人繁くひたいたけらむすまひは、いと本意ほんいなかるべし、  
さりとして都を遠ざからむも、故郷ふるさとおぼつかなくなるべきを、人わ  
ろくぞおぼし亂るる。よろづの事(五)、きし方行く(六)す多思ひつづ  
け給ふ(七)、(八)に、悲しき事いとさま(九)なり。憂(あはれ)きもの  
と思ひ(一〇)捨つる(一一)世(一二)も、今はと住み離れ(一三)なむ事  
をおぼすに(一四)は、いと捨てがたき事多かる(一五)なかにも、葉上姫  
君の、あけくれに添へても思ひ歎き給へるさまの心苦しさは、  
何事にもすぐれてあはれなるを、行きめぐりても又あひ見む事  
を必ずとおぼさむにてだに、(一六)なほ一二日(一七)のほどよそ(一八)に明し  
暮す折々だに、気がかりおぼつかなきものに(一九)覚え、葉上女君も心細(二〇)うのみ思



逢ふを限りにいつとも分らな  
い再會の日を期限として別れて  
ゆくにつれても古今戀二一わ  
が戀は行方も知らず果もなし逢  
ふを限と思ふばかりぞ  
やがて別るべき門出古今哀傷  
し今は限の門出なりけり



いみじからむ道にも如何につ  
が旅にせよ御一緒に供  
おもむけて意中をほめかし

なほざりにても源氏が本氣で  
はなれても一寸でも顔を見  
りまた通つてみられた婦人達  
は人知れず胸を痛める人々  
多かつた  
物の聞えや文通したことが聞  
えたら、どんな風に噂されよう  
かと、藤壺御自身のため斟酌さ  
れるけれども、河内本よし

昔かやうにあひおぼし藤壺が  
昔これ程同情を寄せられ好意を  
見せて下さつたならばと

都離れ給ひける、都を離れたと  
は書いてあるが、更に立返つて  
出發當時の事を叙するのであ  
る  
今としも只今出發するとも  
さるべき所々に然るべき婦人  
達の所に

あはれと偲はるばかり感概無  
量思ひ出の種となる程念入り  
書かれた手紙は見る価値もあつ  
たらうが、その當時の悲しさに  
紛れてはつきり聞き置かずじ  
まひになつてしまつた

二三日かねて 出發の二三日  
前に  
おほい殿 葵上の父左大臣邸  
網代車の網代で張つた牛車  
竹又は檜の乗用代で張つた牛車  
主女 葵上の部屋  
御方

う給へるを、幾年その程と、限りある道にもあらず、逢ふを限  
りに隔たりゆかむも、無常の世故さだめなき世に、やがて別るべき門出に  
もやと、いみじうおぼえ給へば、爾共によ忍びて諸共にもやと  
おぼし寄る折、あれど、さる心細からむ海づらの、波風よりほ  
かに立ちまじる人もなからむに、かくらうたき御さまにて引具  
し給へらむも、いとつきなく、わが心にも、なかく物思ひ  
のつまなるべきを、などおぼし返すを、女君は、「いみじから  
む道、離れ馬にも、おくれ聞えずだにあらば」とおもむけて、恨め  
しげに思ひたり。かの花散里にも、源氏がおはし通ふ事こそ稀なれ、  
花散里のさま心細くあはれなる御有様を、源氏のこの御蔭に隠れて、のみ過ものし給  
へば、いみじう歎きおぼし、歎きたるさま、いとことわりなり。  
なほざりにても、通ひ給ひし所々のほのかに見奉り給ひしな  
ど、人知れぬ心を碎き給ふ人ぞ多かりける。入道の宮よりも、  
物の聞えや又いかか、取りなされむと、わが御ため、人の御た

•いとしうつつましかれど、忍びつつ御とぶらひ常にあり。  
昔かやうに、あひおぼし、あはれをも見せ給はましかば、と  
打ち思ひ出で給ふに、源氏の心にさもさまぐに心をのみ盡すべかりけ  
る、人の御契りかなと、つらう思ひ聞え給ふ。三月廿日あまり  
の程になむ都離れ給ひける。人に、今としも知らせ給はず、た  
だいと近う仕うまつり馴れたるかぎり、七八人ばかり御供にて、  
いとかすかにて出で立ち給ふ。さるべき所々に、御文ばかり  
•聞え給ふと、わたりなど打忍び給ひし、あはれにも、あはれ  
と偲はるばかり書き盡し給へるは、見所もありぬべかりしか  
ど、その折の心地のまぎれに、はかしくも聞き置かずな  
りにけり。  
•おほい殿、二三日かねて、おほい殿に、夜に隠れて渡り給へり。  
網代車のうちやつれたるに、女のやうにて左大臣邸に隠るへ入り給ふもい  
とあはれに、夢とのみ覺ゆ。御方いと淋しげにうち荒れたる心



昔さぶらひし 昔葵上に仕へて居つた女房。 葵上の部屋に。 源氏の居

殊に物深からぬ若き人々、若者は思慮が深くないから、かういつたのである。若い女房の中は思慮深くない者といふのではない。 久しき程に久しく逢はなかつた間に私を見忘れないのがかたゆい。

つれづれに籠らせ 閉籠つて退屈にしておいで折に、とりとげようといふ昔話でも参上して申上る。 月夜との事から除名されて出仕もしないで暮してゐるのである。

位をまかへし奉りて 致仕は辭官不辭位とあつて、位階をやるのは罪科ある時の事であるから、この「位」は官職の意味である。

天の下まかさかさまに あり得べからざる事。 宇津保忠乞「天の下まかさかさまになるとも斯かる事あらじ」

とある事も それもこれも前世の宿縁故、結局は私の過失です。

さして斯く官爵を 格別私のやうに官爵を取上げられる程でなく、ついでに一寸の罪に觸れてさへ、勅勘を受けた人が、常日頃と同様平氣な顔をして居る事は異朝でも罪重き事に致して居りますのに。

昔の御物語 左大臣は昔の御物語をされて、桐壺の御事や、御物言を語り出されて、御趣旨など

地して、若君の御乳母ども、昔さぶらひし人のなかに、まかで散らぬ限り、かく渡り給へるを、珍らしがり聞えて、まうのぼりつどひて、見奉るにつけても、殊に物深からぬ若き人々さへ、世の常なさ・思ひ知られて、涙にくれたり。若君はいとうつくしうて、ざれ・走りおはしたり。久しき程に、忘れぬこそ哀なれ」とて、膝にすゑ給へる御氣色、忍び難げなり。 左大臣も葵上の部屋に。 おとどこなたに渡り給ひて、たいめし給へり。 左大臣「つれづれに籠らせ給へらむ程、何と侍らぬ。参り來て聞えさせむと思ひ給ふれど、身の病・重きにより、おほやけにも仕うまつらず、位をも返し奉りて、侍るに、私さまには腰のべて」など、物の聞えひがしくしかるべきを、今は世の中・憚るべき身にも侍らねど、いちはやき世のいと怖ろしう侍るなり。かかる御事を見給ふるにつけて、命長きは心憂く・思ふ給へ。らるる世の末にも侍るかな。天の下をさか

さまになしても、思ひ給へよらざりし御有様を見給ふれば、よろづいと・あぢきなくなむ」と聞え給ひて、いたうしほたれ給ふ。とある事もかかる事も、前の世の報いにこそ侍るなれば、いひもてゆけば、只みづからの怠りに。なむ侍る。さして斯く官爵を。取られず、あさはかなる事にかかづらひてだに、おほやけのかしこまり・なる人の、うつしかさまにて世の中にあり。経るは、答おもさわざに人の國にもし侍るなるを、遠く放ち遣はすべき定めなども侍るなるは、さま殊なる罪に當るべきにこそ侍るなれ。濁りなき心にまかせて、つれなく過ぐし侍らむも、いと・憚り多く、これより大きな恥に臨まぬさきに、世をのがれなむと思ふ給へ立ちぬる」など、こまやかに聞え給ふ。昔の御物語、院の御事、あぼしのたまはせし御心ばへなど聞えいで給ひて、御直衣の袖も引き放ち給はぬに、君もえ心強くももてなし。給はず。



過ぎ侍りにし人を、死んだ娘の事を忘れず、今度今以て悲しんで、おぼろげに居る時でございませう。源氏須磨に退去の事。斯かる夢、源氏退去といふ夢の如く悲しい事。かくよはひ過ぎぬる、こんな年寄つた私共の間に残つて居るが、君にお馴染み申さぬ月日すの、何よりも悲しう存じま

いひ出づる節ありて、指摘されるだけのわけがあつて、宛罪にあふ。思ひ給へ、寄らむ、君の場合はどう考へても心當りがございませぬ。湖月本「思ひ給よらん云々」とある。三位の中將、昔の頭中將。とまり給ひて、源氏が葵上の部屋に。

中納言の君、葵上の侍女。いへば、伊勢物語・新勅撰戀業平一いへば、えにいはねば胸に騒がれて、心一つに歎く頃かな

わづかなる、花も残りずくなになつた。霧がこめてあきり渡りたる

心やすくもありぬべかりし、格別逢へば逢はれた今迄を、過し。御消息聞え給へり、大宮から源氏に。自らも、おかにお話申上げたので、世の中が暗くなつたやうな悩みを、お話ししようとして居ります間に、お歸りになるのきり、昔とは勝手が違つてゐるやうな気がします。

若君の、何心なく紛れありきて、これかれに馴れ聞え給ふを、いみじとおぼしたり。過ぎ侍りにし人を、世に思ふ給へ、忘るる世なくのみ今にかなしび侍るを、この御事に、なむ、もし侍る世ならましかば、いかやうに思ひ歎き侍らまし。よくぞ短くて斯かる夢を、見ずなりにけると、思ふ給へ慰め侍る。をさなく物し給ふが、かくよはひ過ぎぬるなかにとどまり給ひて、なづさひ聞えぬ月日や隔たり給はむと思ひ給ふるをなむ、よろづの事よりも悲しう侍る。古への人も、誠に犯しあるにても、斯かる事に當らざりけり。なほさるべきにて、人のみかどにも斯かるたぐひ多く侍りけり。されど、いひ出づる節ありてこそさる事も侍りけれ。とさまかうざまに、思ひ給へ、寄らむ方なくなむ」など、多くの御物語聞え給ふ。三位の中將もまゐりあひ給ひて、おほみきなど參り給ふに、夜更けぬれば、とまり給ひて、人々お前にさぶらはせ給

ひて、物語などせさせ給ふ。人よりはけにこよなう忍びおぼす。中納言の君、いへばえに悲しう思へるさまを、人知れず。あはれとおぼす。人皆しづまりぬるに、とりわきて語らひ給ふ。これにより、とまり給へるなるべし。明けぬれば、夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう。花の木どもやうくさかり過ぎて、わづかなる木陰のいと面白き庭に、うすきり渡りたる、そこはかたなく霞みあひて、秋の夜のあはれに多く立ちまされり。隅の間の勾欄に押しかかりて、とばかり眺め給ふ。中納言の君、見奉り送らむとにや、妻戸押しあけて居たり。又たいめん、あらむ事こそ、思へばいと難けれ。斯かりける世を知らで、心やすくもありぬべかりし月頃を、さしも急がで隔てけるよ」など宣へば、物も聞えず泣く。若君の御乳母宰相の君し、大宮のお前より御消息聞え給へり。自らも聞え、まほし



鳥邊山の歌 鳥邊山で葵上を火葬した時に立上つた煙に似寄つた煙でも立上るかと思ふが、煙を焼いてゐる須磨の浦を見に行くのです。  
思ひ知り給へる このつらい氣持をしみじく味つた人もあるだらう。

聞えさせまほしき 以下大宮への返事の詞。  
むすぼほれ侍る程 悲しさに鬱結して居る心の程を御推察下さい。

心強く思う給へなして 氣強く決心して夕霧には逢はずに。

ましていはけなく まして此の女房達は、源氏の幼時からお目にかゝつてゐる人々故。  
たとしへなき御有様を 美しい源氏の姿を見て。

なき人の歌 故葵上との別は、一層隔たる事せう、故葵上が茶毘の煙となつた都にあなたがおいででなくては、あなたがお取添へて、葵上の死んだ悲しさの上に源氏に別れる悲しさを取添へて。

殿に 源氏が二條院に御歸邸になつたと。  
わが御方の 東對なる源氏の部屋に仕へてゐる人々。

侍所。從者の詰所。  
御供 須磨への御供。

私の別れ 自宅の人々や親戚知友等に暇乞する事。  
さらぬ人 親しう仕うまつる人以外の疎遠なる人。

きを、かきくらす亂り心地ためらひ侍る程に、いと夜深う出でさせ給ふなるも、さまかはりたる心地のみし侍るかな。心苦しき人のいぎたなきほどは、暫しもやすらはせ給はで」と聞え給へれば、うち泣き給ひて、

鳥邊山燃えしけぶりも紛ふやと海士の鹽焼く浦見にぞゆく

御返しともなくうちずし給ひて、暁の別は、かうのみやは、

心づくしなる。思ひ知り給へる人もあらむかし」と宣へば、

「いつとなく、別れといふ文字こそうたて侍るなるなかにも、

今朝はなほたぐひあるまじう思ひ給へらるる程かな」と、鼻聲にて、

げに淺からず思へり。聞えさせまほしき事も、かへすがへす思う給へながら、

只むすぼほれ侍る程、おし量らせ給へ。いぎたなき人は、見給へむにつけても、

なかく憂き世のがれがたう思ひ給へられぬべければ、心強く思う給へなして、

急ぎまかで侍る」と聞え給ふ。出で給ふほどを、人々の

ぞきて見奉る。入りがたの月いとあかき、いとどなまめかしう清らにて、

物をおぼい。たるさま、虎狼だにも泣きぬべし。ましていはけなくおはせし程より見奉りそめてし人々なれば、

たとしへなき御有様を、いみじと思ふ。まことや御かへし

ば、

なき人の別やいとど隔たらむけぶりとなりし雲居ならでは

取添へてあはれのみ盡させず、出で給ひぬる名残、ゆゆしきま

で泣きあへり。

殿におはしたれば、わが御方の人々も、まどろまざりける氣

色にて、所々に群れゐて、あさましとのみ世を思へる氣色なり。

侍には、親しう仕うまつる限りは、御供にまゐるべき心

まうけして、私の別れ惜しむ程にや、人目もなし。さらぬ人は

とぶらひ。參るも重き咎めあり、煩はしき事。まされば、

所せくつどひし馬、車のかたもなく淋しきに、世は憂きものな



臺盤は長方形の机形の食卓。ちかたへは幾つかある臺盤のうらみ。臺盤につく人がない。臺所々々。臺は臺盤につく人々の座席である。臺盤につく人がないのである。自分かたづけてある。見程だに。自分が居る時でさへ此の通りだから。源氏が歸つて来られたから。年月経ば、須磨に退住後の事を源氏が思ひやるのである。

例の思はずなる。浮気心から他の女の許に泊つたのだなどと、案外な意味に解釋しては居られなかつたか。

ひたやごもりにてやは引籠つてばかりも居られぬ。人にもなさけなきもの。人から無情者と疎外されるのもつら。斯かる世を見るより。こんな悲しい世を見る事以外に案外な事とは何事ぞ。

父親王は御父兵部卿宮は紫上に疎遠故、紫上は以前から私に親王は今の世間の外閉をうらむお見舞にさへも紙もやらずから、紫上は他人の手前も恥かしく。なかく知られ奉らて源氏の所に居る事を父親王に知らずるに。世に俄なりし急な幸福のあわただしい變りやう。縁起がわるから次と別れる人々には次思ふ人々。紫上は母、祖母、源氏といふが如く紫上を愛する人々に次々別れる人だ。

おほやけに勅勘を受けた人は。さるべきにて前世の縁でかか。る目にもあふのだらうと思ふが。

りけりとおぼし知らる。臺盤なども、かたへは塵ばみて、疊所所引返したり。見る程だにかかり、ましていかに荒れゆかむ、とおぼす。西の對に渡り給へれば、御格子も參らで。ながめあかし給ひければ、簀子などに若き。わらははべ。所に臥して、今ぞ起きさわぐ宿直姿ども。をかしうて出でい。るを見給ふにも、心細う、年月経ば、かかる人々も、えしもあり果てでや行きちらむ、など、さしもあるまじき事さへ、御目のみと。まりけり。よべはしかくして夜更けにしかばなむ。例の思はずなるさまにやおぼしなしつる。かくて侍る程だに御目かれずと思ふを、かく世を離るるきはには、心苦しき事のおのづから多かりけるを、ひたやごもりにてやは。常なき世に、人にもなさけなきものと心おかれ果てむもいとほしうてなむ。と聞え給へば、斯かる世を見。るよりほかに、思はずなる事は何事にか。とばかり宣ひて、いみじと

おぼし入りたるさま、人より殊なるを、ことわりぞかし、父親王はいとあるかにて、もとよりおぼしつきにけるに、まして世の聞えを煩はしがりて、音づれ。聞え給はず、御とぶらひにだに渡り給はぬを、人の見る。らむことも恥かしく、なかなか知られ奉らでやみなましを、繼母の北の方などの、「世に俄なりし。さいはひの。あわただしさ。あなゆゆしや。思ふ人々かた。につけて別れ給ふ人かな」と宣ひけるを、さるたよりありて漏り聞き給ふにも、いみじう心愛ければ、これよりも絶えて音づれ聞え給はず、また頼もしき人もなく、げにぞあはれなる。御有様なる。なほ世に許されがたうて年月を経ば、岩ほのなかにも迎へ奉らむ。只今は人聞きのいとつきなかるべきなり。おほやけにかしこまり聞ゆる人は、あきらかなる月日の影をだに見ず、安らかに身を振舞ふことも、いと罪おもかんなり。あやまちなけれど、さるべきにこそ斯



ひたおもむきに 今わきひら  
見ずの狂氣じみた世の中の事  
故

帥のみや 源氏の御弟兼兵部卿  
宮

位なき人は 無位の人  
は文様の  
ない着物を着るのが定まりであ  
る。

身はかくての歌 我身は流浪し  
てゆく中にしても、君の側を離れ  
ぬ離れず居る事わが影は、君  
を離れず居る事わが影は、君  
別れても歌 二人は別れても  
鏡の中の影なりと留まるものな  
らば、鏡を見ても慰めて居ませ  
うものを。

みこ 帥宮。

かの人も あの人もう一度逢  
つてやらなければ無情だと思ふ  
でも、知れぬとお思ひになるの  
いと物憂くて 紫上のそばを離  
れたくないから。花散里の御姉。  
女御 麗景殿。花散里の御姉。  
かずまへ給ひて つまらぬ自分  
を源氏が人なみに思召してお立  
寄り下さいました事。

殿の内 花散里の邸内の有様。

任み離れたらむ 都を離れて住  
むべき須磨の住居の有様が思  
ひやられる。  
西面 花散里の方。

かる事もあめれと思ふに、まして思ふ人具するは、例なき事な  
るを、ひたおもむきに物ぐるほしき世にて、  
さることもありなむ。・・・・・」など聞え知らせ給ふ。  
日たくるまで大殿籠れり。帥のみや三位の中將などおはしたり  
にぞ。たいめし給はむとて、  
なき人は」とて、無文の御直衣・なか／＼いとなつかしきを着  
給ひて、うちやつれ給へる。いとめでたし。御鬢かき給ふ  
とて、鏡臺に寄り給へるに、面痩せ給へる影の、我ながらいと  
あてに清らなれば、選こよなうこそ衰へにけれ。この影のや  
うにや痩せて侍る。あはれなるわざかな」と宣へば、女君、  
涙を一目・うけて見おこせ給へる、いと忍びがたし。  
身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は離れじ  
と聞え給へば、  
別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし

いふともなく、柱隠れに居隠れて、涙を紛らはし。  
給へるさま、なほこら見る。中にたぐひなかりけりと、  
おぼし知らるる人の御有様なり。みこは、哀  
なる御物語。聞え給ひて、暮るるほどに歸り給ひぬ。  
花散里の心細げにおぼして常に聞え給ふも、ことわりにて、  
かの人もし一度見ずばつらしと、思はむと思せば、  
その夜は又出で給ふものから、いと物憂くて、いたう更か  
しておはしたれば、女御、「かくかずまへ給ひて立寄せ給へる  
事」と、喜び、聞え給ふさま、書き續けむもう  
るさし。いとみじう心細き御有様、只この御蔭に隠れ  
て、過ぎい給へる。年月、いとど荒れまさらむ程おぼしやら  
れて、殿の内いとかすかなり。月おぼろにさし出でて、池廣く  
山木深きわたり、心細げに見ゆるにも、住み離れたら  
む巖のなかおぼしやらる。西面には、かうしも渡り給はずやと、







つれなき御もてなし 源氏から  
冷淡な取扱は受けてゐるもの  
一緒に居つた間は慰めて居つた  
のであるが、これからは何によ  
つて慰められようと思ふけれど

上下皆まうのぼらせ 上蔭下蔭  
の女房全體を紫上方に招いて。

今はと世を いざ退京といふ時  
の憂さつらさも 一度も逢ふ折が  
逢ふなげの歌 一度も逢ふ折が  
なくして居つたのでせうか。  
論の原因となつたのでせうか。  
「流るる」に流滴の意がひびかせ  
てある。涙の河は流れる涙を河  
に見立て、呼んだもの。涙を河  
道のほど 途中で手紙を落して  
人目については大變だから。

女 朧月夜。

涙河の歌 御流滴後の再會の機  
を待たずに私は死んでしまふ事  
でせう。瀬は機會である。  
いま一度の 瀬は機會である。  
なくして別れるのかと思ふのは殘  
念だが。

憂しとおぼしなすゆかり 朧月  
夜の身内の者には源氏が嫌つて  
居る人々が多い爲に、並大抵な  
らば秘して居られる事故、強ひ  
て逢ひたいとは仰しやらずじま  
あすとの 明日出發といふ日  
の夕方。

春宮 後の冷泉院。

はた 別離の悲はどこも同じと  
はいふもの。  
つらかりし御心ばへも 源氏は  
藤壺が今迄冷淡であつた事もそ  
れとなく恨みたく思はれたが、  
今更にうたてると今更いやな事  
だと藤壺が思はれるだらうし。

はかばかしくしきもの。めたからぢ  
・家司ども具して、しろしめすべきさまども宣ひあづく。わが  
御方の中務中將・などやうの人々、つれなき御もてなし  
ながら、見奉る程こそ慰めつれ、何事につけてかと思へども、  
運・命ありてこの世に又歸るやうもあらむを待ちつけむと思  
はむ人は、こなたにさぶらへ」とのたまひて、上下皆まうのぼ  
らせ給ひて、さるべき物ども、品々、くばらせ給  
ふ。若君の御乳母たち、花散里などにも、をかしきさまのはさ  
るものにて、まめくしき筋に、おぼし寄らぬ事なし。内侍  
のかみの御もとに、わりなくして、聞え給ふ。源氏とはせ給  
はぬもことわりに思ひ給へながら、今はと世を思ふ給へ侍る程  
の憂さもつらさも、たぐひなき事にてこそ侍りけれ。  
逢ふ瀬なき涙の河に沈みしや流るるみをはじめなりけむ  
と思ひ給へ出づるのみなむ罪のがれがたう侍りける。道のほど

も危ければ、こまかには聞え給はず。女といみじう覺え給  
ひて、忍び給へど、御袖よりあまるも所せくなむ。

涙河うかぶ水泡も消えぬべし流れてのちの瀬をも待たずて

泣くく亂れ書き給へる御手、いとをかしげなり。いま一度、

たいめ、なくてやとおぼすは、なほ口惜しけれど、おぼし返し

て、憂しとおぼしなすゆかり多くて、おぼろげならず忍び給

へば、いとあながちにも聞え給はずなりぬ。

あすとの暮には、院の御墓をがみ奉り給ふとて、北山へまう

で給ふ。曉かけて月いづる頃なれば、まづ入道の宮にまうで給

ふ。近き御簾の前に御座まゐりて、御みづから聞えさせ給ふ。

春宮の御事を、いみじくうしろめたきものに思ひ聞え給ふ。

かたみに、心深きどちの御物語、はたよるづのあはれま

さりけむかし。なつかしうめでたき御けはひの昔に、變らぬに、

つらかりし御心ばへも、かすめ聞えさせまほしけれど、今更に



大將 源氏。  
御山 桐壺院の御陵。  
とみに物も 涙にむせ返つてゐ

見しはなく 桐壺院は崩御源氏  
私に出家した甲斐もなく泣く泣  
く暮してゐます。  
別れしに 院の崩御によつて悲  
しきは盡きたのに、又謫居の事  
で此の世のつらさがまさりまし

月待ち出でて 前に「曉かけて  
月いづる頃」とあつた。  
かの御禊の日、葵卷の齋院の御  
祓の日。卷一、三三三頁。伊豫介の子で  
右近の尉の藏人、伊豫介の子で  
得べきかうぶりも、當然從五位  
下、叙せられる筈、然從五位  
限も過ぎたのに、到頭除籍され  
て、役も免ぜられて具合がわる  
いので。

引きつれて 賀茂の瑞垣を見る  
につけても、行列を作つて葵を  
かざして練りあるいた御禊の當  
時が思ひ出されて賀茂の神まで  
が恨めしい。

憂き世をばの歌 退去後に残る  
我名正否は糺の神に御一任し  
て、今私は憂き世を遁れて須磨  
に退去します。  
物めです。右近尉は物に感じ  
易い若人故。

うたてとおぼさるべし、わが御心にも、なかく今一きは亂れ  
まさりぬべければ、念じかへして、ただ、源かく思ひかけぬ罪  
に當り侍るも、思ふ給へあはする事藤壺との間の秘密の一ふしになむ空怖ろしう  
侍る。惜しげなき身はなきになしても、宮春宮の御世だに事のな  
くおはしまさば」とのみ聞え給ふぞことわりなるや。宮も皆  
まぐおぼし知らるる事にしあれば、御心のみ動きて、聞え  
やり給はず。大將、よろづの事、かき集めおぼし續けて、  
泣き給へる氣色、いと盡きせずなまめき給たり。御山源に參り  
侍るを、御ことづてや」と聞え給ふに、とみに物も聞え  
給はず、わりなくためらひ給ふ御氣色なり。  
見しは亡くあるは悲しき世の果を背きし効もなく、ぞふる  
いみじき御心惑ひどもに、おぼし集むる事ども、えぞ續けさ  
せ給はぬ。  
別れしに悲しき事は盡きにしを又ぞ此世の憂さはまさされる

月待ち出でて出で給ふ。御供にただ五六人ばかり、下人も睦  
まじき限りして、御馬にてぞおはする。更なる事なれど、  
ありし世の御ありきに異なり。皆いと悲しう思ふうちに、  
かの御禊の日、假の御隨身にて仕うまつりし右近の尉の藏人、  
得べきかうぶりも程過ぎつるを、遂に御簡削られて、官もと  
られてはしたなければ、御供にまゐる内なり。賀茂の下しもの御社  
をかれと見渡す程、ふと思ひいでられて、おりておぼん馬の  
口を取る。

引きつれて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂の瑞垣  
といふを、げにいかか思ふらむ、人よりけに花やかなりしも  
のを、とおぼすも心苦し。君も御馬よりおり給ひて、御社の  
かたををがみ給ふとて、神にまかり申し給ふ。  
憂き世をば今ぞ別るとどまらむ名をば糺の神にまかせて  
と宜ふさま、物めでする若き人にて、身にしみ



限りなきにても 至尊の御身分であつても。

申し給ひても 源氏が御墓の前で。

なき影や 故院の御靈は何と思つて私を御覽になる事やら、あれあの父帝の御傍と思つて見て居た月も、此度の左遷を悲しく思つたのか、雲隠れてしまつた。

又まゐり侍らず もう一度參上せずじまひになつてしまひます事が、數多の心配にまして心配に思はれます。

いつかまた 私は零落した山賤で、すから、いつ又春の都の花を、見る事、せう、春の都に春宮を、ひびかしてある。舊註には「散透」とあるが「散過」が正しい。卷一、二七六頁。

あぢきなき事に 以下命婦の心に藤壺と源氏との事を思ひ續けるのである。

心と 自ら求めて。

くやしうわが心一つに それといふのも自分の料簡一つに 歸する事のやうに命婦は悔しく思はれる。

てあはれにめでたしと見奉る。

御山にまうで給ひて、(昔)故院御在世當時のおはしましし御有様(など)、只目の前の

やうにおぼし出でらる。限りなきにても、世に亡くなりぬる人

ぞいはむかたなく口惜しきわざなりける。よろづの事を泣く泣

く申し給ひても、そのことわりをあらはにえ承り給はねば、さ

ばかり申し宣はせしさまの御遺言は、いづちへか消え失せ

にけむといふかひなし。御墓は道の草しげくなりて、分け入り

給ふほど、いとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立木深く心

すごし。歸り出で、(給は)む方もなき、心地して、をがみ給ふに、

ありし御面影(の)、さやかに見え給へる、(も)、そぞろ寒きほどな

り。

なき影やいかが見えるらむよそへつつ眺むる月も雲隠れぬる

明け果つる程に歸り給ひて、(出で給へり)、春宮にも御消息聞え給ふ。王

命婦を、(天宮の)御かはりとてさぶらはせ給へば、(王命婦の)その局にとて、

源氏文「今日なむ都離れ侍る。又まゐり侍らずなり、(侍も)ぬるなむ、

あまたの憂へにまさりて思ふ給へられ侍る。よろづ推し量りて

啓し給へ。

いつかまた春の都の花を見む時うしなへる山がつにして」

櫻の散りすぎたる枝につけ、(て)給へり。斯くなむと御覽せ

さすれば、(を)をさなき御心地にも、まめだちておはします。御

返り、(は)いかが物し侍らむ」と啓すれば、(春宮)暫し見ぬだに戀しき

ものを、遠くはましていかにといへかし」と宣はす、(れは)もの

はかなの御返りやと、(命婦は)あはれに見奉る。(藤壺に心を寄せた事)あぢきなき事に御心を

碎き給ひし昔の事、(源氏の)折々の御有様思ひつづけらるるにも、物思

ひなくて我も人も過ぐし給ひつべかりける世を、心とおぼし歎

きけるを、(を)くやしう、わが心一つにかからむ事のやうにぞ覺ゆ

る。御返りは、(命婦の)「更に、(え)聞えさせやり侍らず、(なむ)お前には啓し

侍りぬ。(春宮が)心細げにおぼしめしたる御氣色もいみじう、(の)なむ」







おぼし入りたるが 自分が悲し  
んで居ては沈みきつてゐられ  
る紫上が一入悲しがられる事だ  
らうから。

生ける世の 生別といふ事のあ  
るのを知らずに、死ぬまでは貴  
女に別れることはしないと約束  
したことであつた。

惜しからぬ 惜しからぬわが命  
と取りかへても、今目前の生別  
を暫く引留めたいものです。

申の時ばかり 午後四時頃。

大江殿 難波の渡邊にあつて、  
齋宮が伊勢から歸洛される時の  
旅館。  
唐國の歌 源氏の歌。楚の屈  
原は懷王に放たれて行く、澤  
畔にさまよひ終に汨羅に投じた  
が、私はそれよりも行方知れぬ  
流浪の生活をする事だらう。

かつ返るを 波のかへるのを都  
にかへるのに思ひよせて羨しく  
といつたのである。伊勢物語「いとどし  
く過ぎゆく方の戀しきに羨しく  
も返る浪かな」

三千里のほかの心地 文集十三  
行十一月中長至夜三千里外遠  
行人、若爲獨宿楊梅館、冷枕  
權の雫も堪へがたし。  
れる。伊勢物語・古今雜上とわ  
が上。露ぞおくなる天の川とわ  
たる舟の櫂の雫か。  
ふるさとをの歌 峯の霞はわが  
故郷を隔てて居るけれども、故  
郷人の眺める空もわが眺める空  
も同じ空ではある。「か」は「か  
な」の意。  
藻鹽垂れつつ 古今雜下行平「わ  
くらには問ふ人あらば須磨の浦  
に藻鹽垂れつつわぶと答へよ」

昔の御心のすさび 昔の心の遊  
戯即ち浮氣心が思ひ出される。  
御庄のつかさ 源氏の私領の管  
理者。

はかなき世を別れなば、いかなるさまにさすらへ給はむと、  
しるめたく悲しけれど、  
るべければ

「生ける世の別を知らで契りつつ命を人にかぎりけるかな  
はかなし」など、  
惜しからぬ命にかへて目の前の別をしはしとどめてしがな  
げにさぞおぼさるらむと、いと見捨てがた、  
果てなば、  
道すがら面影につと添ひて、胸もふたがりながら、御舟に乗り  
給ひぬ。日長き頃なれば、追風さへ添ひて、まだ申の時ばかり  
にかの浦に著き給ひぬ。假初の道にても、かかる旅をならひ給  
はぬ心地に、心細さもをかしさも珍らかなり。大江殿といひけ  
る所はいたく荒れて、松、ばかりぞしるしなりける。  
唐國に名を残しける人よりもゆくへ知られぬ家居をやせむ

渚に寄る波のかつ返るを、見給ひて、  
ずんじ給へるさま、さる世の古言なれども、珍らしく聞きなさ  
れ、悲しとのみ御供の人々、思へり。うち顧み給へるに、こ  
しかたの山は霞はるかにて、誠に三千里のほかの心地するに、  
權の雫も堪へがたし。  
ふるさとを峯のかすみは隔つれど眺むる空は同じ雲居か  
つらからぬものなくなむ。おはすべき所は、行平の中納言の、  
藻鹽垂れつつわびける家居近きわたりなりけり。  
入りて、あはれに心すごげなる山、中なり。垣のさまより始め  
て、珍らかに見給ふ。茅屋ども、葦葺ける廊めく屋など、をか  
しうしつらひなしたり。所につけたる御すまひ、やう變りて、  
斯かる折ならずばをかしうもありなましと、昔の御心のすさび  
・おぼし出づ。近き所の御庄のつかさ、召して、さ  
るべき事どもなど、良清の朝臣など親しき家司にて、仰せ行ふ

二四







二かたに僧都は二つの意味は  
紫上がお祈りなすに落ちつは  
紫上が元のお祈り申される

旅の御宿直物を旅中の夜具類  
の平絹を細かく堅く織つた無文  
の直衣など源氏は今迄無文  
に度無文の直衣を新調して贈る  
違つたやうな氣がして悲しんだ  
が身はかへり去らぬ鏡の影は離れ  
物ごとく思ひめぐらし色々  
苦勞もしては悲しむに申す  
輩上人は君に御申す事  
まはし又上は母に御申す事  
話申し君は又上は母に御申す事

忘草も生ひやすらむ 忘れる事  
もあらう。忘草は萱草(クワン  
ザウ)の事。

なさけある氣色 少しでも源氏  
に同情してゐるやうな様子  
あはれも御覽じ過ぎし顔  
源氏の御情も大抵は知らぬ  
で通し。無愛相な仕打をされ  
かばかりに憂き世のこれ程  
に露程も二人の情事について  
は言ひ出す事なくお仕打が切  
なる感の自由にお仕打が切  
で、世間よく秘密をかくし  
うせひだしたと、どらして源氏  
思ひ出たか。感慨に耽らずに  
おもむけ。方針・態度・仕打。

鹽垂るるの歌 長い間お待ち申  
して居る私も、涙に濡れるのを  
仕事として敷く木がひいて居  
なげきは鹽焼く材料で、そ  
木を積みあげると一種の修辭  
にきかせた一種の修辭法であ

りの事など聞ゆ。二かたに御修法などせさせ給ふ。かつは  
斯くおぼし歎く御心をしづめ給ひて慰め、又もとの  
如くに歸り給ふべきさまに、心苦しきさまに祈り申  
し給ふ。旅の御宿直物など、調じて奉り給ふ。緋の御直衣指  
貫。と宣ひし。面影の、げに身に添ひ給へるも。物をとかう思ひ  
かひなし。出で入り給ひしかた、寄り居給ひし眞木柱などを見  
たまふにも、胸のみふたがりて。めぐらし、世にしほじみぬるよはひの人だにあり、まして馴れ  
むつび聞え、父母になりつつあつかひ聞えおほし立てならはし  
給へれば、俄に引きわかれて、戀しう思ひ聞え給へる、ことわ  
りなり。ひたすら世に亡くなりなむは、いはむ方なくて、い  
ふかひなきにても、やうく忘草も生ひやすらむ。聞くほどは  
近けれど、いつまでと限りある御別れにもあらぬをおぼすに、

盡きせず。なむ。入道の宮にも、春宮の御事により、あぼし  
歎くさま、いと更なり。御宿世のほどをおぼすには、いかが  
浅くはおぼされむ。年頃は、只物の聞えなどの、つつましさ  
に、すこし。なさけある氣色見せ。ば、それにつけて人の咎  
めいづる事もこそとのみ、ひとへにおぼし忍びつつ、あはれを  
も多う御覽じ過ぎし、すくくしうもてなし給ひしを、かばか  
りに憂き世の人言なれど、かけても此の方にはいひ出づる事  
なくてやみぬるばかりの人の御おもむけも、あながちなりし心  
の引く方に、まかせず、かつは目やすくもて隠しつるぞかしと、  
あはれに。思ひし。知れぬ御心はへのまめことにもはか  
なき事にもありがたきさまなどをおぼし。戀しうもいかが  
ぼし出でざらむ。御返りもすこしこまやかにて、此頃は、い  
とど、  
鹽垂るる事をやくにて松島に年ふるあまもなげきをぞ積む



浦にたくの歌 數多の人に包み  
隠す戀故に胸の中にくすぶつ  
てある思ひの晴らしやうが  
ませぬ。「浦にたく」は「あまた  
の枕詞。あまたのあまを海人  
とりなしたのである。この鹽  
しく海人と戀ひのひを火にとり  
歌である。煙を生みだす趣向の  
中納言の君の中納言の君の手  
紙の中納言の君の中納言の  
おぼしに「さま」などある。  
居る様子などを精一杯に書き  
居る様子などを精一杯に書き  
心殊に源氏が特別委細に書き  
送つた手紙の返事であるから  
浦人の歌 あなたの袖と遠く  
見れてある私の夜の衣と比  
び居りますか。どちらが餘計濡  
びさせたもので、浪の縁語。  
物の色し給へるさま 紫上が送  
仕立具合などは、紫上が送  
何事にも 紫上は何事にも功  
で居られるか。紫上は何事にも  
氣は理的か。紫上は何事にも  
く居られるか。紫上は何事にも  
ひどく残念で。紫上は何事にも  
思ふさまにて 下の「しめやか  
なぞや」 どうしてそんな事が出  
來ようぞ。

關月夜  
かんの君の御返りには、

「浦にたくあまたに包む戀なればくゆる煙よゆく方ぞなき  
更なる事どもはえなむ」とばかりいささかにて、中納言の君  
の御返りの中にあり。おぼし歎くさまなど、いみじくいひた  
り。あはれと思ひ。聞え給ふふし。もあれば、うち歎  
かれ給ひぬ。姫君の御文は、心殊にこまやかなりし。御返りな  
れば、あはれなること多くて、  
浦人のしほ汲む袖にくらべ見よ波路隔つるよるのころもを  
物の色、し給へるさまなど、いと清らなり。何事もらう  
らうじう物し給ふを、思ふさまにて、今は殊に心あわたしう  
行きかかづらふかたもなく、しめやかにてあるべきものを、と  
おぼすに、いみじう口惜しう、夜晝面影に覺えて、堪へがた  
く思ひいでられ給へば、なほ忍びてや迎へまし、とおぼ  
す。またうち返し、なぞや、かく憂き世に罪をだに失はむ、と

大殿の左大臣からの返事には、  
おのづから自然の機もあ  
て居る事、何れも配する事  
な道より却つての道は、  
の迷はぬ親の道は、  
後撰の御文、親の心は、  
關の御文、親の心は、  
書ぬるか。親の心は、  
伊勢の宮へ。六條御息所。  
源氏の義をまたずして、わ  
さいたり。造詣深く見えた。  
げは事、お目に懸る事、  
長給ふ事、お目に懸る事、  
居給ふ事、お目に懸る事、  
に給ふ事、お目に懸る事、  
源は、お目に懸る事、  
宮は、お目に懸る事、  
も程は、お目に懸る事、  
うきめは、お目に懸る事、  
須磨は、お目に懸る事、  
歌は、お目に懸る事、  
の歌は、お目に懸る事、

あ・ぼせば、やがて御さうじんにて、あけくれ行ひ。ておは  
す。大殿の若君の御事などあるにも、いと悲しけれど、おの  
づからあひ見てむ。頼もしき人々物し給へば、  
うしろめたらはあらず、とおぼしなさるるは、なか／＼この道  
は惑はれ給はぬにやあらむ。  
まことや、さわがしかりし程の紛れに、漏らしてけり。か  
の伊勢の宮へも御使ありけり。かれよりも、ふりはへ。尋ね  
まわれり。浅からぬ事ども書き給へり。言の葉筆づかひなどは、  
人より、殊になまめかしう、いたり深く見えたり。御息所、なほ  
つつとは思ひ給へられぬ御すまひを承る。も、明けぬ夜の心惑  
ひか。と。なむ。さりとも年月は隔て給はじと思ひやり聞え  
さするにも、罪深き身のみこそ、又聞えさせむ事も遙かなるべ  
けれ。  
うきめ刈る伊勢をの蜚を思ひやれ藻鹽垂るてふ須磨の浦にて







仕うまつるべき由 修理すべき  
やう申し遣はず

限りある女御御息所にも 膾月  
夜は定まつた閨中の務を持つて  
ある女御や御息所でもなく、尙  
侍といふおもて勤めの役である  
おからといふ事で源氏との關係を  
又かの憎かりし故こそ 又かの  
憎い源氏故に膾月夜も嚴罰を受  
ける事になつたのだが

思ひいづる事のみ 膾月夜の心  
の内源氏の事のみが色々思ひ  
出されるのは勿體ない  
その人 源氏の事

院のおぼし宣はせし 故院御遺  
言の事は卷一、三九八頁参照  
涙ぐませ給ふに 朱雀院が

世の中こそ 世の中は生きて居  
つても詰らぬものだと思つたか  
ら、長生きしようとは思はぬ  
私が死んだらどう思ひますか

近き程の別れに つい程近い須  
磨の別れ(源氏との別)ほどにも  
思つてくれないうらうと思ふと  
残念です  
生ける世に 拾遺戀一「戀ひ死  
なむ後は何せむ生ける日の爲こ  
そ人は見まくほしけれ」

いづれに落つるにか 私の爲に  
か源氏の爲にか、どちらに對し  
てこぼれる涙でせう  
今まで御子たちの今まで淋し  
いととの間に皇子の不在が淋し  
い  
春宮を院の宣はせし 冷泉院を  
朱雀院の御猶子にして位を譲り  
給へと桐壺院の御遺言のあつた  
事  
よからぬ事も 弘徽殿が冷泉院  
をおして居る八宮をお立て申さ  
うとして居られるから  
若き御心の強き所なき 主上の  
御さま

やうの者など催させて、<sup>(ナリなど)</sup>仕うまつるべき由宣はず。<sup>(右大臣のまなむすめ故)</sup>  
かんの君は人笑へにいみじうおぼしくづほるるを、<sup>(い)</sup>おとどいと  
悲しうし給ふ君にて、せちに宮にも申し、<sup>(私微殿)</sup>うちにも奏し給ひけ  
れば、<sup>(何かは)</sup>限りある女御御息所にもおはせず、おほやけさま  
の宮仕<sup>(はな)</sup>とおぼしなせり<sup>(おもふけ給へりしを)</sup>。又かの<sup>(人の)</sup>憎かり  
しゆゑ<sup>(い)</sup>こそいかめしきことも出でこしか、許され給ひて参り  
給ふべきにつけても、<sup>(源氏の事)</sup>なほ心にしみにし事のみぞ、あはれに覺  
え給ひける。七月になりて参り給ふ<sup>(うけり)</sup>。いみじかりし御思ひ  
の名残なれば、人の謗り<sup>(を)</sup>も知ろしめさ<sup>(し)</sup>れず、例のうへにつ  
と<sup>(うへ)</sup>さぶらはせ給ひて、よろづに恨み、かつはあはれに契  
ら<sup>(り)</sup>せ給ふ。御さまかたちも、いとなまめかしう清らなれ  
ど、思ひいづる事のみ多かる心の内ぞ<sup>(いと)</sup>忝き。御<sup>(おほむ)</sup>遊び<sup>(な)</sup>  
どのついでに<sup>(も)</sup>、<sup>(朱雀)</sup>その人<sup>(の)</sup>なきこそいとさうくしけれ。い  
かにましてさ思ふ人多からむ。何事にも、光なき心地<sup>(も)</sup>するか

な<sup>(な)</sup>と宣はせて、<sup>(桐壺院)</sup>院のおぼし宣はせし御心<sup>(こころ)</sup>を<sup>(を)</sup>たがへ<sup>(た)</sup>  
つるかな。罪得らむかし」とて涙ぐませ給ふ<sup>(へ)</sup>に<sup>(も)</sup>、<sup>(膾月夜)</sup>え念じ  
給はず。<sup>(朱雀)</sup>世の中こそあるにつけても<sup>(なきにつけても)</sup>常ならず  
あぢきなきものなりけれと思ひ知るままに、久しく世にあらむ  
ものとなむ更に思は<sup>(ほ)</sup>ぬ。さもなりなむに、<sup>(覚え)</sup>かがおぼさるべ  
き。近き程の別れに思ひおとされむこそねた<sup>(か)</sup>けれ。生け  
る世にとは、<sup>(む)</sup>げによからぬ人のいひおきけむ」と、<sup>(朱雀院が)</sup>いとなつか  
しき御さまにて、物をまことにあはれとおぼし入りて宣はず  
るに<sup>(こと)</sup>つめて、<sup>(膾のさま)</sup>ほろくとこぼれ出づれば、<sup>(朱雀)</sup>さりや。いづ  
れに落つるにか<sup>(ならむ)</sup>と宣はず。<sup>(朱雀)</sup>今まで御子たちの<sup>(た)</sup>なきこそ  
さうくしけれ。春宮を院の宣はせしさまに思へど、よからぬ  
事<sup>(こと)</sup>も<sup>(も)</sup>出でくれば、心苦しう<sup>(な)</sup>など、<sup>(主上の御心に背いて政事をされる人々があ)</sup>世を御心のほかにま  
つりごちなし給ふ人々のあるに、<sup>(わ)</sup>若き御心の強き所なき程にて、  
いとほしとおぼしたる事<sup>(こと)</sup>も多かり。





心づくしの秋風に 古今秋上  
木の間より漏りくる月の影見  
れば心づくしの秋は来にけり  
開吹き越ゆる 續古今露旅行平  
旅人は秋涼しくなりけり  
吹き越ゆる須磨の浦風

そばだて、白樂天の遺愛寺鐘  
欵枕聽とあるのによつて書い  
た言葉。耳をたて、といふ意  
味。四方の嵐 四方に吹きめぐつて  
みる風。淋しさを強調した言葉。  
枕浮くばかりに 六帖五人磨  
の枕も浮きぬべらなり

戀ひわびての歌 浦波が都戀し  
さに堪へかねて泣くわが聲に似  
て聞えるが、あはれわが思ふ人  
の住む都から風が吹いて来るの  
であらう。  
げにいか思ふらむ 成程この  
人々は何と思つてゐる事だらう、  
私といふ者一人の爲に身の程々  
につけてゐる家と別れて、離れ  
難く思つてゐる家を失つてゐるよ  
の通り落着き場を失つてゐるよ  
さうで、とお思ひになると、ひどく可愛  
さうで。

色々の紙を さまぐりの色の紙  
を繼合せて。

照。人々の語り 卷一、一七一頁參

げに及ばぬ磯の 成程話の通り  
に想像も詞も及ばぬ程美しい磯  
の景色を類なく巧に書き集めら  
れた。  
千枝常則 河海抄「千枝常則、  
在二高名録、共以畫工也」  
作繪 墨繪の上を彩色する事。

所がらはまして 須磨といふ場  
とも思はれない。人間界のもの  
白き綾のなよやかなる 白い綾  
の柔らかな下著に紫苑色の指貫を  
召し、綺麗な色合の御直衣に、  
帯もしまりなく打寛るいで居ら  
れるお姿で。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行  
平の中納言の關吹き越ゆるといひけむ浦浪、夜々はげにいと近  
く聞えて、又なくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。

源氏の  
お前にいと人ずくなにて、うち休みわたれるに、獨り目をさ  
まし。結ひ  
て、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、浪ただこ  
もとに立ち來る心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばか  
りになりけり。琴をすこし掻鳴し給へるが、我ながらいとす  
ごう聞ゆれば、弾きさし給ひて、

源氏の  
戀ひわびて泣くねに紛ふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ  
と謠ひ給へるに、人々あどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれ  
で、あいなう起き居つつ、鼻を忍びやかにみわたす。げにい  
かに思ふらむ、わが身一つにより、親はらから片時立ち離れが  
たく程につけつつ思ふらむ家を別。がたく思ふらん家路を離  
て斯く惑ひあへる、と。おぼすに、いみじくて、いとかく思

て磨る様子を  
ひ沈むさまを、心細しと思ふたらうと思召すので

はぶれごとうち宜ひ紛らはし、つれづれなるままに、色々の紙  
をつぎつつ、手習をし給ふ。珍しきさまなる唐の綾などに、さ  
まぐりの繪どもをかきすさび給へる、屏風のおもてどもなど、  
いとめでたく見どころあり。いっぞや山寺にて、人々の語り聞  
えし海山の有様を、遙におぼしやりしを、御目に近くては、

げに及ばぬ磯のたたずまひ、になく書き集め給へり。人々「此頃の  
上手にすめる千枝常則など召して、作繪を仕うまつらせばや」  
と、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有様  
に、世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕うまつるを嬉しきことに

て、四五人ばかりぞつとさぶらひける。前栽の花いろく咲き  
みだれ面白き夕暮に、海見やらるる廊に出で給ひてたたずみ給  
ふ御さまの、ゆゆしう清らなること、所がらはましてこの世の  
ものとも見え給はず。白き綾のなよやかなる、紫苑色など



釋迦牟尼佛弟子 經文を誦する時最初に「釋迦牟尼佛弟子、某歸命頂禮白佛言云々」と唱へ

黒木の御数珠に 白い手に黒木の數珠の映えた美しきを見て

はつかりはの歌 初雁は私が戀しく思つてゐる人の仲間なのだを飛ば行くが悲しく聞える空をかきつらねの歌 雁は昔の友ではないが 雁の聲を聞くと、列ねは次と昔の事が思はれる。心からの縁語。自分のすきで故郷の常世の國を捨てて旅の空に鳴く雁を、昔は自分とは無關係なものと思つたに、今思へば自分の境遇と同じものでした。さきの右近のじやう 伊豫介の子で紀伊守の弟。假の隨身を勤めた人。

常世出でての歌 私共も源氏や傍輩達と一緒に居る間は旅の悲しさがまぎれる。

所々眺め給ふらむ あちこちの婦人達もこの月を眺めて居られるだらうと。二千里外故人心 文集十四「三夜中新月色 二千里外故人心」

霧や隔つる 賢木卷藤壺の歌 一九重に霧や隔つる雲の上の月を遙に思ひやるかな 卷一、四二六頁参照。

見る程ぞの歌 自分が都で戀人達に再會の機は遠いが、月を眺めてゐる間は暫時氣がまぎれる。恩賜の御衣は 菅家後集「去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷、恩賜御衣今在此、捧持毎日拜二餘香」

奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなく打亂れ給へる御さまにて、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆるるかに讀み給へる。又世に知らず聞ゆ。沖より舟どもの謠ひののしりて漕ぎゆくなども聞ゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮べると見やらるるも、心細げなるに、雁のつらねて鳴く聲、楫のおとにまがへるを、うち眺め給ひて、御涙のこぼるるを搔き、拂ひ給へる御手つき、黒木の御數珠にはえ給へるは、故郷の女、戀しき人々の心、皆慰みにけり。はつかりは戀しき人のつらなれや旅の空飛ぶ聲のかなしきと宣へば、良清、かきつらね昔のことぞ思ほゆる雁はその世の友ならねども民部の大輔、心から常世を捨てて鳴く雁を雲のよそにもおもひけるかなさきの右近のじやう、

「常世出でて旅の空なる雁がねもつらにふくれぬ程ぞ慰む友まどはしてはいかに侍らまし」といふ。親の常陸になりてくだりし、にも誘はれて參れるなりけり。したには思ひ碎くべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりとおぼし出でて、殿上の御遊び、戀しく、所々眺め給ふらむかしと思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。「二千里外・故人心」とずし給へる、例の涙もとどめられず。入道の宮の、「霧や隔つる」と宣はせしほど、いはむかたなく戀しく、折々の事、思ひ出で給ふに、よよと泣かれ給ふ。「夜更け侍りぬ」と聞ゆれど、なほ入り給はず。見る程ぞしばし慰むめぐりあはむ月の都ははるかなれどもその夜、うへのいとなつかしう昔、物語などし給ひし御さまの、院に似奉り給へりしも戀しく思ひ出で聞え給ひて、「恩賜











思ひかへし給ふ 紫上を伴ひた  
く思ふ心を反省なさる。

めざましう忝う 高貴の身分で  
ありながら、今までと變つたわ  
がさまを、自分ながら今の様を  
勿體なく思ふのである。

山賤の歌 わが戀ふる故郷人  
よ、度々私を尋ねて来て下さい。  
「山賤のいほりに焚ける」は「し  
ばしば」の枕詞。

大輔 民部大輔即ち惟光。

異物の聲どもは 他の樂器の聲  
は皆やめて。漢の元帝の時胡國  
昔胡の國に 漢の元帝の時胡國  
に遣された王昭君の事。西京雜  
記や唐物語に見え。まして昭  
君自身の心の中はどうであつた  
らう。

霜ののちの夢 朗詠下雜大江朝  
綱「胡角一聲霜後夢、漢宮万里  
月前腸」

唯これ西に行くなり 菅家後集  
「芙蓉桂芳半具圓、三千世界一  
周天、天通玄鑿雲將舞、唯是西  
行不左遷」  
いづかたのの歌 私も何處の空  
にまご／＼する事だらう。月は  
雲路にも迷はず往還してゐる。  
その月の手前も恥かしい。

友千鳥の歌 友千鳥が聲をあは  
せて鳴いて居る曉は、一人寢覺  
の床に泣いて居つても、泣く友  
達があると思つて力強い。

珍らしき事の 京にあつては念  
誦される事もなかつたのだか  
ら。

家に 伺候の人々の須磨におけ  
る私宅。

う覺え給へど、わが身だにあさましき宿世……と覺ゆるす  
まひにいかでかは。打具しては……つきなからむさま  
を思ひかへし給ふ。所につけては、よろづの事さま變り、見給  
へ知らぬ下人のうへをも……見給ひならはぬ御心地に、  
めざましう忝うみづから……おぼさる。煙のいと近く時々立ちく  
るを、これや海士の鹽焼くならむとおぼしわたるは、おはしま  
すうしろの山に、柴といふものふすぶるなりけり。珍らかにて、  
山賤のいほりに焚けるしは……も言問ひこなむ戀ふる里人  
冬になりて、雪降り荒れたる頃、空の氣色も殊にすぐ眺め給  
ひて、きんを弾きすさび給ひて、良清に歌うたはせ、大輔横笛  
吹き……て遊び給ふ。心とどめてあはれなる手など弾き給へるに、  
異物の聲どもはやめて、涙をのごひあへり。昔胡の國に遣はし  
けむ女をお……ぼしやりて、ましていかなりけむ、この世にわが  
思ひ聞ゆる人などを、さやうに放ちやりたらむ事、など思ふ。

も、あんな場合が實際起る事のやうに  
ずし給ふ。月いとあかうさし入りて、はかなき旅の御座所は、  
奥まで限なし。ゆかの上に夜深き空も見ゆ。入りがたの月・凄  
く見ゆるに、「唯これ西に行くなり」と獨りごち給ひて、  
いづかたの雲路に我も迷ひなむ月の見るらむ事もはづかし  
と獨りごち給ひて、例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いとあ  
はれに鳴く。  
友千鳥もろごゑに鳴くあかつきは一人寢ざめのところも頼もし  
まだ起きたる人もなければ、かへすく獨りごちて臥し給へり。  
夜深く御手水まゐりて、御念誦などし給ふも、珍らしき事のや  
うに、……めでたくのみ覺え給へば、見え奉り捨てず、  
……家にあからさまにもえ出でざりけり。  
明石の浦はただ這ひ渡る程なれば、良清の朝臣、かの入道  
のむすめを思ひ出でて文などやりけれど、返りごともせず。父



承け引かざらむ、先方が不承知  
けしうの空手、わざと出か  
阿呆らしく見えようと、ひどく  
氣が引けて。

世に知らず心高う、入道は非常  
に高くとまつてゐるのだが、國  
のうちはその國の人々は國  
守の類のみ尊重してゐるや  
うだが、入道の偏屈な心には、  
良清が前國守の子であるけれど  
も尊重もせず、今迄過して来た  
のであるが、明石上の母君、即ち入道  
の妻。

あこの御宿世にて、娘が源氏に  
嫁ぐといふ宿縁故にこんな思ひ  
がけない事があるのだ。

御め 御妻、即ち愛人。

御門の御め 朧月夜の事。

思ふ心殊なり 私には別の考が  
ある。

心をやりて 得意になつていふ  
のも頑固らしく見える。  
なめてめたくとも、いくら結  
構な事でも、娘を初めて縁づけ  
るのに、何も罪に當つて流され  
て来た人を選ぶ事はありますま  
い。さて心も、それでも娘に心  
をよめて下さるならとにかく。

故母御息所 桐壺更衣。

大臣 明石入道

北方

明石上

按察大納言 桐壺更衣  
かうさくなる。優れてゐるとい  
ふ評判を取つて。かうさくは警  
策の音で、きやうさくともい  
ふ。河内本は「優なる名取りて」

の。入道ぞ、「聞ゆべき事なむ。あからさまにたいめんもがな」といひけれど、承け引かざらむものゆゑ、行きかかりて、空しく歸らむうしろ手もをこなるべしと、くしいたうて行かず。世に知らず心高う思へるに、國のうちは、守のゆかりのみこそはかきこすにすめれど、ひがめる心は、更にさも思はで年月を経けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、入道、桐壺の更衣の御腹の源氏の光君こそ、おほやけの御かしこまりにて、須磨の浦に物し給ふなれ。あこの御宿世にて、覚えぬ事のあるなり。いかで斯かるついでにこの君に奉らむ」といふ。母、「あななたはや。京の人の語るを聞けば、やんごとなき御めどもいと多く持ち給うて、そのあまりに、忍びく御門の御めをさへ。あやまち給ひて斯くもさわがれ給ふなる人は、まさにかくあやしき山がつを心とどめ給ひてむや」といふ。腹立ちて、入道、え知り給はじ。思

ふ心殊なり。さる心をし給へ。ついでして此處にもおはしまさせむ」と、心をやりていふもかたくなしく見ゆ。まばゆきまでしつらひかしづきけり。母君、「なめてたくとも、物のはじめに、罪に當りて流されおはしたらむ人をしも心かけむ。さても心をとどめ給ふべくはこそあらめ、たはぶれにてもあるまじき事なり」といふを、いといたくつぶやく。入道、罪に當ることは、唐土にもわがみかどにも、かく世にすぐれ何事にも人に殊になりぬる人の、必ずあることなり。いかに物し給ふ君ぞ。故母御息所は、おのが叔父に物し給ひし按察大納言の御むすめなり。いとかうさくなる名を取りて宮仕に出だし給へりしに、國王すぐれて時めかし給ふ事並びなかりける程に、人のそねみ多くて亡せ給ひにしかど、この君のとまり給へる、いとめでたし。かく女は心を高くつかふべきものなり。おのれかかる田舎人なりとておぼし捨てじ」な



なつかしうあてはかに、やさし  
みがあつて、あでやかで。  
身の有様を、わが身の上を取る  
にも足らぬ者と自覺して。

思ふ人々、自分を愛してくれる  
親達。  
海の下にも、若紫巻にもあつ  
た。卷一、一七三頁参照。

年に二たび住吉に、この事は若  
菜上巻に見ゆる。

植ゑし若木の櫻、前に「植木ど  
もなどして」とあつた。二六頁  
参照。

南殿の櫻は、紫宸殿前左近櫻。  
一年の花の宴に、花宴巻に載せ  
られた事。卷一、三〇九頁以下  
参照。

いつとなくの歌、いつも大宮人  
が戀しいが、櫻をかざして遊ん  
だ春も来て、入戀しい。新古今  
春下赤人、百敷の大宮人は暇あ  
れや櫻かざして今日も暮しつ  
大殿の三位の中將、もとの頭中  
將、時世の覺え、右大臣の四君の夫  
であるから。

一つ泪ぞ、悲しい時に流れる其  
後撰雜二、嬉しきも愛きも心は  
一つにて分れぬものは涙なりけ  
り。

石の階、石の階段。  
聴色、何人も著用し得る衣服の  
色で、紅色紫色などの薄きをい  
ふ。

あらはに、丸見玉に見える。簡  
素なる住居のさまである。

どいひ居たり。このむすめすぐれたる・・・かたちならねど、  
・なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げに・・・や  
んどとなき人に・劣るまじかりける。身上が自ら思ふ心  
に思ひ知りて、高き人は我を何の數にもおぼさじ、程につけた  
る世をば更に見じ、命長くて思ふ人々に・おくれなば、尼にも  
なりなむ、海の底にも入りなむ、などぞ思ひける。父君、所せ  
く思ひかしづきて、年に二たび住吉にまうでさせけり。神の御  
しるしをぞ人知れず頼み・思ひける。

須磨には、年・返りて日長くつれ・なるに、植ゑし若木の  
櫻・ほのかに咲きそめて、空の氣色うららかなるに、よろづの  
事おぼし出でられて、うち泣き給ふ折々多かり。二月廿・日あ  
まり・いにし年、京を別れし時、心苦し・かりし人々の  
御有様などいと戀しく、南殿の櫻はさかりになりぬらむ、一年  
の花の宴に、院の御氣色、内の上のいと清らになまめいて、わ

が作れる句をずし・・・給ひしも・・・思ひ出で聞え給ふ。

いつとなく大宮人のこひしきに櫻かざしし今日も來にけり  
いとつれ・なるに、大殿の三位の中將は、今は宰相にな  
りて、人がらのいとよければ、時世の覺え・重くて物し給へ  
ど、世の中いとあはれにあぢきなく、物の折ごとに戀しく覺え  
給へば、事の聞えありて罪に當るともいかかはせむ、とおぼし  
なりて、俄にまうで給ふ・うち見るより珍らしく嬉しきにも、  
一つ泪ぞこぼれける。すまひ給へるさま、いはむ方なく唐めき  
たり。所のさま、繪にかきたらむやうなるに、竹編める  
垣しわたして、石の階松の柱、あろそかなるものから、珍らか  
にをかし。山がつめきて、聴色の黄がち・なるに、青鈍の狩衣  
指貫うちやつれて、殊更に田舎びもてなし給へるしも、いみじ  
う見るにゑまれて清らなり。取り使ひ給へる調度・も・假初に  
・して、おまし所・もあらは・に見入れらる。其、雙六の



彈棊 四角の中高の盤の兩方に  
碁子を置き、互に弾きあつて勝  
負を決する。

物參れるなど たべ物をおすす  
めするなどいふ事も、殊更に場  
所柄に相應しく、風流に調じて  
ある。

そこはかとなく 取止めもない  
事を喋舌るにつけても、彼等の  
考も自分の考と同じ事だ。

見やりなる 向ふに見える倉か  
何かの馬に食はせる稻を取出し  
て來るに、飛鳥井「飛鳥井  
飛鳥井に、宿りはすべし、お  
け、影もよし、みもひも寒し、  
み林もよし」

盡きすべくもあらねば 掛ひ筆  
には書き盡されさうもないので  
なまなかその一端も此處には記  
し得ない。

さいひながら 中將は前に  
「事の聞えありて罪に當るとも  
いかがはせむ」とはいひながら  
も。

醉の悲しみの 文集十七「醉悲  
瀧」涙春盃裏、吟苦支「願曉燭前」  
おのがじし 供人達も各自暫し  
の別を惜しむ様である。但し  
河内本に「はるかなる」とある  
のが穩當である。

故郷の歌 私はいつの春にな  
つたら歸つて故郷を見る事が出  
來よう、春に故郷に歸つて行く  
雁が羨しい。

飽かなくに 歌 私は飽きもせ  
ず、假の樂土なる須磨を去るの  
事です。都への道もまごつく  
よしあるさまにて 風流にして  
宰相から源氏に贈つた。かく忝い  
訪問に對する贈物にとて、かく  
ゆゆしう 勅勅を受けた人から  
の贈物は、不吉に思召されようけ  
れども、  
風に當りては 文選二十九「胡  
馬依三北風、越鳥巢三南枝」を引  
いて書いてある。故郷を忘れな  
いものだからの意。

盤、調度、彈棊の具など、田舎わざにしなして、  
念誦の具、物參れる、など、殊更、所はつけ、興  
ひけりと見えたり。物參れる、など、殊更、所はつけ、興  
ありてしなしたり。蟹どもあさりして、かひつ物もて參れるを、  
召し出でて御覽ず。浦に年経る、さまなど問はせ給ふに、さま  
さま、安げなき身の憂へを申す。そこはかとなくさへ  
づるも、心のゆくへは同じ事なるかな。と、あはれに見給ふ。  
御ぞども、かづけさせ給ふを、生けるかひありと思へり。御  
馬ども近う立てて、見やりなる倉か何ぞなる、稻ども、取  
り出でて飼ふなど、珍らしう見給ふ。「飛鳥井」すこし謠ひて、  
月ごろの御物語、泣きみ笑ひみ、悲しさを、おとどのあけくれにつけて  
おぼし歎く。など、語り給ふに、堪へがたくおぼしたり。  
盡きすべくもあらねば、なか、片端もえまねばず。夜もす

がらまどろまず、文、作りあかし給ふ。さいひながら、  
の聞えをつつみて、急ぎ歸り給ふ。いとなか、なり。御かは  
らけ參りて、「醉の悲しみの涙そそぐ春の盃のうち」と、もろご  
ろにずし給ふ。御供の人ども、皆涙を流す。おのがじし、は  
つかなる別れ惜しむべかめり。朝ぼらけの空に、雁つれて渡る。  
あるじの君、

故郷をいづれの春か行きて見むうらやましきは歸る雁がね  
宰相、更に立ち出でむ心地せで、  
飽かなくに 假の常世を立ちわかれ花のみやこに道や惑はむ  
さるべき都のつとなど、よしあるさまにてあり。あるじの君、  
かく忝き御あくりにとて、黒駒奉り給ふ。ゆゆしうおぼされ  
ぬべけれど、風に當りては、いばえぬべければ、など申し  
給ふ。世にありがたげなる御馬のさまなり。形見にしのび給  
へ」とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり、人、咎めつべ



さりとも斯くてやは、いかん何  
でも、いつまでも此儘ではござ  
いますまい。私に春日の晴れた  
雲近く歌は、私に春日の晴れた  
やうに潔白な身です。  
かつは頼まれながら、歸京も出  
來る事と一方では頼みに思はれ  
ながら、昔の賢人では、又と  
立派に世に立つ事、何かし、又  
事、二度と見ようとは思ひませ  
ぬ。地を二度と見ようとは思ひませ  
ぬ。

たづかなきの歌、私は都で頼り  
ない思ひをしながらあなたを戀  
ひ慕つて居ります。拾遺戀四「思ふと  
いとこそ人に馴れざらめ然な  
らひてぞ見ねば戀しき」

げんじやう 軟障。幕の類。

人形、なで物又形代ともいふ。  
陰陽師が身をそぎ又は祈禱の時に  
用ひる人形で、紙などを人の形  
に切り、身を撫でてその身の災  
をこれに移して水に流す。  
知らざりし歌、私は今迄知り  
もしなかつた大海原に人形のや  
うに流れて来て、物悲しさは一  
方でない、いろ／＼と思ひなや  
んでゐる。

八百萬の歌、すべて天神地祇  
も私に同情して下さるでせう、  
すから、これといふ犯した罪もないので  
すから。

眩笠雨、驟雨。傘が間にあはな  
いから眩で雨をよける意。

さる心もなきに、こんな天氣に  
なりさうな様子もなかつたの  
に。

きこととは、かたみにえし給はず。日やう／＼さしあがりて、  
あわただしければ、顧みのみしつづつ出で給ふを、見送り給ふ氣  
色、いとなか／＼なり。中將、いつ又たいめん賜はらむとすらむ。  
さりとも斯くてやは」と申し給ふに、あるじ。

「雲近く飛びかふたづも空に見よ我は春日の曇りなき身ぞ  
かつは頼まれながら、かくなりぬる人は、昔の賢き人だに、  
はか／＼しう世に又まじらふ事難く侍りければ、何か、都の境  
を、又見むとなむ思ひ侍らぬ」など宣ふ。宰相、

「たづかなきの雲居に獨りねをぞなく翅並べし友を戀ひつつ  
もとくやしう思ひ給へらるる折多く、」など、しめやかに  
あらで歸り給ひぬる名殘、いとど悲しう眺めくらし給ふ。

三月のついでにたちに出で來たる巳の日、「今日なむ、斯くおぼす事  
ある人は、御禊し給ふべき」と、なまさかしき人の聞ゆれば、

海・づらもゆかしく出で給ふ。いとあろそかに、げんじやう  
ばかりを引きめぐらして、この國に通ひける陰陽師召  
して、祓へせさせ給ふ。舟に事々しき人形、乗せ  
て流すを見給ふにも、よそへられて、  
知らざりし大海の原に流れ來てひとかたにやは物は悲しき  
とて居給へる。さま、さるはれに出でて、いふよしなく見え給  
ふ。海のおもては、うらくと風ぎわたりて、ゆくへも知らぬ  
に、こし方行く先おぼしつづけられて、

八百萬神もあはれとおもふらむ犯せる罪のそれとなければ  
と宣ふ。に、俄に風吹き出でて、空もかきくれぬ。御  
祓へ、もし果てず、立ちさわぎたり。眩笠雨とか降り來て、い  
とあわただしければ、皆歸り給はむとするに、笠も取りあへ  
ず。さる心もなきに、よろづ吹き散らし、またなき風なり。  
波いといかめしう立ち來て、人々の足を空なり。海のおもては、



衾を張りたむやうに 一面に  
光る形容。

氣色づきて 前以てそんな様子  
があつて吹き出すものだ。

高潮 海嘯。

そのさまとも見えぬ人 人間  
しくも見えない人が来て。人  
宮 宮中の事であるが、源氏は  
それを龍宮と考へたのである。

さは さては。以下源氏の心中。

物むつかしう 氣色がわるく。

衾ふすまを・張(引き)りたらむやうに光りみちて、神鳴りひらめく。落ち  
 かかる心地して・・・・・辛うじてたどり来て、かか  
 る目は見ずもあるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ。  
 あさましう珍(めづ)らかなり」と惑ふに、なほやまず鳴りみちて、  
 雨の脚當る所・通りぬべくはらめき落つ。かくて世は盡(果)きぬ  
 るにやと・・・心細く思ひ惑ふに、君はのどやかに經(さやう)うちずし  
 ておはす。暮れぬれば、神・すこし鳴りやみ・・・て、風ぞ・夜  
 も吹く。多く立てつる願(ぐわん)の力なるべし。人々「今暫し斯くだにあら  
 ば、波に引かれて入りぬべかりけり。高潮といふものになむ、  
 取り・あへず人そこなはるとは聞けど、いとかかる事はまだ  
 知らず」といひあへり。曉がた、皆うちやすみたり。君も  
 聊か寝入り給へれば、そのさまとも見えぬ人來て、「など・宮よ  
 り召しあるには參り給はぬ」とて、たどりありくと見・るに、  
 おどろきて、さは海の中の龍王の、いといたう物めでするも

のにて、見入自分れたるなりけりと思すに、いと・物むつかしう、  
 このすまひ堪へがたくおぼしなりぬ。



あ



なほ雨風やまず 上巳の祓の時  
から引續いての事。

心強うしも 源氏は氣を強くも  
お持ちになれない。斯かりとて  
斯かりとて こんなた變がある  
からといつて。

いとかるくしき名をや 結局  
輕率といふ惡名を流すがおちだ  
らうと。

ただ同じさまなる物 須磨巻に  
あつた宮へ召す事をいふ。

雲間もなく 雲の晴間もなく明  
け暮れる日数が重なるにつれ  
て。いとど覺束なく さうでなく  
も都の音信が少いのに天候がわ  
るいから一層使も来ないの意。

あながちにあやしきみすぼら  
しい蓑笠姿で使が無理やりにび  
しよ濡れでやつて来た。あなが  
ちに「そぼち參れる」を修飾  
する。

なほ雨風やまず、神鳴りしづまらで日頃(経・心)になりぬ。いと(源氏の心)・物わ  
びしきこと數知らず。きし方行く先悲しき御有様に、心強うし  
もえおぼしなさを。いかにせまし、斯かりとて、都に歸らむこ  
とも、勅許もなくしてまだ世に許されもなくては、人笑はれなる事こそまさら  
め、なほこれより深き(からん)・山を求めてや跡絶えなまし、とお(も)・  
ぼすにも、「波風に騒が(さ)・れて」な(ん)・ど人のいひ傳へむ事(の)、後  
の世まで、いとかるくしき名を(さ)・や流し果てむとおぼし亂  
る。御夢にも、全然同じ姿のものがただ同じさまなる物のみ來つつ、まつはし聞ゆ  
と見給ふ。雲間もなく明け暮るる日數に添へて、京(事)の方もいと  
ど覺束なく、此儘身を滅してしまふ事かとかくながら身をはふらかしつるにやと、心細う思  
せど、頭さし出づべくもあらぬ空(荒れ空の爲に)の亂れに、出で立ち參る人も  
なし。禁上の方二條の院よりぞ、あながちにあやしき姿にて、そぼち參  
れる。途中ですれちがつても道かひにてだに、人間人か何ぞとだに御覽じ分くべくもあら  
ず、まづ追ひ拂(ふ)ひつべきしづ(賤)づのを、男あはれに睦まじうおぼさ



くしにける 卑屈になつた。

ながめやる方なくむどちら  
むいとも見はらしがきかぬとい  
ふ意と思ひながめたる方法がな  
いといふ歌とかねてある。浦風  
浦風やい歌の袖を涙の波が絶え  
ず濡らして居る此頃、須磨の事  
ざいませう。吹いて居る事でご  
ざいませう。

仁王會 朝家の御祈の爲に、毎  
年三月及び七月に吉日を選んで  
大極殿又は紫宸殿清涼殿などで  
はれる。仁王護國般若講せしめ  
られる。年中行事。又臨時にも行

いぶかしうて 開きたくて。

氷雹。ひさめ。

ある限り 此處に居る人誰一人  
氣のたしかかな者はない。

何ばかりの 自分は何程の過失  
があつて此の落で命を失はうや  
と、氣を強くして見られるけれ  
ども。任吉の神河海。神功皇后廿一  
年辛丑住吉朝神顯。古語拾遺云、  
至辛丑日本紀云、浮瀨於湖上因  
生神凡有九神其表筒男中筒男以  
命底簡男命三鎮座焉是即今住  
吉明神者社中鎮座焉是即今住  
誠に跡を垂れ給ふ皇太后云々。垂跡の  
神即ち佛菩薩が衆生の爲に  
假に神とあらはれるのなりば。  
みづからの命はさるものにて  
またなき例に前例もないうや  
悲しくかたをなされさうなやう

るも、我ながら忝く、くしにける心の程。おもひ知らる。御  
女には、案上文あさましくをやみなき頃の氣色に、いとど空さへ  
閉づる心地して、ながめやる方なくなむ。

浦風やいかに吹くらむ思ひやる袖うち濡らし波間なき頃」

あはれに悲しき事ども、書き集め給へり。引きあくより、  
いとど汀・まさりぬべく、かきくらす心地し給ふ。京にも、

「この雨風、いと怪しき、物のさとしなり」とて、仁王會など行

はるべしとなむ聞え侍りし。うちに參り給ふ上達部なども、

すべて道閉ぢて、まつりごと絶えてなむ侍る」など、は

かしくしもあらず、かたくなしう語りなせど、京のかたの事

とおぼせば、いぶかしうて、お前に召しいでて問は

せ給ふ。只例の雨のをやみなく降りて、風は時々吹き出でつ

つ日頃になり侍るを、例ならぬ事に驚き侍るなり。いとが

く地の底・通るばかりの氷降り、いかづちのしづまらぬ事は侍

らざりき」など、いみじきさまに驚きおぢてをる顔の  
いとからきにも、心細さまさりける。

斯くしつ世は盡きぬべきにやと思さるるに、その又の日の曉

より風いみじう吹き、潮高う満ちて、浪の音・荒き事、い

はほも山も残るまじき氣色なり。神の鳴りひらめくさま、更に

いはむ方なくて、落ちかかりぬと覺ゆるに、ある限り、さか

しき人なし。「我はいかなる罪を犯して、かく悲しき目を見るら

む。父母にもあひ見ず、悲しきめこの顔をも見て死ぬべきこと」

と歎く。君は御心をしづめて、何ばかりのあやまちにてか此の

渚に命をばさばめむ、と強うおぼしなせど、いと物さわがしけ

れば、色々のみてぐら捧げさせ給ひて、住吉の神、近き境を

鎮め護り給ふ。誠に跡を垂れ給ふ神ならば、助け給へ」と、多

くの大願を立て給ふ。あのみづからの命をばさるもの

にて、斯かる御身の、またなき例に沈み給ひぬべき事のいみじ



心を起して 皆が氣を引立て

沈めるともがらそ 悲境に居る  
人達を多くお救ひなされた。  
今何の報にか 今何の應報で  
餘りにも非道な波風に溺れな  
るのだらう。河内本の如く「こ  
こら」のない方がよく聞える。

御社 住吉神社。

大炊殿 食物の調理所。

上下となく 身分の上下を問は  
ず皆大炊殿に籠つて。

このおまし所 源氏の假の居場  
所、即ち大炊殿と思しき屋。

踏みとどろかし 雷に縁を持た  
せての詞。

夜を明かしてこそはと 夜を明  
かしてからの事にしよう、人  
人が暗の中をまご／＼して居  
る時に。

近き世界に 此の近所に、事情  
を察し、過去未來の事を心得  
何やかやと此の天變の原因を  
つきり理解する人もゐない。

う悲しきに、心を起して、すこし物覺ゆる限りは、身をかへて、  
この御身一つを救ひ奉らむとどよみて、もろごゑに佛神を念じ  
奉る。「帝王の深き宮に養はれ、給ひて、いろ／＼の楽しみ  
おごり給ひしかど、深き御うつくしみ、大八洲にあまねく、沈  
めるともがらをこそ多く浮べ給ひしか。今何の報いにか、こ  
ら横さまなる波風にはおぼほれ給はむ。天地ことわり給へ。罪  
なくて罪にあたり、官位を取られ、家を離れ、境を去りて、  
明暮安き空なく歎き給ふに、かく悲しき目をさへ見、命盡きな  
むとするは、前の世の報いか此の世の犯しか、神佛あきらか  
にましまさば、この愁へや・め給へ」と、御社のかたに向きて、  
さま／＼の願を立て、又海の中の龍王よろづの神たちに願  
を立てさせ給ふに、いよく／＼鳴り轟きて、おはしますに續きた  
る廊に落ちかかりぬ。焔燃えあがりて廊は焼けぬ。心魂なくて、  
ある限り惑ふ。うしろの方なる大炊殿とおぼしき・屋に移し奉

りて、上下となく立ちこみて、いとらうかはしく泣きどよむ聲  
・・・いかづちにも劣らず。空は墨をすりたるやうにて日も暮  
れにけり。  
やう／＼風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、このお  
・・・まし所のいと珍らかなるもいと忝くて、寢殿に返し移し奉  
らむとするに、焼け残りたるかたもうとましげに、そこの人  
の踏みとどろかし惑へるに、御簾なども皆吹き散らしてけり。  
夜を明かしてこそはとたどりあへるに、君は御念誦し給ひて  
おぼしめぐらすに、いと心あわただし。月さし・・・て、しほの  
近く満ち・ける跡もあらはに、名残なほ寄せ返る浪荒きを、  
柴の戸押しあけてながめおはします。近き世界に、物の心を知  
り、さし方行く先の事打覺え、とやかやくやと・・・はか  
ばかしう悟る人もなし。あやしき海士どもなどの、たかき人お  
はする・所とて、集まり参りて、聞きも知り給はぬ事どもをさ



海にますの歌 海にまします龍  
神の助けがなかつたならば、潮  
の八百會の中に押流されてしま  
つた事だらう。八百會は潮の八  
方から集中する所。然りつ採みつ  
れりもみつる。何といつても荒  
君はひどくお疲れになつたの  
で。うじ給ひ お疲れになつたの  
忝き御座所なれば 勿體ない程  
の御座所故。

かしこき御影に なつかしい父  
上様にお別れて申して以來。

この渚に身をや この海岸で死  
んでしまひませう。

おのづから犯し 自分で氣のつ  
かぬ罪も犯して居たので。

その罪を終ふる程 死後その罪  
を償ふ爲に餘暇がなくて娑婆の  
事は顧みずに居つたけれども。

奏すべき事 源氏が早く歸京す  
るやうにとの事。

月の顔 月影の事。「人もなく  
る」の句に應じて書いたのであ  
る。

わが命の盡きようとして居つた  
のを助ける爲に天翔つて來られ  
たのだと源氏は嬉しく思召すに  
つた。名残もしう。夢の後で大變に  
頼もしく嬉しく思召される。夢  
を見なかつた方が却つてましな  
位に御心がかきみだされるの  
で。うつつの悲しき事 浪風の騒ぎ  
の事。

へづりあへるも、いと珍らかなれど、え追ひも拂はず。海王この  
風今暫しやまざらましかば、しほのぼりて、残る所なからまし  
（かりけり）。神の助けおろかならざりけり」といふを聞き給ふも、  
いと心細しといへばおろかなり。

海にます神の助にかからずば潮の八百會にさすらへなまし  
目ねもすにいりもみつるかせの騒ぎに、さこそいへ、いたうご  
うじ給ひにければ、心にもあらずうちまどろみ給ふ。忝き御座  
所なれば、只寄り居給へるに、故院。只おはしまししさまなが  
ら立ち給ひて、桐壺など斯くあやしき所には物するぞ」とて、御  
手を取りて引き立て給ふ。桐壺住吉の神の導き給ふままた、はや  
船出して、この浦を去りね」と宣はす。いと嬉しくて、源かし  
こき御影に別れ奉りにしこなた、さまく。悲しき事のみ多く  
侍れば、今は。この渚に身をや捨て侍りなまし」と聞えたまへ  
ば、桐壺いとあるまじき事。これは只聊かなる、物の報いなり。

我は位にありし時、あやまつ事なかりしかど、おのづから犯し  
ありければ、その罪を終ふる程いとまなくて、この世を顧みざ  
りつれど、いみじき憂へに沈むを見るに、堪へがたくて、海  
に入り渚にのぼり、いたくごうじにたれど、斯かるついでに、  
内。だいに奏すべき事あるによりてなむ急ぎのぼりぬる」とて、  
立ち去り給ひぬ。飽かず悲しくて、源御供に参りなむ」と泣き  
入り給ひて、見あげ給へれば、人もなくて、月の顔のみきらき  
らとして、夢の心地もせず、御けはひとまれる心地して、空の  
雲あはれにたなびけり。年頃夢のうちにも見奉らで、戀しう覺  
束なき御さまを、ほのかなれど、さだかに見奉りつるのみ面影  
に覺え給ひて、わが斯く悲しみを極め、命盡きなむとしつるを、  
助けに翔り給へるとあはれにおぼすに、よくぞ斯かる騒ぎもあ  
りけると、名残たのもしう、嬉しとおぼえ給ふ事かぎりなし。  
胸つとふたがりて、なかくなる御心まどひに、うつつの悲し

胸つとふたがりて、なかくなる御心まどひに、うつつの悲し  
の事。



いぶせさに 気が替して。

ちひさやかなる舟 明石入道か  
らの迎への舟。

前の守新發意 前播磨守入道、  
即ち明石入道の事。新發意とは  
新に發心して佛道に歸した人。

事の心取り申さむ 事情を申上  
げたい。

得意 知音。親しい友。

わたくしにいささかあひ怨むる  
事侍りて 明石上にいひ寄つて  
承引されなかつた事を怨んで。

はや逢へ はや舟に行つて入道  
に逢へ。

さま異なる物の 妙な形相のも  
のの告げ知らせる事がございま  
したので。

き事もうち忘れて、夢にも御いらへを今すこし聞えずなりぬ  
る事といぶせさに、又や見え給ふと殊更に寝入り給へど、更に  
御目もあはで曉がたになりけり。

渚にちひさやかなる舟寄せて、人二三人ばかり、この旅の御宿  
りをさしてく。「何人ならむ」と問へば、源氏の宿所「明石の浦より、前の  
守新發意の、御船よそひて參れるなり。良清の事源少納言さぶらひ給は  
ば、たいめんして事の心有様取り申さむ」といふ。良清おどろき

て、良清の事入道はかの國の得意にて、年頃あひ語らひ侍りつれど、  
わたくしにいささかあひ怨むる事侍りて、殊なるせうそこをだ  
に通はさで久しうなり侍りぬるを、浪のまざれに、いかなる事  
かあらむ」とおぼめく。君の御夢などもおぼしあはする事もあ  
りて、良清に「はや逢へ」と宣へば、舟にいきて逢ひたり。さばかり

激しかりつる浪風に、いつのまにか船出し良清は・つらむと、心得  
がたく思へり。入道にいぬる朔日の日の夢に、さま異なる物の告げ

かさねて示す事の 又々夢の告  
がございしたので。

用ひさせ給はぬまでも 私の申  
上げる事も源氏が御取上げなさ  
らぬまでも、この警示の十三日  
を過ぎずこの由を源氏におし  
せ申さうと思つて。

此處にももし こちらでもひよ  
つとしてお心當りの事でもござ  
いましてせうかと思ひまし  
て。さとしのやうなる 神のお告め  
いた事の思合せて御覽になつて  
世の人の聞き傳へむ 世人が聞  
き傳へて後是非難さるものが不  
快だらうといふ事を氣遣つて不  
もあらうのに、神明のお助けで  
目を見るか、又これ以上のお助け  
の心に背くのでさへ矢張心苦し  
いのだから。

知らずる事侍りしかば、信じがたき・事と思ひ給へしかど、  
『十三日あらたかなる靈験を示さうにあらたなるし見せむ。舟をよそひまうけて、必ず  
雨風やまば此の浦に寄せよ』と、かさねて示す事の侍りしかば、  
試みに船のよそひを設けて今日を・待ち侍りしに、いかめしき雨  
風、いかづちの驚かし侍りつれば、唐土人のみかどにも、夢を信じ  
て國を助くるたぐひ多う侍りけるを、用ひさせ給はぬまでも、  
このいましめの日を過ぐさず、この由を告げ申し侍らむとて  
・、舟いだし侍りつるに、怪しき風順風ほそ吹きて、この浦に著  
き侍り・る事、誠に神の・しるべたがはずなむ・・・・・侍り  
・。此處にももし知ろしめす事や侍りつらむとてなむ。いと  
も憚り多く侍れど、この由源氏に申し給へ」といふ。良清忍びやかに  
傳へ申す。君おぼしまはすに、夢うつつさま・・・・・静かならず、  
さとしのやうなる事どもを、きし方行く末・・・・・おぼしあはせ  
て、世の人の聞き傳へむのちの謗りも安からざるべきを憚りて、











いと傍痛きまで 餘處目も見と  
もな程に時々源氏に愚痴をこ  
ぼす。

かく覺えなくて 斯く思ひがけ  
ずも明石にめぐり來たのも、夫  
婦になるべき因縁があるのかと  
思召すが。

ただなるよりは 何事もなくて  
居るよりは、浮氣をしたと聞いて  
は、口がちがふと思はれるの  
が氣恥かしくて、意中をほのめ  
かされる事はない。

此處にはかしこまりて 入道は  
源氏の居られる處には遠慮して  
自分もあまり參上せず、こし離  
れた下屋に伺候する。

いかで思ふ心を せひ娘を差上  
げるといふ素志を達しようかと。  
年は六十 入道の年齢。

物きたなからず 老人はとかく  
小ぎたないものだが入道はさう  
ではなく風流な所もあるので。

くづし出て聞ゆ ぼつ／＼お  
話申上げる 斯かる所をも人をも  
のやうな所をも入道のやうな人  
をも見なかつたならば。

さこそいひしか 須磨卷に「あ  
この御宿世にて覺えぬ事のある  
なり」などといつた事を受けて  
いふ意味で、「つゝましましうなり  
て」を修飾する。  
母君 明石上の母君、即ち入道  
の妻。  
さうじみ 明石上の事。

身の程知られて わが身の間際  
が知られて、源氏の妻などいふ  
事は、逆も及びもつかぬ事と思  
つた。

かしこ ．．．あはれなる事多くて、よろづにおぼし慰まる。

あるじの 入道、行ひ勤めたるさま、深く行ひ澄ましてはあがいみじう思ひすましたるを、

只この娘一人をもてわづらひたる氣色、いと傍痛きまで時々漏源氏に

らし憂へ聞ゆ。御心地にも、明石上は美人だと聞いて居つたからをかしと聞きおき給ひし人なれば、

かく覺えなくてめぐりおはしたるも、ほさるべき契りあるにやと

思しながら、なほかう身を沈めたる程は、佛道修行行ひよりほかの事は

思はじ、都の人も、ただなるよりは、いひしに違ふと思さむも

心恥かしう思さるれば、氣色だち給ふ事なし。事に觸れて、

心ばせ有様なべてならずもありけるかな、なりとゆかしう思さ

れぬにしもあらず。此處にはかしこまりて、みづからもをさを

さ參らず、物隔たりたる下の屋にさぶらふ。たがさるは明暮見奉ら

まほしう、飽かず思ひ聞えて、いかで思ふ心をかへむと、佛

神をいよく念じ奉る。年は六十ばかりになり、むそぢたれど、いと

清げにあらまほしう行ひさらばひて、人行の爲に塵せて人の程のあてはかなれば

にやあらむ、うちひがみほれ、しき事はあれど、古への事を物

も見知りて、物きたなからず、よしづきたる事もまじれば、

昔の物語などせさせて聞き給ふに、すこしつれづれのまぎれな

り。源氏は公事私事に忙しくて年頃おほやけ私御いとまなくて、さしも聞きおき給はぬ世

の古事ども、くづし出でて聞ゆ。斯かる所をも人をも見ざら

ましかば、さう／＼しくやとまで、興ありとおぼす事もまじる。

かうは馴れ聞ゆれど、いとけだから心恥かしき御有様に、源氏のさ

こそいひしか、氣が引けてつつましうなりて、わが思ふ事は心のままにも

え打ちいで聞えぬを、心もとなう口惜しと、母君と、いひ合せ

て歎く。さうじみも、田舎の事故おしなべての人だに目やすきは見えぬ世

界に、なれば世には斯かる人もおはしけりと、ほの見奉りしにつけ

て、明石上の心に身の程知られて、いと遙かにぞ思ひ聞えける。親たちの

斯く思ひあつかふを聞くにも、明石上の心に似げなき事かなと思ふに、ただ

なるよりは物あはれなり。



よろづに 萬事に身をいれてお  
世話申上げるさまを。  
人さまの 入道の人柄の飽くま  
で氣位を高く持つてゐる態度が  
上品なのに免じて黙つて居られ

住み馴れ給ひし故郷 二條院の  
事は。いむかたなく戀しきこと  
とあていへない戀しきが、いづ方  
な頼りない心持がなさつて。  
あはと遙かに 新古今雜上射恒  
一淡路にてあはと遙に見し月の  
あはと見るの歌 隈なく澄み渡  
つた月下で 淡路島を眺めてゐ  
ると、鳥ばかりでなく哀愁まで  
もかくれるところなく全貌を表  
はす。初二句はあはれの枕詞を  
あはと 所謂孔子琴の事。  
かうれう 花鳥「廣陵散は琴の  
秘曲なり。嵇康が華陽の亭に  
て神人にあひて傳へたる曲也。  
り」晋書嵇康傳に委し。變化な  
かの岡邊の家 明石上の住む

しはふる人 賢木卷卷一、四二  
二頁参照。  
濱風を引きありく 風邪にかゝ  
るのも忘れて濱邊をうろついて  
ゐる。更に背きにし世の中も一度捨  
てた浮世の事も又跡戻りして思  
ひ出されさうです。

折々の御遊び 禁中で催された  
管絃の御遊、誰や彼やの奏する  
琴や笛、又は歌の謠ひ振。  
こと笛 彈物や笛。「こと」は絃  
樂器の總名。

ふる人 老人。明石入道の事。

さまざまいみじうのみ 入道は  
源氏が七絃琴も十三絃琴も堪能  
なのに感心した。

四月になりぬ。衣がへの御さうぞく、御帳の帷子など、よしあ  
るさまにし。いづ。よろづに仕うまつり營むを、いとほしうすず  
るなりとおぼせど、人さまの飽くまで思ひあがりたるさま  
のあてなるに、おぼし許して見給ふ。京よりもうちしきりたる  
御とぶらひども、たゆみなく多かり。のどやかなる夕月夜に、  
海の上くもりなく見えわたれるも、住み馴れ給ひし故郷の池・  
水に思ひまがへられ給ふに、いはむ方なく戀しき事、いづかた  
ともなくゆくへなき心地し給ひて、只目のまへに見やらるるは  
淡路島なりけり。あはと遙かに」など宣ひて、  
あはと見る淡路の鳥のあはれさへ残る隈なく澄める夜の月  
久しう手も觸れ給はぬきんを、袋よりとり出で給ひて、はかな  
く搔き鳴らし給へる御さまを、見奉る人もやすからず、あはれ  
に悲しう思ひあへり。かうれうといふ手をおろし給ひて、心ば  
し給へるに、かの岡邊の家も、松の響き波の音にあひて、

せある若き人は、身にしみて思ふべかんめり。何とも聞きわく  
まじきこのもかのものはふる。人どもも、すずろはしくて、  
濱風を引きありく。入道もえ堪へて、供養法たゆみて、いそぎ  
參れり。入道更に背きにし世の中も取りかへし思ひ出でぬべく侍  
る。のちの世に願ひ侍る所の有様も、思ふ給へやらるる夜のさ  
まかな」と、泣く／＼めで聞ゆ。わが御心にも、折々の御遊び、  
その人かの人のこと笛、もしは聲の出だしさま、時々につけて  
世にめでられ給ひし有様、御門より始め奉りて、もてかしづき  
あがめられ奉り給ひしを、人の上もわが御身の有様も思し出で  
られて、夢の心地し給ふまに、搔き鳴らし給へる聲も、心す  
ごく聞ゆ。ふる人は、涙もとめあへず、岡邊に琵琶箏の  
琴取りにやりて、入道琵琶の法師になりて、いとをかしう珍ら  
しうて一つ二つ弾きいでたり。箏の御琴まゐりたれば、すこし  
弾き給ふも、さまざまいみじうのみ思ひ聞えたり。いとさしも



物の滞りなき 一望千里視路を  
妨げるものなき

たが門さして 伊行釋「まだ宵  
して打來て叩く水鶏かな誰が門さ

御心とまりて 源氏には面白く  
しどけく 氣らくな撥どりて彈  
大方に宣ふを 源氏は明石上の  
事の心に持ちながら而も一般  
遊ばすより 懐しい態度で彈く  
より以上 懐しい御手から筆の  
老は延喜の帝の御手から筆の  
法を傳授した三代目に當るの  
あやしう それを下手に眞似す  
然るもの前大王の御奏法に似て居  
ります 前大王の御奏法に似て居  
せむだい 前大王の御奏法に似て居  
す 前大王の御奏法に似て居  
山伏のひが耳に 松風の音を  
私の聞き誤から 違つて感心して  
居るのせう

琴を奏とも 私の下手な琴など  
は琴の上の閑い家で下さるま  
は程の上手の閑い家で下さるま  
彈いたが残り念です 古歌「松  
風にも思はざりけり」

その御筋にて その御血統の方  
が中斯うにこれといつて跡をつ  
この奏法は甚だ興味深い事  
といふ事は甚だ興味深い事  
と召さむに 召さむに 召さむに  
らば何の遠慮なく 召さむに  
娘を御前に 召さむに 召さむに  
商人のなかに 召さむに 召さむに  
海陽江のなかに 召さむに 召さむに  
に買入の妻となつた女から琵琶  
の音を聞き 召さむに 召さむに  
誠の長手弾き 召さむに 召さむに  
の弾き手は 召さむに 召さむに  
などなく 召さむに 召さむに  
荒波の聲に 召さむに 召さむに  
そなたの 召さむに 召さむに  
あつたに 召さむに 召さむに

聞えぬ物のねだに、折時と場合によつては面白く聞えるものだがからこそはまさるものなるを、はるく  
と物の滞りなき海海岸づらなるに、なか／＼春秋の花紅葉のさかり  
なるよりは、只そこはかとなう茂れる蔭どもなまめかしきに、  
水鶏のうち叩きたるは、たが門かどさしてとあはれにも・ぼゆ。ね  
もいと二なう出づる琴ことどもを、いと人道がなつかしう弾き鳴らしたる  
も御心とまりて、源これは、女のなつかしきさまにて、しどけ  
なく弾きたるこそをかしけれ」と、大方に宣ふを、入道は、あ  
いなくうちゑみて、入道遊ばすよりなつかしきさまなるは、いづ  
このか侍らむ。なにがし、延喜の御門の・御手より弾き傳へた  
る事三代さんだになむなり侍りぬるを、かう拙不遇の身でき身にて、この世の事  
は捨て忘れ侍りぬるを、物のせちにいふせき折々は、搔鳴らし  
侍りぬるを、あやしう明石上の事まねぶもの侍るこそ、じねん自然にかのぜ  
むだんいわうの御手に通ひて侍れ。山伏のひが耳に、松風を聞き  
渡し侍るにやあらむ。いかで娘の筆の音を耳に入れたいものですこれ忍びて聞召させてしがな



と聞ゆるままに、うちわななきで、涙おとすべかめり。君、  
「琴ことを奏とも聞き給ふまじかりけるあたりに、ねたきわざかな」  
とて押しやり給ふ。源「怪しう昔より筆は女なむ弾き取るものな  
りける。嵯峨の御傳へにて、女五の宮、當時の名手でしたがさる世の中の上手に物  
し給ひけるを、その御筋にて、取立てて傳ふる人なし。すべて  
只今世に名を取れる人々、一寸弾ける位自分免許の者ばかりなのにかきなでの心やりばかりにのみある  
を、ここに斯う引きとどこめ給へりける、いと興ありける事かな。  
いかでかは聞きくべき」と宣ふ。入道聞召さむには、何の憚りかは  
侍らむ。お前に召しても。商人あきびとのなかにてだにこそ、ふる古曲こと  
聞きはやす人は侍りけれ。琵琶ひらなむ誠まことの手を弾きしづむる人、  
古へも難う侍りしを、をさく／＼滞ることなう、なつかしき手な  
ど筋ことになむ。いかでたどるにか侍らむ、荒娘の琵琶の音がき波の聲にまじ  
るは、悲しうも思まう給へられながら、かきつむる物敷かしさ、  
まぎるる折々も侍る」など、風流がつて居るのですき居たれば、源氏はをかしとおぼして、



華の琴取りかへて、琵琶と引換  
げにいと過ぐして、成程傳授を  
受けただけあつて調子に乗つて  
弾いた。今の世には知られてお  
ない。古風な手を弾いて、手さば  
きも大層唐めいて居つて、左手  
でゆする絃の音も深く澄んで聞  
える。  
清き渚に貝や拾はむ、催馬樂伊  
勢海一伊勢の海のく、清き渚  
の鹽貝になのりそや摘まむ、貝  
や拾はむや、玉や拾はむや、  
御くだもの葉子。  
人々に、良清や惟光其他源氏の  
家來達に。

さすがに 親心を察して。

かう覺えなき世界に こんな思  
ひがけない田舎に。  
老法師 明石入道自身の事。

箏のこと取りかへて賜はせたり。げにいと過ぐしてかい弾きた  
り。今の世に聞えぬ筋引きつけて、手づかひいといたう唐めき  
ゆのね深うすましたり。伊勢の海ならねど、「清き渚に貝や  
拾はむ」など、聲よき人に謠はせて、我も時々ひやうし取りて  
聲打添へ給ふを、琴・弾きさしつづつめで聞ゆ。御くだものなど  
珍しきさまにて參らせ、人々に酒しひそしなどして、あのづか  
ら物忘れもしぬべき夜のさまなり。いたく更けゆくままたに、松  
風涼しうて、月も入りがたになるままたに澄みまさりて、静かな  
る程に、御物語残りなく聞え。て、この浦に住み始めし程の  
心づかひ、のちの世を勤むるさま、かきくづし聞えて、このむ  
すめの有様、問はず語りに聞ゆ。をかしきもの、さすがに  
あはれと聞き給ふし、もあり。いと取り申しがたき事な  
れど、わが君、かう覺えなき世界に、かりにても移ろひおは  
しましたるは、もし年頃老法師の祈り申し侍る神佛のあはれび

めのわらは 明石上の事。

六時の勤め 晨朝、日中、日没、  
初夜、中夜、後夜と六時に佛前  
で勤行する事。私自身の極樂往生  
みづからのよりで。  
の祈願はもとより。  
さきの世の私は前世の宿縁が  
拙くてこんな田舎者となつたの  
でせうが、親は大臣でした。

次々さのみ 子から孫とさうい  
ふやうに次々賤しくなる一方で  
せうと結局どんな身になる事  
が。

あまたの人のそねみ 若紫巻に  
てさるの心の司など用意殊にし  
うけ引かずとあつた。卷一、  
一七三頁参照。

あはしまして、しばしの程御心をも惱まし奉る。にやとなむ  
思う給ふる。その故は、住吉の神を頼み始め奉りてこの十八年  
になり侍りぬ。めのわらはのいとさなう侍りしより、思ふ心侍  
りて、年頃の春秋ごとに、かの御社に參る事なむ侍る。晝  
夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものに  
て、只この人を高き本意かなへ給へとなむ念じ侍る。さきの世  
の契りつたなく、こそ斯く口惜しき山がつとなり侍りけめ、親、  
大臣の位を保ち給へりき。みづから斯く田舎の民となりては  
べり。次々さのみ劣りまからむ。は、何の身にかなり侍らむと  
悲しく思ひ侍るを、これは生れし時より、頼むところなむ侍る。  
いかにして都の高き人に奉らむと思ふ心深きにより、程々につ  
けて、あまたの人、のそねみを負ひ、身のためからき目を見る。  
折々も多く侍れど、更に苦しみと思ひ給へず、「命のかぎりは、  
せばき袖にもはぐくみ侍りなむ。かくながら見捨て侍りなば、



おきて侍る いひ聞かせてござ  
います。

横さまの罪にあたりて 無實の  
罪に沈んで思ひがけぬ田舎に  
流浪して居るのも、何の罪業に  
よつてか、今までは、気がかりに  
思つておましたが、  
今宵の御物語にこそはと 河内  
本に従ふべきである。  
なにかは斯くさだかに 入道が  
前に「わが君から覺えなき世界  
の程、御心にも移ろひ奉るに、暫し  
なむ思ふ給ふる」といつた詞を  
受けていふ。七六頁以下。

獨寢は 明石の浦でつくづく  
思ひ明してゐる娘の獨寢の心淋  
しさを君も御存じですか「つれ  
づれと、いひかけた序詞。  
明石に、いひかけた序詞。

ざれど浦馴れたらむ人は 浦に  
住みなれたあなたは、私程に淋  
しくはありますまい。私程に淋  
旅衣の歌 私に旅愁の爲に夜を  
明かしかねて熟睡も出来ませ  
ぬ。旅衣はうらかなしきの枕詞。  
草の枕は旅愁のこと。

うるさしや 煩雜だから此處に  
は記さぬ。  
ひがごとどもに 間違まじりに  
書き立てた事故も、と、愚痴  
されて顯はれてゐる事だらう。

心恥かしきさま 入道の様子が  
どことなく奥ゆかしいやうに思  
はれるにつかぬ所も、却て斯かる  
人目につかぬ所も、源氏は注  
意して。

遠近もの歌 源氏の歌。遠近も  
分らぬ大空で物思に沈んでゐる  
のか、のつらいた宿の梢を音づれる  
のです。

海の中にもまじり失せね」となむおきて侍る」など、すべてま  
ねぶべくもあらぬ事どもを、うち泣きうち泣き聞ゆ。君も物を  
さまへおぼし續くる折からは、うち涙ぐみつつ聞召す。源横  
さまの罪にあたりて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかと  
覺束なくおもひつるを、今宵の御物語に、  
からぬさきの世の契り  
だかに思ひ知り給ひける事を今までは告げ給はざりつらむ。都  
離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行ひよりほかの事な  
くて月日を経るに、心も皆くづほれにけり。かかると明石上の事  
ふとはほの聞きながら、いたづら人をば、  
思ひ捨て給ふらめと、思ひくしつるを、さらば導き給ふべき  
にこそあなれ。心細き獨寢の慰めにも」など宣ふを、かぎりな  
く嬉しと思へり。

「獨寢は君も知りぬやつれ」と思ひあかしのうら淋しさを

まして年月・思ひ給へわたるいふせさを、推し量らせ給へ」と  
聞ゆるけはひ、うちわななきたれど、さすがに故なからず、  
源「ざれど浦馴れたらむ人は」とて、  
旅衣うらがなしさにあかしかね草のまくらは夢もむすばず

とうち亂れ給へる御さまは、いとぞ愛敬づき、いふよしなき御  
けはひなる。かず知らぬ事ども聞え盡したれど、うるさしや。  
ひがごとどもに書きなしたれば、いとどをこにかたくなしき入  
道の心ばへもあらはれぬべかめり。

思ふ事かつくかなひぬる心地して、涼しう思ひ居たるに、又  
の日の晝つ方、岡邊に御文遣はす。心恥かしきさまなめるも、  
なか／＼斯かる物の限にぞ思ひの外なる事も籠るべかンめる、  
と心づかひし給ひて、高麗の胡桃色の紙に、えならず・引きつ  
くろひ・て、

「遠近も知らぬ雲居にながめわびかすめし宿の梢をぞとふ



思ふには 古今戀一「思ふには忍ぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを」

内に入りて 入道が娘の部屋に入つて返事をせき立てるけれど

包みあまりぬるにや 古今雜上「嬉しきを何に包まむ唐衣袂ゆたかに裁てといはれましを」

眺むらむの歌 君が眺めて居れると同じ雲居を娘も眺めてゐるの、この二人の思ひが同じのでせう。

玉裳 玉は美稱。海岸故玉藻によせたのである。海岸故玉藻に宣旨書代筆。いぶせくもの歌なげ物思をしてゐるのかと尋ねてくれる人がないので、鬱々と煩悶してゐます。

いひがたみ 一條院「戀しともまだ見ぬ人のいひがたみ心に物の歎かしきかな」  
うもれいたからむ 引込思案と  
いふものだらう。

例のどうなきぎ 例によつて少しも書かうとはしないのを、強ひて勧められて。

思ふらむの歌 私を御覽にもならぬあなたが、噂に聞いただけで煩悶なさる筈はないから、あなしたの御心の程がどうやらと疑はしく思はれます。

上衆めき 上臈らしく。

つれづれなる夕暮 夕暮の淋しさに堪へられぬとか、曙の風趣が黙してをれぬとか、いふやうに人前を取つくろつて、先方でも同感されさうな機会を推量して、時々文通をなさるに、その相手としてつりあはぬほど下手では修飾する。「折々」は「書きかはし」を

思ふには」とばかりやありけむ。入道も人知れず待ち聞ゆとて、かの家に來居たりけるもしるければ、御使いとまばゆきまで酔はす。御・返りいと久し。内に入りてそそのかせど、むすめは更に聞かず。いと恥かしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきも恥かしうつつましう、人の御程わが身の程思ふに、こよなく、「心地あし」とて寄り臥しぬ。いひわびて入道ぞ書く。

「いともかしたきは、田舎びて侍る袂に包みあまりぬるにや、更に見給ひも及び侍らぬかしこさになむ。さるは、

眺むらむ同じ雲居をながむるは思ひもおなじ思ひなるらむとなむ見給ふる。いとすきくしや」と聞えたり。陸奥紙に、いたう古めきたれど、書きざまよしばみたり。げにもすきたるかなと、めざましう見給ふ。御使に、なべてならぬ玉裳などかづけたり。又の日、宣旨書は見知らず。心地しこなむ」とて、

「いぶせくも心に物を惱むかなややいかにと問ふ人もなみ

いひがたみ」と、この度は、いといたうなよびたる薄様に、いと美しげに書き給へり。若き人のめでざらむも、いとあまりうもれいたからむ、めでたしとは見れど、なすらひならぬ身の程の、いみじうかひなければ、なかく世にあるものと尋ね知り給ふにつけて、泪ぐまれて、更に例のどうなきぎを、せめていはれて、浅からずしめたる紫の紙に、墨つき濃く薄くまぎらはして、

思ふらむ心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きか惱まむ手のさま書きたるさまなど、やんごとなき人に、いたう劣るまじう上衆めきたり。京のこと覚えて、をかしと見給へど、うちしきりて遣さむも人目つつましければ、二三日隔てつつ、つれづれなる夕暮、もしは物あはれなる曙などやうにまぎらはして、折々人も同じ心に見知りぬべき程推し量りて、書きかはし給ふに、似げなからず。心深く思ひあがりたる氣色も、見で



良清がらうじて、良清が自分の口  
振物にすまして話して居つた口  
かかして居たし、又彼が今も心を  
自分と源氏は思案して、氣の毒だ  
しと源氏は思案して、氣の毒だ  
人進み參らば、先方で押しかけ  
て來たら、餘儀なく應じたやう  
に胡麻化さうと思ふけれども、  
女はた併し女は。

關隔たりては、須磨から明石の  
浦に來ては、須磨の關の名は枕草  
子に多く詠はれてゐるのである  
が、古書に所見がない爲に、歌  
が明かでなく、關址も源光寺の  
邊といはれて居るが、證はない。  
たはぶれにくくも、古今誹諧  
一ありぬやと試みがつらあひ見  
ねばたはぶれにくき迄ぞ戀し  
き一  
さりとも斯くてやは、いくら何  
でも此儘幾年も此處に居るもの  
ともなからう。今更そんな見つ  
てもない眞似は出來ないと、は  
やる心をおさへてゐられた。  
三月十三日 須磨における雨風  
の時の事。

お前の御階 清涼殿前の階段。

聞えさせ給ふ事ども 桐壺院か  
ら朱雀院に。

思ひなしなる事は 氣のせいで  
さういふものです。

睨み給ひしに 故院がお睨みに  
なつた御目に、主上が御目を見合  
はされたと夢に御覽になつた爲  
か眼病をお煩ひになつて。

おほきおとど 弘徽殿の御父。

そこはかとなく どこがどうと  
いふことなしに。

さま／＼なり 太政大臣の薨去  
といひ、太后の御病氣といひ、  
それやこれやの御歎き。

世のもどき 今源氏を許して  
は、輕率といふ世間の非難を招  
くでせう。

はやまじとおぼすものから、良清がらうじていひし氣色もめざ  
ましう、年頃心づけてあらむを、目の前に思ひたがへ・むもい  
とほしうおぼしめぐらされて、人進み參らば、さる方にてま  
ぎらはしてむ・と思せど、女はたなか／＼やんごとなき際の人  
よりも、いたう思ひあがりて、ねたげにもてなし聞えたれば、  
根氣くらべにてぞ過ぎける。京のことに、かく關隔たり・ては、  
いよく覺東なく思ひ聞え給ひて、いかにせまし、たはぶれ  
にくくもあるかな、忍びてや迎へ奉りてまし、とおぼし弱る折  
折あれど、さりとも斯くてやは年・をかさねむ、今更に人わろ  
き事をやは、とおぼししづめたり。  
その年、おほやけに物のさとししきりて、物さわがしきこと多  
かり。三月十三日、神鳴りひらめき、雨風さわがしき夜、御門  
の御夢に、院の御門、お前の御階のもとに立たせ給ひて、御氣  
色いとあしうて、睨み聞えさせ給ふを、かしてまりておはしま

す。聞えさせ給ふ事ども多かり。源氏の御事どもなりけむ  
かし。いとど怖ろしういとほしと思して、後に聞えさせ給ひけ  
れば、雨など降り、空亂れたる夜は、思ひなしなる事はさぞ  
侍る。かろ／＼しきやうに、思し驚くまじき事」と聞え給ふ。  
睨み給ひしに見合せ給ふと見しけにや、御目・・・煩ひ給ひ  
て、堪へがたう悩み給ふ。御慎み、内にも宮にも限りなくせさ  
せ給ふ。おほきおとど亡せ給ひぬ。ことわりの御よはひなれど、  
次々にあつから騒がしき事あるに、大宮もそこはかとなく煩  
ひ給ひて、程經れば、弱り給ふやうなる、うちにおぼし歎く事  
さま／＼なり。なほこの源氏の君、誠に犯す事なきにてかく  
沈むならば、必ずこの報いありなむとなむ覺え給ふ。今はなほ  
もとの位をも賜ひてむ」と、たび／＼おぼし宣ふを、世の  
もどきあは／＼しきやうなるべし。罪におぢて都を去りし人を、  
三とせをだに過ぎさず・許されむことは、世の人もいかが



おぼし憚る程に、主上が遠慮し  
ておいでになる間に、御なやみども、主上の御眼病と  
弘徽殿の御病氣と、主上と弘徽殿とそ  
れ。

渡り給はむ事をば、源氏は自分  
の方から女の家に行く事を、あ  
のまじき事と思つてゐると。  
いと口惜しき際、假初に田  
身分の田舎娘だけが、假初に田  
舎の下つた人の口、假初に田  
輕率に夫婦となるのだ、私など  
源氏から人敷にも思つて頂けな  
いのだから、煩悶を増す事だ  
う、斯く及び、私かぬ望を以て  
居る親達も、私がまだ若くは  
こそ、あつても、私かぬ望を以て  
居るなら、却つて心配する  
事になるだらう、却つて心配する

只この浦におはせむ程、源氏が  
明石に居られる間だけ文通の出  
来るのが一通りならぬ事だ。

年頃音にのみ、今迄源氏の事を  
評判にだけ聞いて。

世になきものと、天下無類と噂  
に聞き傳へて居つた。

かくまで世にあるものと、かう  
まで私の存在を認めてお紙を  
下さるなどは、斯かる蠶の間に  
朽ちてしまふ身に取つて過分の  
喜びなだ、などと思ふと一層  
恥かしくて、源氏に逢は  
うなどとは夢にも思ひ寄らな  
い。

めでたき人と聞ゆとも、君がい  
くら結構な方であつても、娘に  
無情な仕打をされる事もあら  
に、神や佛を力にして、君の御  
料簡をも娘の運命も顧みず、に  
隨分無闇な望を起したものだ  
思ひかへしてなやんでゐる。

忍びて、入道はそつと陰陽師に  
吉日を選ばせて。

いひ傳へ侍らむ、」など、きさきかたう諫め、給ふに、お  
ぼし憚る程に、月日かさなりて、御なやみども、さまざまに  
おもひまさらせ給ふ。

明石には、例の秋は濱風の異なるに、獨寝もまめやかに物わび  
しうて、入道にも折々語らはせ給ふ。源氏も、とからまぎらはして、  
こち參らせよ」と宣ひて、渡り給はむ事をば、あるまじう思し  
たるを、さうじみはた更・に思ひ立つべくもあらず。いと口  
惜しき際の田舎人・こそ、かりにくだりたる人のうちとけ  
と・につきて、さやうにかるらかに・語らふわざをもすなれ、  
人かすにもおぼされざらむものゆゑ、我はいみじき物思ひをや  
添へむ、かく及びなき心を思へる親達も、世ごもりて過ぐす・  
年月こそ、あいなだのみに行末心にくく思ふらめ、なか／＼  
なる心をや盡さ・む、と思ひ・て、只この浦におはせむ程、  
かかる・御文ばかりを聞えかはさむこそおろか・ならぬ

事ならぬ、年頃音にのみ聞きて、いつかはさる人の御有様をほ  
のかにも見奉らむなど遙かに思ひ聞えしを、かく思ひかけざり  
し御すまひにて、まほならぬほどのかにも見奉り、世になきも  
のと聞き傳へし御琴のねをも風につけて、聞き、明暮の御有様  
・覺束なからで、か／＼、かくまで世にあるものとおぼし  
尋ぬるなどこそ、かかる海士のなかに、朽ちぬる身に、あまる  
事なれ、など思ふに、いよ／＼恥かしうて、露もけぢかき事は  
・思ひ寄らず。親たちは、ここの年の祈りのかなふべきを  
・思ひながら、ゆくりかに見せ奉りて、おぼしかずまへざらむ  
時、いかなる歎きをかせむ、と思ひやる・に、ゆゆしくて、め  
でたき人と聞ゆとも、つらういみじうもあるべきを、目に見  
えぬ佛神を頼み奉りて、人の御心をも宿世をも知らで、など打  
返し思ひ亂れ・たり。君は、「此頃の波の音に、かの物のねを聞  
かばや。さらずばかひなくこそ」など常は宣ふ。忍びてよろし



十三日 八月十三日。あたらしい夜の花とを同じくは心知れず、夜更かして 都への開えを憚つて。

思ふどち見まほしき 伊行釋「思ふどち見まほしき 玉津島入江の底に沈む月影」

秋の夜の歌 秋の夜の月が照つて居るが、月の駒よ戀しい都に走つてゆけ、暫しの間なりと紫上を見たいものだ。いとたき所 海岸にある入道の家のつら 海気のある入道の家は、物思ひありたけをしつて事だらうと思ひやられるにつけても。

三味堂 入道の勤行する堂が附近にあるので、打鳴らす鐘の聲が松風の響に和して物悲しく。

うちやすらひ 君は暫時立ちどまるとも、何やかやと娘に仰しやうか。うちは、娘はかうまで近ところ源氏にお目にかかりたい。こよなうも、思ひつゝの心で、ばし一人前らしも思はれぬ身。な、藤きさうにも思はれぬ身。分、今といふやうなことはなかつた。ない、今といふやうなことはなかつた。さ、今といふやうなことはなかつた。な、今といふやうなことはなかつた。な、今といふやうなことはなかつた。な、今といふやうなことはなかつた。

き日・見せて、母君のとかく思ひわづらふを聞き・入れず、弟子どもなどにだに知らせず、心一つに立ち居輝くばかりしつらひて、十・三日の月の花やかにさし出でたるに、ただ、「あたらしい夜」と聞えたり。君は、すきのさまやと思せど、御直衣奉り引き繕ひて、夜更かして出で給ふ。御車は二なく作り・たれど、所せしとて、御馬にて出で給ふ。惟光などばかりをさぶらはせ給ふ。やや遠く入る所なりけり。道の程も、四方の浦々見渡し給ひて、思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ戀しき人の御事を思ひいで聞え給ふに、やがて馬引き過ぎておもむきぬべくおぼす。此處に居て思ひ残す事はあらじ。秋の夜のつきげの駒よわが戀ふる雲居に翔れ時のまも見むと、うちひとりとごたれ給ふ。造れるさま木深く、いたき所まざりて、見どころあるすまひなり。海のつらはいかめしう面白く、これは心細く住みたるさま、此處に居て思ひ残す事はあらじ。

じ・か・しとす・らむとあほしやらるるに、ものあはれなり。三味堂近く、鐘の聲松の風に響きあひて、もの悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心はへあるさまなり。前裁どもに虫の聲を盡したり。ここかしこの有様など御覽ず。むすめ住ませたる方は、心ことにみがきて、月入れたる横の戸口、氣色ばかり押しあけたり。うちやすらひ、何かと宣ふに、も、かうまでは見え奉らじと深く思ふに、もの歎かしうて、うちとけぬ心さまを、こよなうも人めいたるかな、さしもあるまじき際の人だに、かばかりいひよりぬれば、心強うしもあらずならひたりしを、いとかくやつれたるに、あなづらはしきにや、とねたう、さまさまにおほし惱めり。なさけなう押し立たむも、事のさまにたがへり、心くらべに負けむこそ人わるけれなど、亂れ怨み給ふさま、げに物思ひ知らむ人にこそ見せまほしけれ。近き几帳の紐に、箏の琴の引き鳴らされたるも、けはひしどけなく、うち



この聞きならしたる 始終お噂に聞いて居つた琴までもお聞かせ下さらないのですか。

睦言を語りあはせむ人もがな憂き世の夢もなかばさむやと  
明石上 明けぬ夜にやがて惑へる心にはいづれを夢とわきて語らむ  
しとやかな態度は 考へて見る餘裕もなくの意  
ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。何心  
もなく打解けてゐたりけるを、かう物おぼえぬに、いとわりな  
くて、近かりける曹司の内（心とく）に入りて、いかで堅めけるに  
かいと強きを、しひても押し立ち給はぬさまなり。されどさ  
のみもいかでかはあらむ。人さまいとあてにそびえて、心恥か  
しきけはひぞした（りじ）。かうあながちなりける契りをおぼす  
にも、淺からずあはれなり。御志の近まさりするなるべし。常  
は厭はしき夜の長さも、疾く明けぬる心地すれば、人に知られ  
じとおぼす（い）も、心あわただしうて、こまかに語らひおきて  
出で給ひぬ。

されどさのみも さうばかりも  
して居られるものでない。この  
句の下に一つひを明けては  
ひられたといふ句を補つて見  
なければならぬ。  
そびえて すらりとたけ高く。

常は厭はしき 古今戀三「長し  
とも思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人  
からの秋の夜なれば」  
人に知られじと 明石上に逢つ  
た事を誰にも知られまいと思召  
すにつけても、源氏は心が落着  
かなくて。

御文 後朝の文。  
あいなきつもらない京への疑  
心暗鬼から、こそと後朝の  
文を送られるのだの意。

さればよと 女の方では、案の  
定捨てられたのだと嘆いて居る  
から。  
今更に 世を捨てて居りなが  
ら、今更心を亂すのも氣の毒だ。

二條の君 紫上が、風の便りに  
も此の事を漏れ開いて、二人の  
間に隠し立てがあつたのだと、  
冗談にも思ひ疎まるといふ事  
があつては、心苦しう恥かし  
く思召すのも、あまりにも深い  
御愛情である。

さすがに心とどめて 紫上も道  
に氣にかけて恨まれる折々もあ  
るが、自分は何でたわいもない  
氣まぐれをして紫上からあんな  
に恨まれた事だらうなどと。

とけながらかきまさぐりける程、見えてをかしければ、源「この  
聞きならしたる琴をさへや」など、よろづに宣ふ。

睦言を語りあはせむ人もがな憂き世の夢もなかばさむやと  
明石上 明けぬ夜にやがて惑へる心にはいづれを夢とわきて語らむ  
しとやかな態度は 考へて見る餘裕もなくの意  
ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。何心  
もなく打解けてゐたりけるを、かう物おぼえぬに、いとわりな  
くて、近かりける曹司の内（心とく）に入りて、いかで堅めけるに  
かいと強きを、しひても押し立ち給はぬさまなり。されどさ  
のみもいかでかはあらむ。人さまいとあてにそびえて、心恥か  
しきけはひぞした（りじ）。かうあながちなりける契りをおぼす  
にも、淺からずあはれなり。御志の近まさりするなるべし。常  
は厭はしき夜の長さも、疾く明けぬる心地すれば、人に知られ  
じとおぼす（い）も、心あわただしうて、こまかに語らひおきて  
出で給ひぬ。

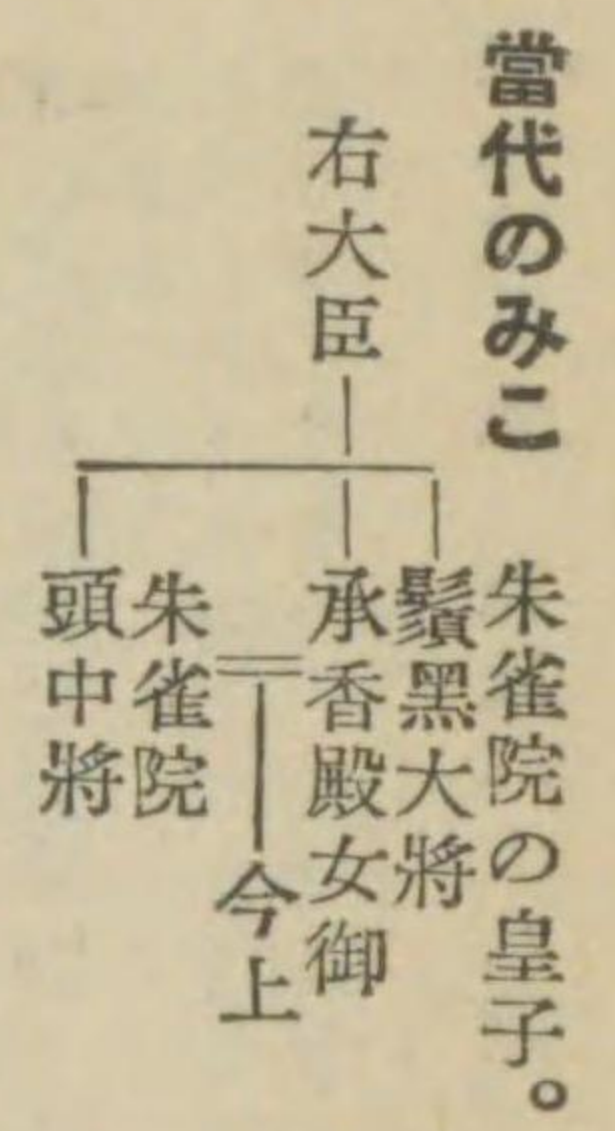
御文 後朝の文であるから  
の方でも、いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。  
こにも、斯かる事いかで、  
忍びつつ時々おぼす。程もすこし離れたるに、おのづから物い  
ひさかなき海士の子もや立ちまじらむと、おぼし憚るほどを、  
さればよと思ひ歎き、  
樂の願ひをば忘れて、只この御氣色を待つことにはす。今更に  
心を亂るも、いとほしげなり。二條の君の、風のつてにも  
漏り聞き給はむ事は、たはぶれにても、心の隔てありけると思  
ひうとまれ奉らむは、心苦しう恥かしうおぼさるるも、あなが  
ちなる御志の程なりかし。かかる方のことをば、さすがに心  
とどめて怨み給へりし折々、  
つけてもさ思はれ奉りけむ、など、取りかへさまほしう、人の  
有様を見給ふにつけても、戀しさの慰む方、なければ、例より

御文 後朝の文であるから  
の方でも、いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。  
こにも、斯かる事いかで、  
忍びつつ時々おぼす。程もすこし離れたるに、おのづから物い  
ひさかなき海士の子もや立ちまじらむと、おぼし憚るほどを、  
さればよと思ひ歎き、  
樂の願ひをば忘れて、只この御氣色を待つことにはす。今更に  
心を亂るも、いとほしげなり。二條の君の、風のつてにも  
漏り聞き給はむ事は、たはぶれにても、心の隔てありけると思  
ひうとまれ奉らむは、心苦しう恥かしうおぼさるるも、あなが  
ちなる御志の程なりかし。かかる方のことをば、さすがに心  
とどめて怨み給へりし折々、  
つけてもさ思はれ奉りけむ、など、取りかへさまほしう、人の  
有様を見給ふにつけても、戀しさの慰む方、なければ、例より









御目の惱み 朱雀院御眼病の事は八三頁参照。

終の事と いづれは許される事と思召してゐられたが、無常の身の習ひ故、どうなり果てる身ぞと歎いて居られたに。

夜がれなく 毎晩缺かさずに娘と睦しく話される。

怪しう 源氏の心。

思ひのほか 思ひがけず悲しい旅路に出かけたが、遂には歸京する日の來る事と一方では心を慰めて居つたのだ。

この度は 今度は歸京といふ嬉しい出發だが、二度と此の浦に來る事はなからうと思ふと悲しい。

程さへ 季節さへ。秋の半であるから。

なぞや心づから なぜ自分は自ら求めて今も昔もつまらぬ戀の爲に身を憂なしにするのだから。

る。當代のみこは右大臣の御むすめ、承香殿の女御の御腹に、男みこ・生れ給へる、二つになり給へば、いといはけなし。春宮にこそは譲り聞え給はめ、おほやけの御後見をし世をまつりごつべき人をおぼしめぐらすに、この源氏の・かく沈み給ふこと、いとあたらしうあるまじき事なれば、遂に后の御いさめをも背きて、許されぬべき定め出で來ぬ。こぞより、后も御物怪になやみ給ひ、さまざまの物のさとし・しきりさわがしきを、いみじき御慎みどもをし給ふしるしにや、よろしうおはしましける。御目の惱みさへ、此頃・重くならせ給ひて物心細くおぼされければ、七月廿餘日の程に、又かさねて京へ歸り給ふべき宣旨くだる。終の事と思ひしかど、世の常なきにつけても、いかになり果つべきにかと歎き給ふを、かう俄かなれば、嬉しきにつけても、又この浦を今はと思ひ離れむことをおぼし歎くに、入道・さるべき事と思ひながら、うち聞く

より、胸ふたがりて覺ゆれど、思ひのごと榮え給はばこそはわが思ひのかなふにはあらめ、など思ひなほす。その頃は、夜がれなく語らひ給ふ。六月ばかりより、心苦しき氣色ありてなやみけり。かく別れ給ふべき程なれば、あやにくなるにやありけむ、ありしよりもあはれにおぼして、怪しう物思ふべき身にもありけるかなと、おぼし亂る。女は更にもいはず思ひ沈みたり。いとことわりや。思ひのほか悲しき道に出で立ち給ひしかど、遂には行きめぐり來なむと、かつはおぼし慰めき。この度は嬉しき方の御出で立ちの、又やはかへり見るべきとおぼすに、哀なり。さぶらふ人々も、程々につけては喜びおもひ、京よりも御迎へに人々參り、心地よげなるを、あるじの入道・涙にくれて月も立ちぬ。程さへ・あはれなる空の氣色に、なぞや心づから今も昔もすろなる事にて身をはふらかすらむ、とさまざまにおぼし亂る。心を知れる人々



見奉りむつかるめり。ぶつ／＼  
月頃は、今までは居るやうだ。  
子を見せず、時々人目を忍ん  
で逢ひに行かたりなど、此の位  
の冷淡さであつたに、此の別  
れは、生憎愛情が濃かになつ  
た。これでは却つて娘の歎の種  
だのに。

あさてばかりに 出發は明後日  
頃といふ日になつて。

めざましうも 目のさめる程の  
美人だなあと。

さやうにぞ 京に迎へる事を明  
石上に約束された。

只かばかりを 女としては只そ  
れだけありがたい仕合として  
思ひあきらめたらとまで思はれ  
もしようが。

わが身の程を 自分分際を思  
ふと物思は盡きない。  
取り集めたる さまざま、一つに  
集めたことの情景である。

このたびは 一度は別れてもや  
がて京へ迎へよう。「立ち」は  
「煙」の縁語。

かきつめての歌 色々思ふ事は  
ございませうが、詮ない事故、何  
も恨みも致しませうまい。「おも  
ひ」に「火」が、「かひ」に「貝」が  
「うらみ」に「浦」がひびかしてあ  
る。

さらば ではせめて形見として  
思ひ出して下さる種となる程の  
一曲をでも。

さし入れたり 娘の居る部屋の  
御簾の下に。  
涙さへ 琴弾くことがそゝのか  
されるばかりでなく、涙までが。

は、「あなにく。例の御癖ぞ」と、見奉りむつかるめり。「月頃は、  
つゆ人に氣色見せず、時々かいまぎれなどし給へ。るつれなさ  
を、此頃、あやにくになかくの人の心づくしに」と、つきし  
ろふ。少納言、しるべして聞え出でし初めの事などささめき  
あへるを、ただならず思へり。

あさてばかりになりて、例のやうに、いたうも更かさで渡りた  
まへり。さやかにもまだ見給はぬかたちなど、いとよし／＼し  
うけだかさまして、めざましうもありけるかなと、見捨てが  
たく口惜しうおぼさる。さるべきさまに、て迎へむとおぼしな  
りぬ。さやうにぞ語らひ慰め給ふ。男の御かたち有様、はた更  
にもいはず、年頃の御行ひに、いたく面瘦せ給へるしも、いふ  
かたなくめでたき御有様にて、心苦しげなる。氣色にうち涙ぐ  
みつ、あはれに深く契り給へるは、只かばかりをさいは  
ひにてもなとかやまざらむ、とまでぞ見ゆめれど、めでた

ので却つて、わが身の程を思ふにも盡きせず。波の聲、秋の風に  
はなほ響きことなり。鹽焼くけぶりかすかにたなびきて、取り  
集めたる、所のさまなり。

このたびは立ち別るとも藻鹽焼くけぶりは同じ方に靡かむ  
と宣へば、

かきつめて蟹のたく藻の思にも今はかひなき怨みだにせじ  
あはれにうち泣きて、ことずくななるものから、さるべきふし  
の御いらへなど、淺からず聞ゆ。この常にゆかしがり給ふ物の  
ねなど、更に聞かせ奉らざりつるを、いみじう恨み給ふ。明「さ  
らば形見にも、偲ぶばかりのひとことをだに」と宣ひて、京より  
もておはし。たりし琴の御こと、取りに遣はして、心殊なる  
しらべを、ほのかに掻き鳴らし給へる、深き夜の澄めるは、た  
とへむ方なし。入道もえ堪へで、みづから箏の琴、取りてさし  
入れたり。みづからも、いとど涙さへそそのかされて、とどむ



聞く人の心ゆき 聞く人の心も  
満足して。 琴の音のよいばかりでなく容姿もめでたからう

心やましき程に 源氏の心を  
らす程度に弾きやめて。 琴は又來て  
弾くまでの形見に置いてゆか  
等閑にの歌 あなたがたい加減  
の一言を、私は始終泣きながら  
心にかけて思ひ出して居りませ  
逢ふまでの歌 再會までの形  
見として残しておく緒の調  
子も御身の愛情も變らずにあ  
中の緒 箏の十三絃の中、一よ  
り五までを大緒といひ、六より  
十までを中緒といひ、末の斗  
（ト）爲（キ）中（キン）の三絃を細  
緒といふ。契るなかとひひかけ  
たのである。 契るなかとひひかけ  
この調子がはぬ先に この中の  
緒の調子の變らぬ内に屹度對面  
しませう。

別れむ程の けれども娘は只管  
に咽んで居るのも尤である。

うち捨てて あなたを殘して立  
去るのが悲しくて、歸京後の御  
身はどんなだらうと思ひやられ  
る。「立つ」に旅立つ意が兼ねて  
ある。

年經つるの歌 住み馴れたこの  
苦屋も、君なき後はいよ／＼荒  
れて私はつらい思ひをする事  
せうから、寄る波の返る方に身  
を投げて死なうと思ひます。初  
句二句は「憂き」を生む序詞であ  
る。

年頃といふばかり 幾年といふ  
程長く住み馴れたのも、今  
を限りと思へば御落涙も尤だ。

されど何かはとてなむ 一々記  
すには及ぶまいと思つて省略す  
る。 人々下の品まで お供の人々、  
下々の者に至るまで。

べき方なきに、 弾く氣になるのであらう さそはるるなるべし、忍びやかにしらべたる程、  
いと上衆めきたり。 上薦らしい氣高きがある 入道の宮の御ことのねを、只今の又なきも  
のに思ひ聞えたるは、今めかしうあなめでたと聞く人の心ゆき  
て、かたちさへ思ひやらるる事は、げにいと限りなき御琴のね  
なり。 明石上 これは飽くまで 音がさえて奥床しくいまいしと思はれる程音色がよい 弾き澄まし、心にくくねた。きねぞまさ  
れる。この御心にだに始めてあはれになつかしう。あはれに、ま  
だ耳馴れ給はぬ手など、心やましき程に弾きさしつ、飽かず  
おぼさるるにも、月頃、など強ひても聞きならさざりつらむ  
と、 源氏心 くやしうおぼさる。心のかぎり、行く先の契りをのみし給  
ふ。 源氏 琴は又掻き合するまでの形見に」と宣ふ。女、 明石上  
等閑に頼めおくめる一 言に琴をひつかしてなる ことを盡きせぬねにやかけて偲ばむ  
いふともなき口ずさびを、恨み給ひて、  
「逢ふまでの形見に契る中の緒の調べは殊に變らざらなむ  
この音たがはぬ先に必ずあひ見む」と頼め給ふめり。されど只 明石

別れむ程のわりなきを思ひむせたるも、いとことわりなり。  
立ち給ふ曉（ヒ）は、夜深う出で給ひて、御迎への人々も騒がしけ  
れば、心も空なれど、人まをはからひて、  
うち捨てて立つも悲しき浦波の名残いかにと思ひやるかな  
御返り、

年經つる苦屋も荒れてうき波の歸る方にや身をたぐへまし  
と、うち思ひけるまななるを見給ふに、忍び給へど、ほろ／＼  
とこぼれぬ。心知らぬ人々は、なほ斯かる御すまひなれど、年  
頃といふばかり馴れ給へるを、今はとおぼすはさもある事  
ぞかし、など見奉る。良清などは、 明石上 おろかならずおぼすなめ  
りかしと、憎くぞ思ふ。嬉しきにも、「げに今日を限りに此の渚  
を別るるこそ」などあはれかりて、口々 （いひて） しほたれいひ  
あへる事どもあめり。されど何かはとてなむ。入道、今日の  
御設け、いといかめしう仕うまつれり。人々下の品まで、旅の



いつのまに 一つの間に用意した事かと思はれた。幾荷もあまたかけさぶらはす。幾荷も擔はせてお供させる。

都のつと 都への土産。ゆゑづきて 趣向して行届かぬ點はない。

寄る浪にの歌 私がかつて縫ひ重ねた旅衣でございませうから涙に濡れて居つてお厭ひになる事いと仰しやつてお厭ひになる事でございませう。

かたみにぞの歌 再會までには日数のある事故、私の中の衣を記念として、あなたへの贈物の著物と着かへるべきです。中の衣は上下の衣を隔てる。だから、隔てむは中の衣の縁語である。

志あるまどとて 折角の御好意だからといつてお召換になる。御身にたれたる 今まで著馴れた著物を明石上に遣した。思ひ出の種を附け加へた形見であらう。

かひつみるの歌 俗界がいやになつて長い間海岸生活をする身となりまして、矢張解脱の彼岸に達する事は出来ませぬ。これは表面の意味で、一方に娘に關する望みが達せられないといふ意と、この土地を離れかねてゐるといふ意とを籠めてある。一世を「うみ」の枕詞。

いとど感ひぬべく 今までも悟りきれずに居りますが、今後は一層子故の闇に迷ひませうか。おぼし出てさせ給ふ折 娘を思い出して下さらばお便りを下ささう。

都出でし歌 永年住み馴れたこの浦を去る秋の嘆きは、都を出た時の春の歎にも劣らぬ。

さうじみの心地は お別れの後の本人の明石上の悲しみは譬へやうがなくて。

身の憂きもとにて わが身の不遇が嘆きのもとと故仕方のない事だが。

たけき事とは 今の場合の最上の仕方としては涙に沈んで居るより外に道はない。

さ・うぞく、珍らしきさまなり。いつのまにかしあへけむと見えたり。御よそひはいふべくもあらず、御衣櫃あまたかけさぶらはす。誠の都のつとに、しつべき御贈物ども、ゆゑづきて思ひ寄らぬ限なし。今日奉るべき狩の御さうぞくに、

寄る浪にたちかかさねたる旅衣しほどけしとや人のいとはむとあるを御覽じつけて、さわがしけれど、

かたみにぞかふべかりける逢ふ事の日數隔てむ中の衣をとて、志あるを」とて奉りかふ。御身になれたるどもを遣はす。げに今ひとへ偲ばれ給ふべき事を添ふる形見なめり。

えならぬ御ぞに匂ひの移りたるを、いかが人の心にもしめざらむ。入道、「今はと世を離れ侍りにし身なれども、今日の御送りに仕らまつらぬ事」など申して、かひ・つくるもいとほしなながら、若き人は笑ひぬべし。

「世を海にこころ鹽じむ身となりて猶此岸をえこそ離れぬ」と聞えて、境までだに」と聞えて、

「すきくしきやうなれど、おぼし出でさせ給ふ折侍らば」など御氣色賜はる。いみじう物をあはれとおぼして、所々うち赤み給へる御まみのわたりなど、いはむ方なく見え給ふ。思ひ捨てがたき筋もあめれば、今いと疾く見なほし給ひてむ。只このすみかこそ見捨てがたけれ。いかがすべき」とて、

都出でし春のなげきに劣らめや年経るうらをわかれぬる秋とて、押し拭ひ給へるに、いとど物覺えずしほたれまさる。立ち居もあさましうよろぼふ。さうじみの心地は譬ふべきかたなくて、かうしも人に見えじと思ひしづむれど、身の憂きをもとにて、わりなき事なれど、うち棄て給へる恨みの憂きをもとにて、面影添ひて忘れがたき、に、たけき事とは

たるかたなきに、面影添ひて忘れがたき、に、たけき事とは只涙に沈めり。母君も慰めわびて、何に斯く心づくしなる事を思ひそめけむ。すべてひがしき人に從ひける心の

を思ひそめけむ。すべてひがしき人に從ひける心の

を思ひそめけむ。すべてひがしき人に從ひける心の

を思ひそめけむ。すべてひがしき人に從ひける心の

を思ひそめけむ。すべてひがしき人に從ひける心の

を思ひそめけむ。すべてひがしき人に從ひける心の

を思ひそめけむ。すべてひがしき人に從ひける心の

を思ひそめけむ。すべてひがしき人に從ひける心の



思ひ慰めて 以下明石上に向つていふ詞

ひがめる心ま 入道の偏屈な心を誘ひあひながら、早くせひともいつしかいかに早くせひとも娘が本意の通りになるやうにと、望をかけてつづつ年月を過し、今初めてその宿望が達したと思つたのだ。縁組早々心苦し目にあつたものだ。

願はたし申すべきよし 願ほどきの御禮まゐりをする旨を。俄に罪がゆるされたので急に人々が追従するのである。所せうて お迎の人が多い故。

都の人も 都に居残つて居つた人も源氏にお供した人も。

所せかりし御髪 多過ぎた髪は毛が少し薄くなつたのも却つて美しいのである。今後はかうして紫上と一緒に暮すのだと御安心なさるにつけても。

その人の事ども 源氏は明石上の噂などを紫上に語り始めた。身をば思はず 拾遺戀四「忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな」かつ見るにだに 今目の前に見えて居るに、見飽かぬ紫上だの。の間見ず居つた事だらうと、我ながら呆れる迄にお思ひになつて居る。又先年立返つて世の中が恨めしく思はれる。

おこたりぞ」といふ。入道「あなさまや。思し棄つまじき事も物し給ふめれば、さりともしおほす所あらむ。思ひ慰めて御湯などをだにまゐれ。あなゆゆしや」とて、片隅に寄り居たり。乳母母君など、ひがめる心をいひ合せつつ、「いつしかいかで思ふさまにて見奉らむと年月を頼み過ぐし、今や思ひかなふとこそ頼み聞えつれ。心苦しき事をも物の初めに見るかな」と歎くを見るにも、いとほしければ、いとどほけられて、晝は一日いのみ寝くらし、夜はすくよかに起き居て、「數珠の行方も知らずなりにけり」とて、手を押しすりて仰ぎ居たり。弟子どもにあばめられて、月夜に出でて行道するものは、遣水に倒れ入りにけり。よしある岩の片そばに腰もつきそこなひて、やみ臥したる程になむすこし物まぎれける。君は、難波の方に渡りて、御被し給ひて、住吉にも、たひらかにて色々の願はたし申すべきよし、御使して申させ給ふ。俄に所せうて、みづ

からは、この度えまうで給はず、殊なる御道遙などなくて、急ぎ入り給ひぬ。二條の院におはしましつきて、都の人御供の人、夢の心地してゆきあひ、喜び泣きもゆゆしきまで立ちさわぎたり。女君も、かひなきものにおぼし捨てつる命、嬉しうおぼさるらむかし。いと美しげにねびととのほりて、御物思ひの程に、所せかりし御髪の、すこしへがれたるしもいみじうめでたきを、今はかくて見るべきぞかしと、御心・おちるにつけては、又かの飽かず別れし人の思へりしさま、心苦しうおぼしやらる。なほ世と共に斯かる方に、て御心のいとまどなきや。その人の事どもなど聞えいで給へり。おぼし出でたる御氣色浅からず見ゆるを、ただならずや見奉り給ふらむ、わざとならず。「身をば思はず」などほのめかし給ふぞ、をかしうらうたく思ひ聞え給ふ。かつ見るにだに飽かぬ御さまを、いかで隔てつる年月ぞと、あさましきまでおもほすに、取りか



もとの御位あらたまりて以前  
の参議大將の官が改まつて員外  
の權大納言に昇進される。

召しありて 朱雀院からお召が  
あつて源氏は参内された。

恥かしうさへ 源氏に對面され  
る事を。

御心地例ならず 朱雀院は長い  
間御不例に渡らせられたから。

かきくづし ぼつくくと。

遊び 管絃の御遊。  
昔聞きし物のね 源氏の奏した  
樂の音。

わたとつ海に 私は須磨明石に沈  
論して三年立つて了ひました。  
日本紀 饗宴大江朝綱「かぞい  
なりは哀と見えずや蛭の子は三年に  
宮柱の歌 再會の機があつた折  
だから 先年の春都を去つた折  
の怨みを忘れて下さい。諸冊二  
給ひし故事によつて「宮柱」を  
一めぐりあひける」の枕詞に用  
ひてある。  
院の御ために 桐壺院追善の爲  
に御八講 法華八講會の事。一日  
づ、を講じ八卷を四日で終る法  
會。  
春宮 冷泉院。  
御ざえ 御學才も上達せられ  
て。歸る波につけて 源氏を送つて  
來た使の歸るのに託して。か  
波のよるくいに「波の」は  
「よる」の枕詞。  
歎きつつの歌 歎きながら明石  
の浦に立つて我が去つたあとを  
ながめくらしてゐる。だらうと氣  
な毒に思つてゐる。「歎きつつ」  
は「あかし」の「朝霧の」は「立  
つ」の枕詞。この歌は傳人磨の  
霧の嶋がくれゆく舟をしぞおも  
ふ」の言葉によつてとりなして  
ある。

へし世の中もいと恨めしうなむ。程もなくもとの御位あらたま  
りて、かずよりほかの權大納言になり給ふ。つぎくの人も、  
さるべきかぎりは、もとの官かへし賜ふ。世に許さるる程、枯  
れたりし木の春にあへる心地して、いとめでたげなり。召しあ  
りてうちに參り給ふ。お前にさぶらひ給ふに、ねびまさりて、  
須磨明石のやうな片田舎に  
いかでさる物むつかしきすまひに年經給ひつらむと見奉る。女  
房などの、院の御時よりさぶらひて、老いしらへるどもは、悲  
しくて、今更に泣き騒ぎめで聞ゆ。うへも恥かしうさへおぼ  
め。されて、御よそひなど、殊に引きつくるひて出でおはします。  
御心地例ならず日頃經させ給ひければ、いたう衰へさせ給へる  
を、昨日今日ぞすこしよろしうおぼされける。御物語しめやか  
にありて夜に入りぬ。十五夜の月面白う靜かなるに、昔の事か  
きくづしおぼし出でられて、しほたれさせ給ふ。物心細くお  
ぼさるるなるべし。朱雀「遊びなどもせず、昔聞きし物のねなども

聞かて久しうなりにけるかな」と宣はするに、  
わたつ海にしなへうらぶれ蛭の子の足立たざりし年は經にけり  
と聞え給へば、いとあはれに心恥かしうおぼ。されて、  
宮柱めぐりあひける時しあれば別れし春のうらみのこすな  
いとなまめかしき御有様なり。  
院の御ために御八講行はるべき事、まづ急がせ給ふ。春宮を見  
奉り給ふに、こよなくおよすさせ給ひて、珍らしうおぼし  
喜び給へるを、かぎりなくあはれと見奉り給ふ。御ざえも。  
こよなくまさらせ給ひて、世を保ち給はむに憚りあるまじく、  
かしこう見えさせ給ふ。入道の宮にも、御心すこししづ  
めて、御たいめん程にも、あはれなる事どもあらむかし。ま  
ことや、かの明石には、歸る波につけて、御文つかはす。引き  
隠して、こまやかに書き給ふめり。源文「波のよるくいに、  
歎きつつあかしの浦に朝霧の立つやと人を思ひやるかな」



まくなき作らせて誰からとも  
いはずに只目で相圖させて手紙  
を置いて来させた。須磨の浦で  
須磨の浦にの歌。須磨の浦で  
尋ね申上げた後。つと君を思ひ  
目にかけた。腐らせたわが袖を  
かへりてはの歌。却つて私の方  
磨で不平を申した。君戀しき  
の涙に袖が乾かなくなつた。五  
節かずをかしと。嘗て源氏は五  
節かずをかしと。記を呼びさま  
されども、此頃は懐き思はれん  
で居るやうだ。浮気沙汰は慎ん  
だ。只御せうそこばかりにて手紙  
御歸京が嬉しう思つて居るとか  
恨めしく思つて居るとか。

かの帥そちのむすめの五節ごせち、源氏が時京した故あいなく人知れぬ物思ひさめぬる心地  
して、まくなき作りらせてさしおかせけり。

須磨五節の浦に心を寄せし船人五節自身のやがて朽たせる袖を見せばや  
手五節の筆蹟などこよなくまさりにけりと見五節の文と見定めておほせ給うてつかはす。

かへりては託言かごとやせまし寄せたりし名残に袖の干難ひがたかりしを  
飽かずをかしと思しし名残なれば、おどろかさされ給ひて、いと  
ど（忘れがたげ）おぼし出づれど、此頃はさやらの御振舞更（ある）に（きせで）つつみ給ふめ  
り。花散里などにも、只御せうそこ（こ）ばかりにて、おぼつかなく  
らで、なかく恨めしげなりとなむ。  
（世に知らず物登くとぞ）

そおきり



さやかに見え給ひし夢ののち、院の御門の御事を心源氏がにかけ聞え  
給ひて、いかでかの沈み給ふらむ罪救かろめひ奉る事をせむと・  
心のうちに・おぼし歎きけるを、かく歸京にり給ひては、まづ・  
御いそぎし給ふ。神無月には御八講みはかうし給ふ。世の人靡なき仕しらま  
つること、昔のやうなり。大后弘徽殿なほ御なやみおもくおはします  
うちにも、遂源氏にこの人をえ消たずなりぬる事、と心やましく・お  
ぼしけれど、御門朱雀院は院桐壺院の御遺言を思ひ聞え給ふ。物の報あり  
ぬべくき事と・おぼしけるをなほ・  
・涼しくなむおぼしける。時々ちりなやませ給ひし御目朱雀院の御眼も  
さわやぎ給ひぬれど、大方世にえ長くあるまじう・  
細き事とのみ、久しからぬ事をおぼしつつ、常に召しありて、  
源氏の君は參り給ふ。世の中の事なども、隔主上が源氏に御相談になつててなく宣はせ  
などしつつ、御本意主上ののやうなれば、大方の世の人そぞろにもあいなく嬉し  
しきことに喜び聞えける。



おりみなむの 朱雀院の御讓位の御心構へが近づくに付けて

おとど 朧月夜の父二條太政大臣、明石巻に薨去。

わが世の私に命も幾程もな  
いやな氣がするの。あな  
いとほしう。あなたと昔  
は打つて變つた哀な様で  
に打つて變つた哀な様で  
昔より人により毒からあ  
れたが、私より毒からあ  
類の愛情が私になつて居  
立ちまざる人、私に死後  
所の本望通りに源氏と結  
おろかならぬ志はしも、並  
らぬ私に愛情はしも、並  
いとほしう。あなたと昔

よろづの罪忘れて 主上は朧  
夜の源氏との不都合な事  
も忘れて。なぞあなた  
は皇子をお生みにならな  
か。残念です。宿縁の深い  
の爲には間もなく子持た  
事だらうと思ふ。残念だ  
身分は下りとしてお育て  
御子に下りとしてお育て

限りなき御志の 朧月夜に對す  
深まりゆくやうにお仕向  
るの。に。源氏は美し  
めでたき人なれど、源氏  
は居なかつた態度や氣持  
が、朧月夜も次第に物が  
くるにつれて。若くは幼  
わが心の若く、若くは幼  
別から源氏と契りを結ん  
ざる騒ぎ、須磨引退の事

明くる年 源氏二十九歳。  
春宮 後に冷泉院と申す。

いとまばゆきまで まぶしい程  
冷泉院と源氏とが輝きあつて居  
事と噂して居るけれども、  
いみじう傍痛く、藤壺はそれ  
に御心をお痛めになる。

ありみなむの御心づかひ近くなりぬるにも、内侍のかみの心  
細げに世を思ひ歎き給へる、いとあはれにおぼされけり。

わが世の残りすくなき心地するになむ、いとほしう、

名残なきさまにてと、まり給はむとすらむ。昔より人には思ひ

あとし給へれど、みづからの志の又なきならひに、只御事の

なむあはれに覺えける。立ちまざる人、又御本意ありて見給

ふとも、おろかならぬ志は、しも、なずらはざらむと思ふさへ

こそ、心苦しけれ」とて、うち泣き給ひぬ。女君、顔は

いとあかくほひて、こぼるばかりの愛敬にて、泪もこぼれ

ぬるを、よろづの罪、忘れて、あはれにらうたしと御覽せら

る。契り深き人のためには、今見出で給ひてむと思ふも口惜

かな。契り深き人のためには、今見出で給ひてむと思ふも口惜

し。や。限りあれば、ただ人にてぞ見給はむかし」など、行末

の事をさへ宣はするに、いと恥かしうも悲しうも覺え給ふ。御  
かたちなど、なまめかしう清らにて、限りなき御志の年月  
に添ふ、やうにもてなさせ給ふに、めでたき人なれど、  
さしも思、へらざりし氣色心ばへなど、物思ひ知ら  
れ給ふままに、なぞわが心の若くいはけなきにまかせて、さ  
る騒ぎをさへ引きいでて、わが名をば更にもいはず人の御ため  
さへ、などおぼし出づるに、いと憂き御身なり。

明くる年の二月に春宮の御元服のことあり。十一になり給へ。  
程よりおほきに大人、しう清らにて、ただ源氏の大納言  
の御顔を、二つにうつしたらむやうに見え給ふ。いとまばゆき  
まで光りあひ給へるを、世人、めでたきものに聞ゆれど、母宮  
は、いみじう傍痛きことにあいなく御心を盡し給ふ。うちにも、  
めでたしと見奉り給ひて、世の中譲り聞え給ふべきことな  
ど、なつかしう聞え知らせ給ふ。おなじ月の廿餘日、御國

後の御事  
朧月夜の心  
いと恥かしうも悲しうも覺え給ふ。御  
かたちなど、なまめかしう清らにて、  
に添ふ、やうにもてなさせ給ふに、  
さしも思、へらざりし氣色心ばへなど、  
れ給ふままに、なぞわが心の若くいはけなきにまかせて、さ  
る騒ぎをさへ引きいでて、わが名をば更にもいはず人の御ため  
さへ、などおぼし出づるに、いと憂き御身なり。

明くる年の二月に春宮の御元服のことあり。十一になり給へ。  
程よりおほきに大人、しう清らにて、ただ源氏の大納言  
の御顔を、二つにうつしたらむやうに見え給ふ。いとまばゆき  
まで光りあひ給へるを、世人、めでたきものに聞ゆれど、母宮  
は、いみじう傍痛きことにあいなく御心を盡し給ふ。うちにも、  
めでたしと見奉り給ひて、世の中譲り聞え給ふべきことな  
ど、なつかしう聞え知らせ給ふ。おなじ月の廿餘日、御國



大后 弘徽殿。位をおりて、つまらぬ有様にはなりませも、のんびりした氣分でお目にかかりた坊といふ積りなのです。右大臣「承香殿 春宮。」

かす定まりて、左大臣が満員で源氏を入れる餘地がなかつたので、令外の官たる内大臣として大臣の中に加つたのである。やがて世の政事を執る管ではあつたが、天下の政務を執る管ではあ

致仕のおとど 奏上の父前左大臣。致仕の表を奉つた事は賢木卷に見える。卷一、四三七頁。いよく「老いの一層老衰が加はりまして、ろくな役には立ちますまい。」商山の四皓即ち漢人の高祖の時東園公・角里先生・綺里季・夏黄公がでて仕へた事。

さるためしも 致仕の人が攝政したといふ前例もあつたので、辭退が出来ずに。

世の中すさまじきにより この大臣の引退は、老年の故もあつたが、一つは弘徽殿方の横暴の爲世の中が面白くなくて籠居されたのであるのに。

御子どもなど 子息達も今迄は官途が滞滞して零落の有様であつたが。

宰相の中將 奏上の兄、もとの頭中將。右大臣の女で頭中將の本妻。

高砂うたひし君 賢木卷の事。後一、四四一頁。頭中將の子で後に紅梅右大臣。腹々に頭中將には、妻妾達の腹に子供が澤山次々と生れて賑かさうである事を源氏は羨しが

大殿腹 奏上の腹。故姫君 奏上。若君の殿上なさるに付けて。又更に 若君の殿上なさるに付けて。よろづもてなされ 萬事源氏の榮光に引立てられて。年頃おぼし沈みつる 左大臣は、今迄悲境に沈んで居つた跡形もないまでに家門は光彩に満ちてゐる。

譲りのこと俄なれば、大后・おぼしあわてたり。朱雀「かひなきさまながら、心・のどかに御覽ぜらるべき事を思ふ。」な「り」とぞ聞え慰め給ひける。坊にはじようきやうでんの「御腹の」みこ居給ひぬ。世の中・改まりて、引きかへ今めかしき事ども多かり。源氏の大納言、内大臣になり給ひぬ。かず定まりてくつろぐ所もなかりければ、加はり給ふなりけり。やがて世の政事をし給ふべき・なれど、源「さやうの、事繁きそくには堪へずなむ」とて、致仕のおとど、攝政し給ふべきよし譲り聞え給ふ。致仕病・によりて位も返し奉りてしを、いよく「老いのもり添ひて、さかしき事侍らじ」と、承け引き申し給はず。人の國にも、事移り世の中定まらぬ折は、深き山に跡を絶えたる人だにも、治まれる世には、しろがみをも恥ぢず出で仕へける。をこそ誠のひじりにはしけれ、病に沈みて返し給ひける位を、世の中かはりて又あらため

給は・むに、更に咎あるまじうおほやけ私定め・さる。ためし・もあ・りければ、すまひ果て給はで太政大臣になり給ふ。御年も六十三にぞなり給ふ。世の中・すさまじきにより・御子どもなど・沈むやうに物し給へるを、皆・浮びば、御子どもなど・沈むやうに物し給へるを、皆・浮び給ふ。取分きて宰相の中將、權中納言になり給ふ。かの四の君の御腹の姫君十二になり給ふを、内に參らせむとかしづき給ふ。かの高砂うたひし・君も、かうぶりせ・させて、いと思ふさまなり。腹々に御子どもいとあまた次々に生ひ出でつつ、にぎははしげなるを、源氏のおとどは羨み給ふ。大殿・腹の若君は、人より殊に・美しう・て、うち春宮の殿上し給ふ。故姫君の亡せ給ひ・し歎きを、宮おとど・又更にあらためておぼし歎く。されどおぼしはせぬ名残も、只このおとどの御光によろづもてなされ・給ひて、年頃お・ぼし沈みつる名残なき







うちの斯くて、冷泉院が帝位に  
おはします事を、その眞相は誰  
にもはつきりと分る事ではない  
が、相人の言は誤ではないと源  
氏は心中に思召した。源  
相人のこと、宿曜師の言。  
あらましごと、將來多分かうあ  
らうと推測される事柄。

ひがくしき 過分な望を抱い  
て居つたのだらう。  
及びなき心を、過分な望を抱い  
て居つたのだらう。  
さるに、それにしては將來  
后に立つべき人が邊鄙な田舎に  
お生れになつたといふ事は、

さる所に、明石のやうな田舎に  
はしつかりした乳母もあるまい  
と思召して。  
故院にさぶらひし 系圖は次に  
宮内卿宰相  
宣旨 むすめ(小少將)

かすかなる世に 心細い生活を  
して居たが。

さるべきさまに 乳母として明  
石に下るやうにと約束なさつ  
た。まだ若くて、その娘のさま。

さは聞えながら 娘は明石に參  
りますと返事はしたものの、ど  
うしたのかと迷つてゐたが、  
思ひ慰めて。

怪しう思ひやりなき 御身を田  
舎に遣すのは、妙に同情的ない  
仕打のやうだが、特別な事情が  
あつたから、私でさへ思ひがけ  
みづから居した事もあるといふ  
前例を考へて、當分辛抱して下さ  
い。  
うへの宮仕時々 この女は主上  
附きの御奉公の時々した事があ  
あつたのだが、お逢ひになる折も

きものに、おぼしたりしかど、ただ人におぼしおきてける  
御心をおもふに、宿世遠かりけり。うちの斯くておはします  
を、あらはに人の知ることならねど、相人のこと、空しから  
ずと、御心のうちにおぼしけり。今、行末のあらましごとを  
おぼすに、住吉の神のしるべ、誠にかの人も、世になべて  
ならぬ宿世にて、ひがくしき親も及びなき心をつかふにや  
ありけむ、さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、あやし  
き世界に生れたらむは、いとほしう、忝くもあるべきかな、こ  
の程過ぐして、迎へてむ、とおぼして、ひんが  
しの院、急ぎ造らすべきよし、催し仰せ給ふ。さる所にはかくし  
き、人もありがたからむをおぼして、故院にさぶらひし  
宣旨のむすめ、宮内卿の宰相にて亡くなりし人の子なりしを、  
母なども亡せて、かすかなる世に經けるが、はかなきさまにて  
子生みたりと聞召しつけたるを、知るたよりありて、事のつい

源氏に、出で、聞えける。人召して、さるべきさまに宣ひ契る。  
まだ若くて、何心もなき人にて、あけくれ人知れぬあばらやに眺  
むる心細さなれば、深うも思ひたどらず、この御あたりの事を  
ひとへにめでたう、思ひ聞えて、參るべきよし申させたり。  
いとあはれにかつは思して、いだし立て、給ふ。物のついで  
に、いみじう忍びまぎれておはしまいたり。さは聞えながら、  
いかにせましと思ひ亂れけるを、いと忝きによろづ思ひ慰めて、  
「ただ宣はせむさまに」と聞ゆ。よろしき日なりければ、いそ  
がし立て給ひて、怪しう思ひやりなきやうなれど、思ふさま  
殊なることにてなむ。みづからも、覺えぬすまひにむす  
ぼほれたりしためしを思ひよそへて、しばしは念じ給へ」など、  
事のありさま、委しう語らひ給ふ。うへの宮仕時々せしかば、  
見給ふ折もありしを、いたう衰へにけり。家のさまもいひ知ら  
ず荒れまどひて、さすかに大きなる所の、木立などうとましげ















よろづ 萬事仰々しくお祝の準備をして居つたので。今秋下見する人もなく散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり

まぎらぬ人も 此の乳母にあまり劣らぬ女房をも、父入道が縁を辿つて京から迎へて石上に附添はせてあるが、それどで山住でもしよと思つて居たのなどが偶々此處へ落著いたのなどである。

げにかく 成程斯様に源氏が思ひ出して下さる程の形見の姫君を生んだ自分も果報者だと明石上は次第に思ふやうになつた。

御文諸共に 乳母は明石上と一緒に源氏の御文を讀んで。

御返しには 明石上から源氏への返歌には。

數ならぬの歌 數ならぬ私に育てられた居る姫君を、今の五十日の祝の日に君の外には、如何にと尋ねてくれる方はない。かかたまさかの斯く稀々の御慰問につなぎゆく私の命もはかないものでございませぬ。お申越とも安心して死んでいける方法も存じて居ります。

浦よりまちに 伊勢集・六帖三の一み熊野の浦よりをち漕ぐ舟の我をばよそに隔てつるかな。私をのけものになさるといふ誠意に斯くまで本氣で斯うまで氣をまはすのですね。これは只これだけの感情です。

斯かれは これ程上手だからこそ源氏の寵愛が厚いのだと紫上は思ふ。

おほやけごども 公事が頻繁でおせき御身に 源氏は内大臣で出あるきも自由には出来ぬのである。

此處にも、よろづ所せきまで思ひ設けたりければ、この御使なぐば、闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ。乳母も、この女君のあはれに思ふやうなるを語らひ人にて、世の慰めにしけり。  
（このきは）をさく／＼劣らぬ人も、類に觸れて迎へ取りてあらずれど、こよなく／＼衰へたる宮仕人などの巖のなか／＼尋ぬるが落ちとまれるなどこそあれ、これはこよなう子めき思ひあがり。聞きどころある、世の物語などして、おとどの君の御有様、世にかしづかれ給へる御覺えの程も、女心地にまかせて限りなく語り盡せば、げにかく／＼おぼし出づばかりの名残とどめたる身も、いとたけくやう／＼思ひなりけり。御文・諸共に見て、心のうちに、あはれ／＼かうこそ思ひのほかにめでたき宿世はありけれ、憂きものはわが身にこそありけれ、と思ひ續けけれど、「乳母の事はいかに」など、こまやかにとぶらはせ給へるも忝く、何事も慰めけり。御返しには、

「數ならぬみ鳥隠に鳴く鶴を今日もいかにととふ人ぞなきよろづに思ひ給へむすぼほる有様を、かくたまさかの御慰めにかへ侍る命の程も、はかなくなむ。げにうしろやすく思ひ給へおくわざもがな」と、まめやかに聞えたり。うち返し見給ひつつ、あはれ」と長やかに獨りごち給ふを、女君尻目に見おこせ、浦よりをち漕ぐ舟の」と、忍びやかに獨りごちながめ給ふを、誠々に斯くまでとりなし給ふよ。こは只かばかりのあはれぞや。所のさまなどうち思ひやる時々、今迄の事も忘れがたき獨りごとを、よろこそ聞き過ぐい給はね」など恨み聞え給ひて、うはづつみばかりを見せ奉らせ給ふ。手などのいと故づきて、やんごとなき人苦しげなるを、斯かればなめり。とおぼす。  
かくこの御心取り給ふ程に、花散里を、かれ果て給ひぬるこそいとほしけれ。おほやけごども、繁く所せき



珍らしく源氏の方から目新  
のなかりは訪問なさらぬので  
あつた。

おぼし起して 進まぬ氣を取直  
して。

よろづにおぼしやり 花散里は  
君が始終氣にかけてお世話な  
るのを力にして暮して居られ  
る所故。

女御の君 花散里の御姉。

西の妻戸 花散里の住む方。  
いとど艶なる 艶の月影で見  
源氏の態度は 艶麗で、一  
どこまで花やかなのだらうと驚  
かせる。  
いとどつつましけれど 花散  
は非常に恥しくおはれるが  
今迄端近の所で眺めて居つた姿  
勢の儘で、直前に「いとど艶な  
る」とあるから、こゝは河内本  
である。「いとど」とあるのに従ふべき  
である。  
水鶏だにの歌 こんなあばら屋  
どうして源氏(月)を迎へること  
が出来よう。  
いひ消ち 源氏の來訪は自分故  
情ありげに、源氏に歌つて、源氏の愛  
さす意。

とりに どの女もそれ、  
に捨てがたいものだから、  
し露骨に恨まないので、  
おしなべての歌に戸をあけて居  
くられたものな男が、入つて來る  
知れたら、聞え給へど、言葉で  
なほ、疑はしき御心ばへには、  
筋矢張り、疑はしき御心ばへに  
の性質で、疑はしき御心ばへに  
年頃待ち過ぐし、空な眺めそ  
歸京を待ち通して居られたら、  
かには、源氏の花散里をおろそ  
空な眺めそ、須磨巻に花散里と  
別れる時、源氏の詠んだ歌「行  
曼らむ空な眺めそ」月影の暫し  
憂き身から、我身に取つては、  
歸京遊ばされ、我身に取つては、  
同じ事です。

五節 太宰大貳の女。

女は物思ひ 五節は源氏の事  
煩悶が絶えないので、親の大貳  
は色々考へ、もし説諭もする  
心やすき、源氏は、氣樂な表  
立たない、源氏(御殿を造つ  
たら、五節如き人々を集めて住  
ませ、思ひ通りに養育すべき  
君でも生れたら、その世話係に  
したいとお思ひになる。

御身に、思し憚るに添へても、珍らしく御目おどろく事のなき  
程、おもひしづめ給ふなりけり。五月雨のつれづれなる頃、

おほやけ私物しづかなるに、おぼし起して渡り給へり。よそな  
がらも、明暮につけて、よろづにおぼしやりとぶらひ、給

ふを頼みにて過ぐい給ふ所なれば、今めかしう心にくきさまに

そばみ恨み聞え給ふべきならねば、心やすげなり。年頃に、い

よくあ、れまさり、すぐげにておはす。女御の君に御物

語聞え給ひて、西の妻戸に夜更かして、西の妻戸には、立寄り給

へり。月おぼろにさし入りて、いとど艶なる御振舞、盡きもせ

ず見え給ふ。いとどつつましけれど、はし近うながめ給ひけ

るさまながら、のどやかにて物し給ふけはひ、いと目やすし。

水鶏のいと近う鳴きたるを、

水鶏だに驚かさずばいかにして荒れたる宿に月を入れまし

いとなつかしういひ消ち給へるぞ、とりくりに捨てがたき世か

な、かかるこそなか、身も苦しけれ、とおぼす。  
「おしなべて叩く水鶏に驚かばうはの空なる月もこそ入れ  
うしろめたう」とは、なほことに聞え給へど、あだくしき筋  
など、疑はしき御心ばへには、年頃待ち過ぐし聞え給  
へるも、更におろかにはおぼされ、ざりけり。「空な眺めそ」  
と頼め聞え給ひし折の事も宣ひ出でて、花散里など、たくひあ  
らじと、いみじう物を思ひ沈みけむ。憂き身からは、同  
じ歎かしさにこそ」と宣へるも、おいらかにらうたげなり。例  
のいづこの御言の葉にかあらむ。盡きせずぞ語らひ、慰め  
聞え給ふ。かやうのついでにも、かの五節をおぼし忘れず、  
又、見てしがなと、心にかけて給へれど、いと難きことに  
て、えまぎれ給はず。女は物思ひ絶えぬを、親はよろづに思  
ひいふ事もあれど、世に經むことを思ひ絶えたり。心やす  
き殿造りし、てば、かやうの人つどへても、思ふさま



かの院 二條の東院。

あて／＼に 分擔して工事に當

懲りずまに 性懲りもなく又も

女 朧月夜。

なか／＼所せう 赦免後の今日

院は 朱雀院は御讓位後氣樂に

春宮の女御 春宮の御母承香殿

かく引きたがへ 今は昔に變つ

入道後の宮 藤壺。

御位をあらため 藤壺は入道故

いと恥かしげに 源氏は外の程

なべての世には 源氏は世間一

にかしづき給ふべき人も出で物し給はば、さる人の後見にもと

院は、なか／＼世の世のどやかにおぼしなり、時々につけ

衣皆例のごとさぶらひ給へど、春宮の御母女御のみぞ、取り

へりしを、かく引きたがへめでたき御さいはひにて、離れいで

の淑景舎なり。梨壺に春宮はおはしませば、近隣りの御心寄せ

に、何事をも聞え通ひて、宮をも後見奉り給ふ。入道後の宮、

御位を、改め給ふべきならねば、太上天皇になずらへて、御封

出で入りも難く見奉り給はぬを、いぶせくおぼしけるに、お

ぼすさまにて参りまかて給ふ。もいとめでたければ、大后は、

憂きものは世なりけり、とおぼし歎く。おとどは、事に觸れ

ていと恥かしげに仕うまつり、心寄せ聞え給ふも、なか／＼い

なれど、この御あたりは、なか／＼なさけなきふし、

もうちませ給ふを、入道の宮は、いとほしう本意なき事



世の中のこと 天下の政事は、折半して太政大臣と源氏とお二人の自由である。権中納言の御むすめ 昔の頭中将の御娘、母は右大臣の四の君、冷泉院に入内して弘徽殿女御といふ。

太政大臣——權中納言  
右大臣——四の君 弘徽殿 冷泉院

おほぞおとど 祖父太政大臣。おとどは源氏は中君が人より幸運であるやうにとは思つて居なかつた。願ども果たし 願が叶つてお禮参りする事。報賽(かへりまうし)

年ごとの例にて 毎年の恒例として住吉詣をするのだが。

去年今年さはる事ありて 懷妊の爲に。意りける 参詣を怠つたお詫をかねてお詣りに出かけた。

いつくしき神寶を いかめしい奉納品を捧げて列をなしてゐる。十列 東遊の舞人、十人で社頭で東遊を奏し馬場で競馬をする。

げにあさましよう ほんとうに呆れた事だ。外にくらも月日はあつた。源氏の有様を遙に見ては、身分の相違を見せつけられて、参詣した事が残念に思はれる。かき離れ奉らぬ 姫君をまうけた事。

色ふしに思ひたるに 名譽と心得て居るのに。源氏の御参詣の騒ぎを知らずに出かけて来た事だらう。しほたれけり 鹽垂の意で海縁語。うへのきぬ 袍は官位の高下によつて色の種類及濃淡を異にする。六位のなかにも 六位藏人は四人あつて、最古参者即ち極蔭は天子着御の山鳩色の御袍即ち麴座の御袍は瑞垣の事。着御する。青色の賀茂の瑞垣。須磨巻に源氏が北山の御参拜のお供をして、一打連れて葵かざしそのかみ詠んだ右近の承。賀茂の瑞垣と靱負と衛門尉の事。衛門府を靱負府ともいふ。

養上の父太政大臣

に見奉り給ふ。世の中のこと、只なかばを分けておほきおとど此のおとどの御ままなり。權中納言の御むすめ、その年の八月に参らせ給ふ。おほぞおとど居立ちて、儀式などいとあらまほし。兵部卿の宮の中の君も、さやうに心ざしてかしづき給ふ。名高きを、おとどは、人よりまさり給へとしもおほさずなむありける。いかかし給はむとすらむ。

源氏の住吉詣 その秋住吉にまうで給ふ。願ども果たし給ふべければ、いかめしき御ありきにて、世の中ゆすりて、上達部殿上人、我も我もと仕らまつり給ふ。折しもかの明石の人、年ごとの例の事に仕らまつるを、去年今年さはる事ありて、怠りけるかしこまり取りかさねて、思ひ立ちけり。舟にてまうでたり。岸にさしつくる程見れば、ののしりて詣で給ふ人のけはひ、渚に満ちて、いつくしき神寶をもて續けたり。樂人十列など、装束をを整へ、かたちをえらびたり。明石が詣で給へるぞ

と問ふめれば、下部内のおほい殿の御願果たしに詣で給ふを、知らぬ人もありけり」とて、はかなき程のげすだに、心地よげに打笑ふ。げにあさましよう。月日もこそあれ、なか／＼この有様を遙に見奉るに、身の程口惜しうおぼゆ。さすがにかけ離れ奉らぬ宿世ながら、物思ひなげにて、仕らまつるをく口惜しき際の者だに、物思ひなげにて、仕らまつるをみじき色ふしに思ひたるに、何の罪深き身にて、心にかけて覺束なう。思ひ聞えつつ、斯かりける御響きをも。知らで立ちいでつらむ、など思ひつづくるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。松原の深緑なるなかに、花紅葉をこき散らしたると見ゆるうへのきぬの、濃き薄き。六位の中にも藏人は青色しるく見え、かの賀茂の瑞垣恨みし右近のじようも靱負になりて、事々しげなる隨身具したる藏人なり。良清も同じすけにて、人より

と問ふめれば、下部内のおほい殿の御願果たしに詣で給ふを、知らぬ人もありけり」とて、はかなき程のげすだに、心地よげに打笑ふ。げにあさましよう。月日もこそあれ、なか／＼この有様を遙に見奉るに、身の程口惜しうおぼゆ。さすがにかけ離れ奉らぬ宿世ながら、物思ひなげにて、仕らまつるをく口惜しき際の者だに、物思ひなげにて、仕らまつるをみじき色ふしに思ひたるに、何の罪深き身にて、心にかけて覺束なう。思ひ聞えつつ、斯かりける御響きをも。知らで立ちいでつらむ、など思ひつづくるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。松原の深緑なるなかに、花紅葉をこき散らしたると見ゆるうへのきぬの、濃き薄き。六位の中にも藏人は青色しるく見え、かの賀茂の瑞垣恨みし右近のじようも靱負になりて、事々しげなる隨身具したる藏人なり。良清も同じすけにて、人より







神の御しるべ 神の御引合せ。源氏が明石上と契を結ぶに至つた事や今日此處で邂逅した事など。おろかならねば 明石上との間はおろそかには思はれないか。なかく 悲し 明石上が源氏を見たら 却つて 思召して 居るだらうと 源氏は 思召して 居るだらうと 七瀬は 思召して 居るだらうと 今 被の場 拾遺 戀二つ 難波に 今 被の場 拾遺 戀二つ 難波に 今 被の場 拾遺 戀二つ 難波に 今 被の場 拾遺 戀二つ 難波に

みをつくしの歌 身を盡して戀も来たぬ 甲斐があつた二人の縁は 深し 心知れる 惟光が明石上方の事情を知つてゐる下部を 呼んで 標は 難波江の名物だから 江の縁語 「深し」も 江の縁語から

數ならで 何事にも 甲斐のない身で 身に 高貴の方を 思ひそめた事や せうな 高貴の方を 思ひそめた事や 語にある 濡標、貝共に 難波の縁 御祓のものを 御祓に用ひた木綿 奉つた 消息を 結び付けて 源氏に 入江のたづも 古今 雜上・神樂 歌 難波 湯 古 今 雜上・神樂 入江のたづも 古 今 雜上・神樂 露けさの歌 私の旅衣は 涙の 露けさの歌 私の旅衣は 涙の 露けさの歌 私の旅衣は 涙の 露けさの歌 私の旅衣は 涙の

いでや 以下 源氏の心。いやど じらも 相白く 思ふ事も 物哀を感じる だる事 多令 人柄 次第 による かな事柄 多少 軽薄 らしく 見 ける事柄 には 源氏 がお 思ひ かなる事柄 には 源氏 がお 思ひ かなる事柄 には 源氏 がお 思ひ かなる事柄 には 源氏 がお 思ひ

響きに押されて過ぎぬる事も聞ゆれば、知らざりけるよと  
あはれにおぼす。神の御しるべ。おぼし出づるもあろかな  
おぼさきねば、いささかなる御消息をだにして、心・慰めば  
や、なかくにおもふらむかし、とおぼす。御社立ち給ひて、  
所々に逍遙を盡し給ふ。難波の御祓など、殊に七瀬によそほし  
う仕うまつる。堀江のわたりを御覽じて、「今はた同じ難波なる」  
と、御心にもあらでうちずし給へるを、御車のもと近き惟光、  
承り・やしつらむ、さる召しもやと、例にならひて懷に設けた  
る柄みじかきふんなどで、御車とどむる所にて奉れり。をかし  
とおぼして、壘紙に、  
源氏 身を盡しに 濡標がきかしてあるし  
みをつくしの戀ふる證に 爰までも 廻りあひける 縁に江がきかしてある  
とて 賜へれば、かしの心知れる 下人・してやりけり。駒な  
べて うち過ぎ給ふにも、心のみ動くに、露ばかりなれど、いと  
あはれに 忝く 覺えて、うち泣きぬ。

數ならで 何事にも 甲斐のない身で 身に 高貴の方を 思ひそめた事や せうな 高貴の方を 思ひそめた事や 語にある 濡標、貝共に 難波の縁 御祓のものを 御祓に用ひた木綿 奉つた 消息を 結び付けて 源氏に 入江のたづも 古今 雜上・神樂 歌 難波 湯 古 今 雜上・神樂 入江のたづも 古 今 雜上・神樂 露けさの歌 私の旅衣は 涙の 露けさの歌 私の旅衣は 涙の 露けさの歌 私の旅衣は 涙の 露けさの歌 私の旅衣は 涙の  
露けさのむかしに似たる旅衣たみの島の名にはかくれず  
道のままに、かひある 逍遙・遊びののしり給へど、御心には  
なほかかりておぼしやる。遊びどものつどひ參れるも、上達  
部と聞ゆれど、若やかに 事好ましげなるは、皆目とどめ給ふべ  
かめり。されど、いでや、をかしき事も物の哀も、いぞ人か  
ら・こそあんべけれ、なのめなる事をだに、すこしあはき方  
に 寄りぬるは、心とどむるたよりもなきものを、とおぼすに、  
あのが心をやりて、よしめきあへるも、いと源氏の心に  
しけり。しけり。



かの人、明石上は源氏をやり  
過つたので、その翌日、日柄がよ  
かつたので、住吉の神に御幣物を  
捧げ、身に相應しいかづの願  
願解など懇にすませた。  
今や京に、今頃は御着京になつ  
たらうと思ふ程の日數もたぬ  
内に御使が来た。

いざや、どうかなあ、この浦を  
離れて都へ行つたら、どちらつ  
かずで心細い事はなからうか。

かく埋もれて、明石上がかうし  
すであらうことを心配しなけれ  
ばならぬとおもふと、却つて今  
迄の數年よりも氣の揉める事  
ある。  
よろづに、萬事に憚り多くて、  
上洛を決心しかねて居る趣を明  
石上から返事した。  
かの齋宮も、齋宮は御代の改ま  
ることに交替するのであるから  
冷泉院の御即位と共に秋好は齋  
宮をおりたのである。  
萬事を世話する以前通り源氏が  
なかくならむ事は、再び逢つて  
た味ふやうなことはすまいと斷  
念して居るので、源氏も通つて  
行く事はない。

あなたがち、無理に御息所を動  
かして見た所で、どう變心する  
か、自分の心が自分で分らない  
し。かかづらむ御ありきとや  
かくと女にかかはりのある忍びあ  
るきも、今では窮屈を感じる身  
になつたので、御息所に強ひて  
齋宮を、秋好は十四で、下向今  
年二十。  
六條の齋宮を、御息所は六條京  
極の舊邸を修理したので。

すいたる人の、好色男共の寄合  
所で、河内本「すきはめた人の」  
は本の儘。

罪深きところ、齋宮は神宮に奉  
仕して居つて、佛や經を一切近  
づけぬから斯くいふ。  
かけぬ、しき懸想といふ方か  
らではないが、然るべき相談相  
手と思つて居つたのに。

明石上  
かの人、人は過ぐし聞えて、又の日ぞよろしかりければ、御幣たて  
まつる。程につけたる願どもなど、かつ、果たしける。又、  
か、物思ひ添はりて、あけくれ口惜しき身を思ひ歎く。今や  
京におはし著くらむと思ふ日かずも經ず御使あり。此頃の程に  
迎へむことをぞ宣へる。いと頼もしげにかずまへ宣ふめれど、  
いざや、また、島漕ぎ離れ、中空に心細きことやあらむ、と思ひ  
煩ふ。入道も、さていだし放たむ。はい、とうしろめたら、さり  
とて、かく埋もれて過ぐさむを思はむも、なかく、きし方の年  
頃よりも心づくしなり。よろづにつつしましう、思ひ立ちがた  
き事を聞ゆ。  
閑話休題  
まことや、かの齋宮もかはり給ひにしかば、御息所のぼり給ひ  
てのち、變らぬさまに何事もとぶらひ聞え給ふ事は、あり  
がたきまでなさを盡し給へど、昔だにつれなかりし御心ばへ  
の、なかくならむ名残は見じと、  
女君も今はましと、思ひ放ち給

へれば、渡り給ひなどすることは殊になし。あなたがちに動かし  
聞え給ひても、わが心ながら、知りがたく、とかくかかづ  
ら、はむ御ありきなども、所せう。おぼしなりにたれば、  
しひたるさまにもおはせず。齋宮をぞいか、にねびなり給ひ  
ぬらむと、ゆかしう思ひ聞え給ふ。なほかの六條の舊  
宮を、いとよくすりし繕ひたりければ、みやびかにて住み給ひ  
けり。よしづき給へることふりがたくて、よき女房など多く、  
すいたる。人のつどひ所にて、物淋しきやうなれど、心や  
れるさまにて經給ふほどに、俄に、あもく煩ひ給ひて、物の  
いと心細くおぼされければ、罪深きところに年經つるも、いみ  
じうおぼして、尼になり給ひぬ。おとど聞き給ひて、かけ、  
しき筋にはあらねど、なほさる方の物をも聞え合せ人に思ひ聞  
え、つるを、かくおぼしなりにけるが口惜しう覺え給へば、驚  
きながら渡り給へり。飽かずあはれなる御とぶらひ聞え給ふ。



近き御枕上に 御息所の枕元に  
源氏の御座席を設けて。  
絶えぬ志の程は 今も變らぬ愛  
情の程を見せる事が出来ないで  
終るのかと源氏は残念に思つ  
て。かくまで これ程まで自分を思  
つて居つてくれた事を御息所は  
嬉しく思つて。

又見ゆづる人もなく 君の外に  
は誰にもお世話頼む人もなく  
て、又とない哀な身の上なので  
かひなき身ながらも 詰らぬ私  
では居られると思つて、その間  
は「思ひのどむる程は」は一見  
奉らむにつづく。  
かかる御事 こんな御遺言がな  
くともほつておく筈もありま  
るのに、もし御依頼を受けたか  
らには心の届く限り世話する積  
りです。  
つつかしい事です。眞實頼るべき  
管の父親などであつて、それに  
娘の世話を託してさへ、女親の  
手から離れた娘は可愛さうなも  
のです。  
女親 湖月抄には「めおや」と  
訓じてあるが、諸本には「女お  
や」とあつて、女の字に訓はつ  
けてない。或は「をんなおや」と  
讀むべきか。

まして思ほし まして君が齊宮  
を我が子のやうに取扱つて下さ  
るに、詰らぬ嫉妬沙汰  
も起り、他の婦人達から疎外も  
されませう。  
うたてある いやな案じすごし  
です。決してそんな愛人風な  
氣をおこして下さるな。不幸な  
自分に願ひて見ましても。

いかで 齊宮をも是非そんな男  
女關係には觸れさせずにおきた  
いと存じます。  
あいなくも つまらぬ事をいふ  
ものだと源氏は思つたが、  
年頃よろづに 私も数年來何か  
と分別も出来ましたのに、昔の  
浮氣心がまだ残つて居るやうに  
仰しやられるのは不意です。  
まあそのうちに分ります。

もしもやと もしか御息所母子  
が見えはせぬかと思はれて、  
縫外を見る爲帷子の縫合はさ  
ずにある部分。

帳 御帳臺。  
しどけなく 亂雑に引きのけら  
れてある隙間から。

近き御枕上に 御座よそひて。 脇息におしかかりて、 御返りなど  
聞え給ふ。 ・ ・ ・ いたう弱り給へる。 けはひなれば、 絶えぬ志の  
程は見え奉らでやと、 口惜しうて、 いみじう泣い給ふ。 ・ ・ ・ か  
くまで思しとどめたりけるを、 女もよろづにあはれにおぼして、  
齊宮の御事をぞ聞え給ふ。 御息心細くてと、 まり給はむを、 必ず  
事に觸れてかずまへ。 ・ ・ ・ 聞え給へ。 又見ゆづる人もなく、 たく  
ひなき御有様になむ。 かひなき身ながらも、 今暫し、 世の中を  
思ひのどむる程は、 とざまかうざまに物をおぼし知るまで、 見  
奉らむとこそ思ひ給へつれ」とても、 消え入りつつ泣き給ふ。  
運かかる御事なくてだに、 思ひ放ち聞えさすべきにもあらぬを、  
まして心の及ばむに従ひては、 何事も後見聞え。 ・ ・ ・ むとなむ思  
ひ給ふ。 ・ ・ ・ 更にうしろめたくな思ひ聞え給ひそ」など聞え給へ  
ば、 御息いと難き事。 ・ ・ ・ 誠に打頼む。 ・ ・ ・ べき親などにて見讓る  
人だに、 女親に離れぬるは、 いとあはれなる事にこそ侍るめれ。

まして思ほし 人めかさむにつけても、 あぢきなき方や打ちまじ  
り、 人に、 心もおかれ給はむ。 うたてある思ひやりごとなれど、  
かけてさやうの世づいたる筋におぼし寄るな。 憂き身をつみ侍  
るにも、 女は思ひのほかにて、 物思ひを添ふるものに、 なる侍  
りければ、 いかで、 さる方を、 ても離れて見奉らむと思ひ給ふ  
。 ・ ・ ・ など聞え給へば、 あいなくも宣ふかな、 とおぼせど、 年  
頃、 よろづ思ひ給へ知りにたるものを、 昔のすき心の名残あり  
がほに宣ひなすも本意なくなむ。 ・ ・ ・ よしおのづから」とて、  
外は暗うなり、 内、 大殿油。 ・ ・ ・ ほのかに物よりとほりて  
見ゆるを、 もしもやとおぼえ。 ・ ・ ・ て、 やをら御几帳の綻より見  
給へば、 心もとなきほどの火影に、 御髪いとをかしげに、 花や  
かにそぎて寄り給へる、 繪にかきたらむさまして、 いみじう  
あはれなり。 帳の東面に添ひ臥し給へるぞ宮ならむかし。 御几  
帳のしどけなく引きやられたるより御目とどめて見とほし給へ



ひぢちかにかに 小柄で。人にとられはせぬ心もとなく、ほつておけないやうに思ふ事。  
さばかり宣ふものを 御息所があれ程心配していはれたのだものをと源氏は思ひ返した。だも忝きを 失禮があつては畏れ多いから早くお歸り下さい。よろしうおぼされば すこしでも快方ならば嬉しからうに。

いと怖ろしげに 瘦せ衰へてゐる姿を取ぢた言葉である。亂り心地の 病氣の臨終の折にお訪ね下さいましたのは、淺からぬ御志と存じます。さりともと いくら何でも粗略にはお思ひ下さるまいと心強く存じます。  
斯かる御遺言の 御遺言を承る人の仲間に私をお入れ下されたのも一入忝く存じます。  
うへの 故院が齋宮を御子達同様に取り扱はれたから、私も妹として方に致しませう。私も妹と

あつかふ人も 世話すべき子供もないから。

御とぶらひ 源氏は今までよりも一層懇切に度々御慰問申されあへなう 源氏は張合なく思召すにつけても。

とかくの御事など 葬送や佛事などお指圖になる。源氏以外には頼もしき人も 源氏以外に

女別當 齋宮寮の官女。

人々召しいて 源氏が御息所方の人々を。いと頼もしげに 源氏が力になつて下さるので、今迄の冷淡な思はれる。償ひが出来さうにいといかめしう お葬式を立派になさつて二條院に居る人々を澤山會葬させなされた。

れば、頼杖つきて、いと物悲しとおぼいたるさまなり。はつか  
なれど、いと美しげならむと見ゆ。御髪の、かかひたる程、  
頭つきけはひ、あてにけだかき、ものから、ひぢちかにか  
・・・愛敬づき給へるけはひしるく見え給へば、心もとなく  
ゆかしきにも、さばかり宣ふものをとおぼし返す。御息いと苦し  
さまさり侍り。忝きを、はや渡らせ給ひね」とて、人に、かき  
臥せられ給ふ。近く参り、たるしるしに、よろしう、おぼさ  
れば嬉しかるべきを、心苦しきわざかな。いかにおぼさるぞ」  
とて、のぞき給ふ氣色なれば、いと怖ろしげに侍りや。亂り  
心地のいと斯く限りな、る折、しも渡らせ給へるは、誠に  
淺からずなむ。思ひ侍る事をすこしも聞えさせつれば、さりとも  
も頼もしくなむ」など聞えさせたまふ。斯かる御遺言のつ  
らにおぼしけるも、いとどあはれになむ。故院の御子達あま  
た物し給へど、親しくむつびおぼすもをさく、なきを、うへの

同じ御子達のうちにかずまへ聞え給ひしかば、さこそは頼み聞  
え侍らめ。すこし大人しき程になりぬる齡ながら、あつかふ人  
もなけれ、さうくしきを」など聞え、て、歸り給ひ  
ぬ。御とぶらひ、いますこし立ちまさりてしばし聞え給ふ。  
七八日ありて亡せ給ひにけり。あへなうおぼさるるに、世もい  
とはかなくて、物心細うおぼされて、うちへも参り給はず、  
とかくの御事などおきてさせ給ふ。又頼もしき人も殊におはせ  
ざりけり。ふるき齋宮の宮司など、仕うまつり馴れたるぞわ  
づかに事どもさだめける。御みづからも渡り給へり。宮に御消  
息聞え給ふ。何事もおぼえ侍らでなむ」と、女別當して、  
聞え給へり。聞えさせ宜ひおきし事ども侍りしを、今は隔て  
なきさまにおぼされば、嬉しくなむ」と聞え給ひて、人々  
召しいでて、あるべき事ども仰せ給ふ。いと頼もしげに、年  
頃の御心ばへ取りかへしつべう見ゆ。いといかめしう、殿の



みづからも 齋宮自身も源氏に  
御返事申される。

忝し 人傳ての返事は畏れ多  
い。

降り亂れの歌 雪や雲のひまな  
く降り亂れておる中を、亡き御  
母君の御霊がお家の上も離れか  
ねて天がけつて居られぬ事だ  
うと思はれて悲しい。四十九日  
まで佛説にやうな棟を離れぬと  
いふ佛説にやうな棟を離れぬと  
空色 曇り日は空色即ち鈍色の  
紙を用ひたのは衷中だからであ  
る。

消えがてにの歌 悲しみに心も  
暗れぬやうな世の中に、なほも  
死ねずに生きて居るのが悲しう  
ございます。

なほあかず 齋宮を伊勢へくだ  
すに。惜しいと思つて居られた  
のには。心にかけて 今では懸想  
て言ひ寄らうと思へば言ひ寄ら  
れる。思ひ返して、一方には、例  
だ、故御息所が不安に思つて居  
理だ、世間の人にも自分の齋宮  
を只が、おかないで、世話をし  
る。裏をかいて潔白で世話しよ

昔の御なごりに 親しくして下さ  
るなら本望です。

人々かすもなう仕うまつらせ給へり。あはれにうち眺めつつ、  
御さうじにて、御簾おろしこめて行はせ給ふ。宮には常にとぶ  
らひ聞え給ふ。やうく御心しづまり給ひては、みづからも  
御返りなど聞え給ふ。つつましう思したれど、御乳母など、  
「忝し」とそのかし聞ゆるなりけり、雪霰かきみだれ荒る  
る日に、いかに宮の御有様かすかに眺め給ふらむ、と思ひやり  
聞え給ひて、御使奉れ給へり。源文「只今の空を、いかに御覽ずら  
む。」

源氏 降り亂れひまなき空に亡き人の天翔るらむ宿ぞかなしき  
空色の紙の曇らはしきに書い給へり。若き人の御目に・とどま  
るばかりと、心してつくろひ給へる、いと目もあや  
なり。宮はいと聞えにくくし給へど、これかれ、一人づてにて、  
びんなき事」と責め聞ゆれば、鈍色の紙のいとかうばしう  
艶なるに、墨つきなどまぎらはして、

消えがてにふるぞ悲しき搔暗し我身それとも思ほえぬ世に  
つつましげなる書きざまにて、いとあほどかに御手・すぐれ  
てはあらねど、らうたげにあてはかなるすぢに見ゆ。くだり給  
ひし程より、なほあかずあほし・たりしを、今は心にか  
けてともかくも聞え寄りぬべきぞかし、とあぼすには、例の引  
きかへし、いとほしくこそ。故御息所の、いとうしろめたげに  
心あき給ひしを、ことわりなれど、世の中の人もさやうに  
思ひ寄りぬべきことなるを、引きたがへ心清くてあつかひ聞え  
む、うへの今すこし物あほし知るよはひにならせ給ひなば、う  
ちずみせさせ奉りて、さうくしきに、かしづきぐさに、こ  
そ、とおぼしなる。いとまめやかにねんごろに聞え給ひて、  
さるべき折々は渡りなどし給ふ。源「かう申しては失禮ですが  
なごりにあほしなずらへて、けどほからずもてなさせ給はば  
なむ本意なる心地すべき」など聞え給へど、わりなく物恥ぢを



奥まりたる 内気な性質で。

かかる御心さまを 齋宮の引込  
思案の性質を。  
あるは離れ奉らぬ 或は齋宮に  
縁なきの王孫などで才覚ある婦  
人達が多い事であらう。  
この人知れず思ふ方の 源氏が  
内々計畫してある宮仕をおさせ  
申しても、齋宮は他の女御達に  
劣る事はあるまい。

かく思ふといふ事も 源氏は齋  
宮を入内させようといふ考を誰  
にも漏らさない。  
御わざ 故御息所の追善供養。

いとど淋しく 齋宮の御所のさ  
ま。  
下つかたの京極 齋宮のお邸は  
下京の京極邊故。  
山寺の入相の鐘の聲ごとく今日も暮  
れぬと聞くぞ悲しき

あながちにいざなひ 齋宮が無  
理に母君をお誘ひ申したのに、  
死田の道にはお供せずにしたま  
た事を、涙の乾く間もなくお歎  
きになつてゐる。

心にまかせたる事 勝手な手引  
するやうな事をしてくれるなど  
親のやうな態度で申されるの  
いと恥かしき 大變氣のはる源  
氏だもの不始末は聞きつけられ  
た。くない。  
かのくだり給ひし日 賢木巻に  
あつた。卷一、三九六頁。  
いづくしかりし 莊殿であつ  
た。

齋院 朱雀院の皇妹。權齋院と  
は別人。  
御はらからの宮々 朱雀院の御  
兄弟の皇子皇女達と同様にして  
宮中においでなさい。

し給ふ奥まり・たる人さまにて、ほのかにも御聲など聞かせ奉  
らむは、いと世になく珍らかなる・事とおぼしたれば、人々  
も聞えわづらひて、かかる御心さまをうれへ・聞えあへり。女  
も齋宮の侍女達  
別當、内侍などいふ人々、あるは離れ奉らぬわかんどほりな  
どにて、心ばせある人々多かるべし、この人知れれず思ふ方  
・のまじらひをせさせ奉らむに、人に・劣り給ふまじかめり  
・、いかでさやかに・御かたちを見・てしがな、と思すも、  
うちとくべき御親心にはあらずやありけむ、わが御心も定めが  
たければ、  
御わざなどの御事も、取りわきてせさせ給へば、ありがたき御  
心・を、宮人も喜びあへり。  
はかなく過ぐる月日に添へて、いとど淋しく・心細きことのみ  
まざるに、さぶらふ人々も、やうくあかれゆきなどして、下  
つかたの京極わたりなれば、人げ遠く、山寺の入相・の聲々

に添へても、ね泣きがちにてぞ過ぐし給ふ。同じき御親と聞え  
しなかにも、片時のまも立ち離れ奉り給はでならはし奉り給ひ  
て、齋宮にも親添ひてくだり給ふ事は例なき事なるを、あなが  
ちにいざなひ聞え給ひし御心に、限りある道にては、たくひ聞  
え給はずなりにしを、ひるまなうち・ぼし歎きたり。さぶらふ  
人々につけて、心かけ聞え給ふ人、たかき・いやしきもあま  
たあり。されど、おとどの御乳母たちに、「心にまかせたる事、  
引きいだし仕らまつるな」など、親がり申し給へば、「いと恥か  
しき御有様に、びんなき事聞召しつけられじ」といひ思ひつつ、  
はかなき事のなさけも更につくらず。院にも、かのくだり給ひ  
し日、大極殿のいつく・しかりし儀式に、ゆゆしき  
まで見え給ひし御かたちを、忘れがたうおぼしおき・ければ、  
「参り給ひて、齋院など御はらからの宮々おほしますたぐひに  
てさぶらひ給へ」と、御息所にも聞え給ひにき。されどやん







げに知らぬやうにて入道宮の  
仰せの通り何も知らぬ顔で宮を  
二條院に引取らうかと思はれ

語らひ聞えてお話相手になつ  
て暮すにはよい間柄でせう。紫  
上二十一、齋宮二十。齋宮引取  
御渡りの事 齋宮引取りの準

入道の宮には藤壺は、兵部卿  
宮が姫君を早く入内させようと  
騒いで居られるが、宮と源氏と  
は不和の間柄故、源氏が邪魔で  
もせぬかと心苦しく思召す。  
權中納言 昔の頭中將。奏上の  
兄。

おほい殿の御子にて、權中納言  
は太政大臣の御子で、この姫君  
を綺羅びやかにお世話なさる。  
うへも 主上御十一、弘徽殿十

宮の兵部卿宮の中君も主上と  
同年輩故、雛遊のやうな気がし  
て、年長のお世話役のある事は  
嬉しい事です。  
さる御氣色 齋宮入内の事を藤  
壺が主上に申上げる。

参りなど藤壺が参内などなき  
れども、主上の御側で氣樂にし  
ておいでなる事もむつかしい  
事故、すこし年長のお側にお  
世話役は是非必要なわけであつ  
た。

いかにとこそ憚り侍れ」など聞え給ひて、のちにはげに知らぬ  
やうにて此處にわたし奉りてむ、とおぼす。女君にも、齋宮引取  
なむ思ふ。語らひ聞え、給ひて過ぐい給はむに、いとよき程なる  
あはひならむ」と聞え知らせ給へば、樂上の心嬉しき事におぼして、御  
渡りの事をいそぎ給ふ。藤壺入道の宮には、兵部卿の御兄兵部卿の宮の、姫君を  
いつしかとかしづきさわざ給ふめるを、源氏おとどのひまある・中  
にて、いかがもてなし給はむと、心苦しうおぼす。權中納言の  
御むすめは弘徽殿の女御と聞ゆ。おほい殿の御子にて、いとよ  
そほしうもてかしづき給ふ。冷泉院うへも、よき御遊びがたきにおぼ  
いたり。藤壺宮の中の君も同じ程におはすれば、うたて雛遊の心  
地すべきを、おとな・しき御後見・はいと嬉しかるべきこと  
とおぼし宣ひて、さる御氣色聞え給ひつつ、源氏おとどの・よろ  
づにおほしいたらぬ事なく、政治上の補佐は勿論おほやけがたの御後見は更にもい  
はず、日常の私向の事につけてもあけくれにつけて、主上に對する懇なる御心向けこまかなる御心ばへのいとあはれに

見え給ふを、藤壺が源氏を信頼して頼もしきものに思ひ聞え給ひて、藤壺の病氣がちな事いとあつしくの  
みちはしませば、参りなどし給ひても、心やすく・さぶらひ給  
ふ事も難きを、すこしおとなびて添ひさぶら・はむ御後見・  
は、必ずあるべき事なりけり。



1677



藻鹽垂れつつ 源氏が須磨明石  
 行平一わくらはに問ふ人あらば  
 須磨の浦に藻鹽垂れつつわぶと  
 答へよ 歎く人 歎いて居られる  
 おぼし 歎く人 歎いて居られる  
 さてもわが身の 保障のある婦人は  
 一方の思ひこそ 源氏の左遷に  
 よつて 苦痛は感じたといふだけ  
 の点で 世の世の 古今雜下「今さ  
 竹のこの世は 出らん竹の子のうき  
 ふし繁き世とは いらざや」この  
 歌の語によつて 書いてある「竹  
 ひは竹の子の 枕詞」  
 ひかした 枕詞  
 「憂きふしを」との言葉は、上  
 御よそひをも」と對におか  
 あるのだから、河内本の一憂き  
 ばしをぬ」とあるのに従はな  
 ればならぬ。即ち「憂きふしを  
 ひをもぬ」とあるの「憂きふし  
 ついでにつけてあるかひ聞え給」と  
 なか／＼そのかずとも 源氏が却  
 つら源氏の愛されなかつた爲に  
 御退京當時の有様も知られず  
 やうに思ひやつて居る方々が多  
 内心色々歎いて居る方々が多  
 ある。又思ひあつかふ 他に心かけ  
 と世話のしつゝ 孤獨の身かけ  
 とぶらひ聞え給ふ 源氏が未摘  
 花の生活絶えなかつたあげら  
 れる事が絶えなかつたあげら  
 待ち受け給ふ 花の貧しい生活から  
 見ては 未摘花の貧しい生活から

蓬生

藻鹽垂れつつわび給ひし頃ほひ、都にも、さま／＼おぼし歎く  
 人・多かりしを、さてもわが身(御有様)のよりどころあるは、一方  
 の思ひこそ・苦しげなりしか、二條の上(紫上)なども(生活が豊たから)やかにて、  
 旅の御すみかをも、おぼつか(御無沙汰しないで)かなからず聞え通ひ給ひつつ、位を  
 去り給へるかりの御よそひをも、竹のこの世の憂きふしを(竹の縁語)・  
 時々につけてあつかひ聞え給ふに・慰め給ひ(ふ事もあり)・けむ。な  
 か／＼そのかずとも人にも知られず、立ち別れ給ひしほどの御  
 有様をも、よその事に思ひやり(聞え)・給ふ人々の、したの心・碎  
 き給ふたぐひ多かり(はむ)・常陸の宮の君は、父みこの亡せ給ひ  
 にし名残に、又思ひあつかふ人もなき御身にて、いみじう心細  
 げなりしを、思ひかけぬ御事の出で来て、とぶらひ聞え給ふ事  
 絶えざりしを、いかめしき御いきほひにこそ、事(そんな世話は物の数でもなく一寸)にもあらずは  
 かなき程の御なさけばかりとおぼしたりしかど、待ち受け給ふ  
 御袂のせばきには、大空の星の光を盥(たらひ)の水にうつしたる心地し



わざと 格別情愛の深からぬ女の事は忘れたやうな形になつて、須磨へ行つてからは、わざと音信もなさない。

その名残に 末摘花は源氏のお世話を受けた名残で。古き女ばら 末摘花の老侍女達。

斯かるよすがも 人には斯うした縁邊が出来たものであつたと思つて居つたに、事のやうに大方の世の事は、不幸に沈む事に頼るすべのない姫君の御身の上が悲しい。さる方に さいうした點即ち貧乏に馴れきつて居つた過去の數年すこし世づきて 源氏のお蔭で近年は多少人並の生活をし馴れて来た爲に、却つて今は餘計に堪へがたく歎いてゐられるやうだ。すこしも すこしでも物の役に立ちさうな女房達は皆あとから離れ散つてしまつた、源氏が豊かであつた爲に、自然、生活がついてもゐたけれども。

上下の人 末摘花の侍女達で身分の高下の人々。

うとましよう 氣味のわるい、人げを離れてゐる木立の中に。

人げにこそ 以前には人げがあつたので。木魂 樹木の靈。以下は現在の有様をいふ。

ずりやう 受領。地方長官。

放ちたまはせてむや このお邸をお賣り下さらぬか。ほとりにつきて 手蔓を求めて申込んでくる。

あないみじや まあひどい事を。人の手前もある。

て過ぐし給ひし程に、須磨引退の事かかる世のさわぎ出で来て、源氏の心になべての世憂くおぼし亂れしまぎれに、わざと深からぬ方の志は、うち忘れたるやうにて、須磨へ遠くおはしましにしのち、わざとふりはへてしもえ尋ね聞え給はず。その名残に、暫しは泣くくも過ぐし給ひしを、年月ふるゆるままに、哀れに淋しき御有様なり。古き女ばらなどは、「いでや、いとこころ口惜しき御宿世なりけり。覺えず神佛のあらはれ給へらむやうなりし御心ばへに、斯かるよすがも人は出でおはするものなりけりと、ありがたう見奉りしを、大方の世の事とはいひながら、又頼むかたなき御有様こそ悲しけれ。と、つぶやき歎く。さる方にこゝろありつき給へたりしあなたの年頃は、いふかひなき淋しさに目馴れて過ぐし給ひしを、なか／＼すこし世づきてならひにける年月に、いと堪へがたく思ひ歎くべし。すこしもさてありぬべき人々は、おのづから参りつきてありしを、皆次々に隨ひてつぎいき散りぬ。女ば

（など）命堪へぬもありて、月日に隨ひて、（かみしも）上下の人（こゝろ）かずすくなくなりゆく。もとより荒れたりし宮のうち、いとど狐のすみかになりて、（むらと）うとましようけどほき木立に、梟の聲を朝夕に耳馴らしつつ、人げに（せかれこ）こそさやうのものもせかれて影かくしけれ、木魂など（いふなる）けしからぬ物（おたぐじ）ども所を得て、やう／＼かたちをあらはし、物わびしき事のみかず知らぬに、まれ／＼残りてさぶらふ人は、（侍女達）「なほいとわりなし。此頃ずりやうどもの面白き家造り好むが、この宮の木立に心をつけて、『放ちたまはせてむや』と、ほとりにつきて（け）あないし申さずるを、さやうに（も）せさせ給ひて、いとかう物怖ろしからぬ御すまひに思し移ろは（ほ）なむ。立ちとまりさぶらふ人も、いと堪へがたし」など聞ゆれど、末摘あないみじや。人の聞き思はむ事もあり（を）。生ける世に、（親の世の名残なき）しか名残なきわざはいかがせむ。かく怖ろしげに荒れ果てぬれど、親の御影とまりたる心地する舊きすみ



御調度どもも。御道具類も、時  
代がついてゐる。それが古風な  
作りで、きちんとして居る。なま  
じが研究して見ようとして居る。  
人が、さうした物をほしがつて  
る。わざと、その人の、故宮がわ  
ざ／＼名の誰彼に注文して作  
らせたのだと聞き出して、賣却方  
家を申込むにも、自然かうした貧  
家の見かけて、輕蔑して言つてく  
るのを。  
いかに、はせむ。致方がございま  
せぬ。窮しては、傳來の家寶を賣  
取りまきはし。事でございませぬ。  
いやらにとりかはからつて。  
見よと思ひ給ひて。父宮は私に  
使用せよとの思召で、造りおかれ  
たのでせう。

御兄の禪師 醍醐の阿闍梨。

一五〇  
かと思ふに慰みてこそあ・れ」と、打泣き・つづおもほし

もかけず。御調度どもも、いと古代になれたるが、昔やうにて  
うるはしき・を、なま物の故知らむと思へる人・、さ  
るものえうじて、わざとその人かの人にせさせ給へる・と尋ね  
聞き、案内するも、をのづからかかると、貧しきあたりと思ひあ  
なづりていひくるを、例の女ばら、「いかがはせむ。そこそは世  
の常のこと」とて、取りまぎらはしつ、目に近き今日明日の  
見苦しさを、つくろはむとする時もあるを、いみじういさめ給  
ひて、見よと思ひ給ひてこそしおかせ給ひけめ。などてか  
かる、しき人の家の飾りとはなさむ。亡き人の御本意・たが  
はむが、あはれなること」と、宣ひて、さるわざはせさせ給は  
ず。はかなき事にて、とぶらひ聞ゆる人は、なき御身なり。  
只御兄の禪師の君ばかりぞ、稀にも京に出で給ふ時はさしのぞ  
き・給へど、それも世になきふるめき人にて、

聖 聖僧。

淺茅 たけの低い茅。

葎 わぐら。蔓莖を有する刺あ  
る雜草。  
頼もしけれど、葎がまとひついで  
戸締をしてくれるから。

めざましき けしからぬ。

下の屋 下屋。召使達の住む建  
物。

ひたぶる心あるもの 向ふ見ず  
の一徹者。  
ふよう 不用。用のないものと  
して。

同じき法師といふなかに、たづきなく、この世を離れたる聖  
に物し給ひて、繁き草蓬をだに、かき拂はむ・ものともおもひ  
かり給はず。斯かるまに、淺茅は庭の面も見えず繁り、蓬は  
軒をあらそひて生ひのぼる。葎は西ひんがしの御門を・閉ぢこ  
めたるぞ頼もしけれど、くづれがちなるめぐりの垣を、馬牛な  
どの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼ふあけまき  
の心さへぞめざましき。

八月野分あらかりし年、廊どもも倒れ臥し、下の屋どものはか  
なき板葎なりしなどは、骨のみわづかに残りて、立ちとまるけ  
すだになし。煙絶えて、あはれにしみじき事多かり。盗人など  
いふひたぶる心あるものも、思ひやりの淋しければにや、この  
宮をばふよものものに踏み過ぎて寄りこざりければ、かくいみ  
じき野ら藪なれども、さすがに寢殿の内ばかりは、ありし御し  
つらひ變らず。つややかにい掃きなどする人もなし。塵はつ



紛るる事なき 立派さは塵の爲にも見えなくはならない。古歌物語 古歌の面白いのを抜出して書いたり、物語を讀んだりして。

心おそく 鈍くて興味を持たない。

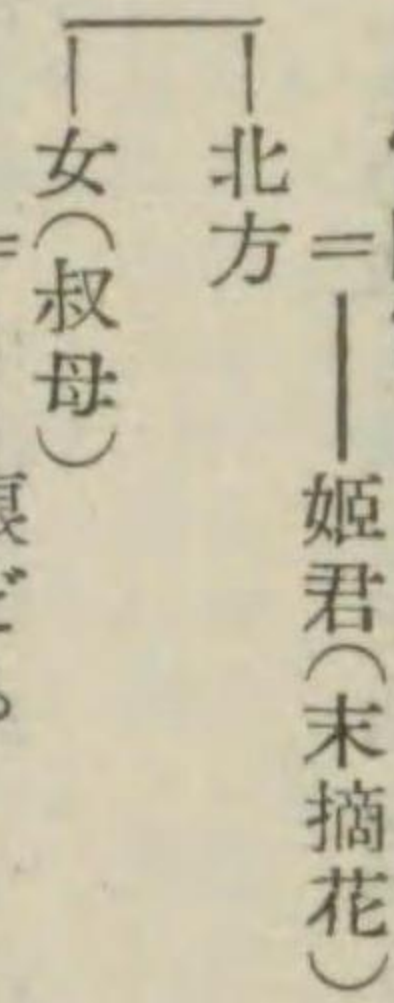
親のもてかしづき 姫君は父宮のお躰けになつた御趣旨を守つて。

唐守菟姑射の刀自 何れも古物語で今傳はらない。かぐや姫の物語 竹取物語。

かむやがみ 京都の紙屋川の御用製紙場で漉いた紙。この紙や陸奥紙は儀式ばつてゐて、風流な場合には適しないのである。

經うち讀み 紫式部日記や枕草子などに一讀經し歌うたひとある。經文の句に節をつけて誦する。當時の人々の一般の趣味であつた。

年頃あくがれ出てぬ 多年暇も貰はずに仕へて居つたが。通ひ參りし齋院 末摘花卷にて「あつた。卷」二五五頁。この姫君の母北方 系圖参照



むげに知らぬ所よりは 侍従は丸で知らぬ家に奉公するよりは自分の親達も出入りして居つたのだからと思つて、受領邸に時時往復してゐる。おのれをばおとしめ給ひて 故宮は私が受領の妻になつたので輕蔑なきつて、つらよごしのやうに思つておいでになつたかであつても、お世話してあげない。侍従に。いひ聞かせつつ 受領の北方が

もれども、紛るる事なきうるはしき御すまひにて明し暮し給ふ。はかなき古歌物語などやうのすさびごとにてこそ徒然をも紛らはし、斯かるすまひをも思ひ慰むるわざなめれ、さやうの事に、心おそく物し給ふ。わざと好ましからねど、おのづから又急ぐ事なき程は、同じ心なる文通はしなどもうちし。若き人は本草につけても心を慰め給ふべけれど、親のもてかしづき。給ひし御心おきてのまに、世の中をつつまじきものにおぼして、稀にも。も、更に馴れ給はず、ふるめきたる御厨子あけて、唐守、菟姑射の刀自、かぐや姫の物語の繪にかきたるをぞ、時々のまさぐり物にし給ふ。古歌とても、をかしきやうにえり出で、題をも讀人をもあらはし心得たるこそ見どころもありけれ、うるはしきかむやがみ。陸奥紙などのふくだめるに、ふることどもの目馴れたるなどはいとすさまじ

げなるを、せめてながめ給ふ折々は、引きひろげ給ふ。今の世の人のすめる經うち讀み、行ひなどいふ事は、いと恥かしくし給ひて、見奉る人もなければ、數珠など取り寄せ給はず。かやうにうるはしくぞ物し給ひける。

侍従などいひし御乳母子のみこそ、年頃あくがれ出でぬものにてさぶらひつれど、通ひ參りし齋院・亡せ給ひなどして、いと堪へがたく心細きに、この姫君の母北方の方のはらから、世にあちぶれて、ずりやうの北の方になり給へるありけり。むすめどもかしづきて、よろしき若人どもも、むげに知らぬ所よりは、親どももまうで通ひしをと思ひて、時々かよふ。この姫君は、斯く人うととき御癖なれば、睦まじくもいひ通ひ給はず。おのれをばおとしめ給ひて、面伏におぼしたりしかば、姫君の御有様の心苦しげなるも、見とぶらひ聞えずなど、なま憎げなることばどもいひ聞かせつつ、時々聞えけり。



もとよりありつきたるもとも  
と生れついで、さうした卑し  
い人は、却つて身分ある人の眞  
つてゐるのも多いが。

わが斯く劣りの、自分が斯く零  
落の境遇にあつて、今迄輕蔑の  
目で見られたのだから、姫君の  
家運の衰へた今こそ、姫君を自分  
の娘達の召使にしたいものだ。  
心ばせなどの、氣風は舊式な所  
もあるが、安心な附添人ではあ  
らう。

御ことのねも承らまほしが人  
叔母の娘達の事。

人に挑む心には 人にさからふ  
のではないが。

心細き御有様の、心細い御生活  
を、今迄始終お見舞するご生活  
に居たから、さあといふ時、所  
何時でも、思つて居ると、それ  
が、これからは遠方に行きます  
から、誠に心懸ります。

あんなうけびけり 怨みのろつ  
た。

我もいかで、自分が深い情誼を  
寄せてゐるといふ事を源氏に認  
めて貰ひたいと争つてゐる男女  
に、人々の心持を源氏が觀察し  
て見られると、怨の爲と愛の爲  
と、感懐にふけられる二つを指し  
た語。  
かやうにあわただしき程に、源  
氏は、姫君の事を思ひ出される  
様子も、見えずに、月日が過ぎ  
た。おぼろげな悦びも、下賤の  
者共まで、おぼろげな悦びも、  
氏の官位昇進など、聞かぬなら  
は、餘處事として、あはれな  
し、自分一人の爲に、あはれな  
ひ甲斐もない世の中だなあ。

世上一般の人の事をいふ  
もとよりありつきたるさやうのなみく／＼の人は、なか／＼よき  
人のまねに心をつくり、思ひあがるも多かるを、やんごとな  
き筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心すこ  
しなほ／＼しき御叔母・にぞありける。わが斯く劣りのさまに  
て、あなづらはしく思はれたりしを、いかでか斯かる世の末に、  
この君をわがむすめどもの使人に、なしてしがな、心ばせなど  
のふるび・たる方・こそあれ、いとろやすき後見ならむ、  
と思ひて、叔母「時々此處に渡らせ給ひて、御ことのねも承らまほ  
し・がる人・なむ侍る」と聞えけり。この侍従も常にいひ催  
せど、人に挑む心にはあらで、只・こちたき御物づつみな  
れば、さも睦び給はぬを、ねたしとなむ思ひける。  
かかる程に、かの家あるじ大貳になりぬ。娘ども、あるべきさ  
まに見おきてくだりなむとす。この君をなほもいざなはむの心  
深くて、叔母「遙にかくまかりなむとするに、心細き・御有様の

常にしもとぶらひ聞えねど、近き頼み・侍りつる程こそあれ、  
いとあはれにうしろめたくなむ」などことよがるを、更に承け  
引き給はねば、叔母「あな・にく・事々しや。・心一つにお  
ぼしあがるも、さる藪原に年經給ふ人を、大將殿もやんごと  
なくしも思ひ聞え給はじ」など、あんなうけびけり。さる程に  
げに世の中に許され給ひて、都に歸り給ふと、天の下の喜びに  
て立ちさわく。我もいかで人より先に深き志を御覽ぜられむと  
のみ思ひきほふ男女につけて、高きをもくだれるをも、人の心  
ばへを見給ふに、あはれに・あはれに・あはれに・あはれに・あはれに  
なり。かやうにあわただしき程に、更に思ひいで、給ふ氣色  
見え・で月日経ぬ。今は限りな・りけり、年頃あらぬさまな  
る御・さまを、悲しういみじき事を思ひながら、疾くも・萌  
えいつる春にあひ給はなむと念じわたりつれど、たびしかはら  
など、まで喜び思ふなる御位・あらたまりなどするを、よそにの



わが身一つのために 古今雜下  
「世の中は昔よりやは憂かりけむ我身一つの爲になれるか」

さればよ 思つた通りだ、あんな貧しく醜い人を誰が相手にするものぞ、佛や聖でも罪障の輕い人を濟度し易く思召すのだ、あんな哀な様子でありながら、えらさうに思つて、父宮や母方などの御存命當時の儘の癖で居られるあの慢心が可愛さうだ。かかる御有様にて、あんなごまでもえらさうにかまへて、父宮や母君の居られた時から癖になつてゐるまゝに高慢ちきな氣の毒だ。世の憂き時は、古今雜下「世の憂き目見えぬ山路に入らむには、思ふ人こそほだしなりけれ」は、ひたぶるに人わろげな待遇は決して致しませぬ。むげにくしにたる、すつかりしよげにしまつてゐる女房達は、さも靡き給はなむ、お勤めに從ひなきいませ、かうして居ても結構な事もありさうない御身の上ですもの。どういふお積りで意地を張つていらつしやるのでせう。

とどむべくも 侍従を都に残して行きたうもないので、不本意ながら下向の準備して。見奉りおかむが、末摘花をあとに残して下るのが心苦しうございますから。

さりとも いくら何でも、これからさき年数は立つても源氏が私を思ひ出して下さる機會のなはい筈はない。あはれに心深き、あれ程情をこめてお約束なさつたのも、これら身の不束からこんなにも忘れられたのだ、風の便りにでも自分の今の有様をお聞きになつたら、きつと尋ねに来て下さるだらう。

心強く 志操堅固に昔の儘に辛抱し通して居られるのであつた。

山人 山がつ。赤き木實 末摘花の鼻の赤いのを形容したのである。

み聞くべきなりけり、悲しかりし折のうれはしさは、只わが身一つのためになれると覺えし。かひなき世かなと、心碎けてつらく悲しければ、人知れずねをのみ泣き給ふ。大貳の北の方、さればよ、まさに斯くたづきなく人わろき御有様を、かずまへ給ふ人はありなむや、佛ひじりも、罪かろきをこそ導きよくし給ふなれ、かかる御有様にて、たけく世をおぼし、宮へなどのおはせし時のままにならひ給へる御心おごりのいとほしき事、と、いとどをこがましげに思ひ、て、叔母「なほも思し立ちね。世の憂き時は、見えぬ山路をこそ尋ぬ。人こそなれ。田舎など、はむつかしきものと、おぼしやるら・め・ど、ひたぶるに人わろげにはよももてなし聞えじ」など、いとことよくいへば、むげにくし・にたる女ばら・「さも靡き給はなむ。たけき事もあるまじき・御身を、いかにおぼして・斯く立てたる御心ならむ」ともどきつぶやく。侍従も、かの大貳の甥だ

つ人・語らひつきて、とどむべくもあらざりければ、心よりほかに出で立ちて、侍従「見奉りおかむがいと心苦しき・を」ととて、そそのかし聞ゆれど、なほ斯くかけ離れて久しうなり給ひぬる人に頼みをかけ給ふ。御心のうちに、さりとも、あり經てもおぼし出づるついであらじやは、あはれに心深き契りをして給ひしに、わが身の憂くて、かく忘れられたるにこそあれ、風がつてにても、わが斯くいみじき有様を聞きつけ給はば、必ずとぶらひ出で給ひてむと、年頃おぼしければ、大方の御家居も、ありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度どもなど取り失はせ給はず、心強くおなじさまにて念じ過ぐし給ふなりけり。ね泣きがちに、いとどおぼし沈みたるは、ただ山人の赤き木實一つを顔に放たぬと見え給ふ御そば目などは、おぼろげの人の見奉り許すべきにもあらずかし。くはしくは聞えじ。いとほしう物いひさがなきやうなり。



故院の御ために 桐壺院追善の御八講は「神無月に御八講し給ふ」とあつた。一〇五頁。

いとかしかう 大變ありがたくも劣らず、莊嚴且面白きの裝飾を盡されました。「かしかう」は河内本の如く「かしこう」がよい。

五つの濁り深き世 五濁惡世。五濁とは劫濁、見濁、命濁、煩悩濁、衆生濁の五つ。

さてもかばかり こんなに不幸な私をほつたらかして置かれるのは、いやな佛菩薩だと源氏の事が恨めしく思はれるので。

冬になりゆくまに、いとど搔き附かむ方なく悲しげに・ながめ過ごし給ふ。かの殿には、故院の御ために御八講、世の中ゆすりてし給ふ。殊に僧などは・なべてのは召さず、ざえすぐれ行ひにしみ、尊き限りをえらせ給ひければ、この禪師の君も、参り給へりけり。歸りざまに立寄り給ひて、禪師「しかく・・・、權大納言殿の御八講にまゐりて侍りつるなり。いとかしかう、生ける・・・浄土の飾りに劣らず、いかめしう面白き事どもの限りをなむし給ひつる。佛ぼさつの變化の身にこそ物し給ふめれ。五つの濁り深き世になどて・・・・・生れ給ひけむ」と・・・・・ひて、やがて出で給ひぬ。ことずくなに、世の人に似ぬ御あはひにて、かひなき世の物語をだにえ聞え合せ給はず。さても・かばかりつたなき身の有様を、あはれに覺束なくて過ぐし給ふは、心憂の佛ぼさつやとつらう覺ゆるを、げに限りなめりとやうく・おもひなり給ふに、大貳の北の方、にはかに來れり。例

人わろく淋しきこと 常陸宮の邸内の有様

いづれかこの 淋しい邸にも必ず踏み分けた足跡のある三つの徑がある筈だが、それはどこかと辿りあるく、文選陶潜歸去來辭「三徑就荒、松菊猶存」三徑とは河海に「門に行く道」、井へ行く道、廁に行く道也」と註す。

取りかへつべく見ゆ 取換へようと思へば取換へられさうに見える。

出て立ちなむ事を 出發の事を考へて居るもの。餘情を残見捨て奉りたがき。御みづからこそ末摘花御自身こそ一寸でも私方において下さらないにせめて、せめて此の侍従をだいても連れて行く事を許して頂きたいと存じまして。

はさしも睦びぬを、さそひ立てむの心にて、奉るべき御裝束など調じて、よき車に乗りて、おももち氣色ほこりかに、物思ひなげなるさまして、ゆくりもなく走り來て、門あけさするより、人わろく淋しきこと限りなし。左右の戸も・よろほひ倒れにければ、をのこども助けて、とかく・・・あけさわぐ。いづれかこの淋しき宿にも、必ず分けたる跡ある三つの道とたどる。わづかに南面の格子あげたる間に寄せたれば、いとどはしたなしと思したれど、・・・あさましう煤けたる几帳さし出でて、侍従出で來たり。かたちなど衰へにけり。年頃いたうつひえたれど、なほ物清げによしあるさまして、忝くとも、取りかへつべく見ゆ。叔母、出で立ちなむ事を思ひながら、心苦しき御有様の見捨て奉りがたきを。侍従の迎へになむ参り來たる。心憂くおぼし隔て給ひて、御みづからこそあからさまにも渡らせ給はね・・・、この人をだに許させ給へとてなむ。など斯うあはれげなる



行く道に榮轉の道だから、それ  
れに氣を慰めて。

年頃も何かは 今迄も何で私が  
細略に思ひませう。

睦び聞えさせむも 親しくして  
頂くのも遠慮される點が多くて  
今に及んだのですが。

世の中の斯く 世は無常で榮枯  
も不定のもの故、賤しい私共は  
結句氣樂でした。

近き程は 近所に住んで居る間  
でも知らず、無沙汰してもいつ  
もお目にかかれると思つて居  
たのに。

世に似ぬさまに 世間並でもな  
い私がどう致しまして。此儘此  
處で死んで了はうと思つて居ま  
す。

大將殿の 源氏がこのお邸に手  
入をして造り磨かれたならば、  
改まる事と頼もしくは存じませ  
が、只今は紫上より外には愛を  
分ける女もないのです。

昔より 源氏は昔から色めかし  
い性質から慰み半分に通つて行  
ひ切つて居られます。すつかり思  
ましてかう まして斯く見る影  
もない有様で、草原に住んで居ら  
れる人をば、身を潔白に保つて  
自分一人を頼りにして来たと思  
つて尋ねて下さる事はなからう  
と存じます。

・御・あ・り・さまには」とて、うちも泣くへきぞかし。されど行く道  
に心をやりて、いと心地よげなり。叔母はせし時、おのれ  
をば面伏せなりとおぼし捨てたりしかば、うとくしきやうに  
なりそめにしかど、年頃も何かは。やんことなきさまに思しあ  
がり、大將殿などおはしまし通ふ御宿世の程を、忝く思ひ給  
へられしかばなむ、睦び聞えさせむも憚ること多くて過ぐし侍  
りつるを、世の中の斯く定めもなかり、侍りければ、か  
ずならぬ身は、なか／＼心やすく、侍りるものな  
りけり。及びなく見奉りし御有様のいと悲しく心苦しきを、近  
き程は、おのづから怠る折も、のどかに頼もしくなむ侍りけるを、  
斯く、遙にまかりなむとすれば、うしろめたくあはれに、  
え給ふ。」など語らへど、心とけてもいらへ給はず。いと嬉  
しき事なれど、世に、似ぬさまにて何かは。かうながらこそ、  
朽ちも失せ、めとなむ思ひ侍る」とのみ宣へば、叔母はげにしかな  
むおぼさるべし。れど、生ける身を捨てて、斯くむくつけき  
・すまひするたぐひは侍らずやあらむ。大將殿の造りみがき  
給はむに、こそは、引きかへ、玉の臺にもなりかへらめと  
は頼もしうは侍れど、只今は兵部卿の宮の御むすめよりほかに  
心わけ給ふかたもなかりけり。昔よりすくしき御心にて、  
なほざりに通ひ給ひける所々、皆おぼし離れにたなり。まして  
かう物はかなきさまにて、薮原に過ぐし給へる人をば、心清く我  
を頼み給へ、有様と尋ね聞え給ふ事、いと難くなむある  
べき」などいひ知らするを、げにとおぼすもいと悲しくて、つ  
く／＼と泣き給ふ。されど動くべうもあらねば、よろづ  
にいひ煩ひ暮して、叔母は侍従をだに」と、日の暮るるさま  
に急げば、心あわただしくて、泣く、侍従はさらばまづ今日は  
・か・ら・責め給ふ送りばかりにまうで侍らむ。かの聞え給ふも  
・ことわりなり。又おぼし煩ふも、さる事に侍れ



ねをのみたけき事にて、聲を立てて泣くのが精一杯の事。

年経ぬるしるし 長年召使つた慰勞の心を示す品もないので。薰衣香 くれえかうともいふ。衣類をかをらすに用ひる。絶ゆまじきの歌 思ひも寄らず遠く御身を離れぬ。中と頼みにして居た御身を殺して貰ふ集めて髪飾りと玉の意味であるが、こゝでは玉の意味は湖月抄師説に「玉かづらは髪を褒美せし詞也」とある。絶ゆまじき 侍従は姫君の乳兄弟。故まま 侍従に末長く姫君を世話せよと遺言して死んだのである。かひなき身なりとも 奉公甲斐ない私ですが、末長く私を世話してくれりてかと思つて居た。誰に見譲りてかと思つて居た。世話を託してかと思つて居た。

ば、なか・に見給ふるも心苦しく・なむ」と忍びて聞ゆ。この人さへうち捨ててむとするを、恨めしうもあはれにもおぼせど、いひとどむべき・方もなくて、いとどねをのみたけき事にて物し給ふ。形見に添へ給ふべき身馴れ衣もしほなれたれば、  
・年経ぬるしるし見せ給ふべき物なくて、わが御髪の落ち・たりけるを取り集めて鬘にし給へ・るが、九尺餘ばかりにて、いと・清らなるを、をかしげなる箱に入れて、昔の薰衣香のいとかうばしき、一壺・具して賜ふ。

「絶ゆまじき筋と頼みし玉かづら思ひの外にかけ離れぬる故ままの宣ひおきし事もありしかば、かひなき身・なりとも、見果て・てむとこそ思ひつれ。うち捨てらるるもことわりなれど、誰に見譲りてかと思つて居た。いとどねをのみたけき事にて、泣き給ふ。この人も物も・聞えやらす・泣く・からうためらひて・ままの遺言

玉鬘の歌 今お別れ申しても、君をお見捨て申す事ではございませぬ。その事は行く道々の道祖神も證人に立てて誓ひませう。いづら さあ。侍従を促がす言葉。

世に用ひらるまじき 物の役に立ちさうもない老女房までが。出て行くのも當然だ。年若い侍従がおの身々につけたる 自分自分で行かうと工面して居るのを姫君は聞いてきまりわるく思つてゐられる。

言・は更にも聞えさせず。年頃の忍びがたき世の憂さを過ぐし侍りつるに、  
「玉鬘絶えてもやまじゆく道のたむけの神もかけて誓はむ命こそ知り侍らね」などいふに、  
と・つぶやかかれて、心も空にて引出づれば、かへり見のみ・せられけり。年頃わびつつも行き離れざりつる人の、かく別れぬる事をいと心細う思すに、世に用ひらるまじき老人・さへ、「いでやことわりぞ。いかでか立ちとまり給はむ・。我等もえこそ念じ果つまじ・。世に「おのが身々・。につけたるたよりども・思ひ出でて・。とまるまじう思へるを、人わろく聞きおはす。霜月ばかりになりぬれば、雪霰がちにて、ほかには消ゆる間もあるを、朝日夕日を防ぐ蓬葎の陰に深く積りて、越の白山思ひやらるる雪のうちに、出



で入る下人だになくて、つれづれとながめ給ふ。はかなき事を  
・聞え慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなく、侍従・て、夜  
も塵がましき・御帳の内も、いと・傍淋しく物がなしくおぼさ  
る。

かの殿には、源氏は久々で紫上  
にあつた珍らしきに、一入大駱  
を御寵愛なさる状態だから  
あまり重んじておいでならぬ  
婦人達の所には。

年かはりぬ 源氏二十九。

御暇聞えて お暇ををして。

卯月ばかりに、花散里をおもひ・出で聞え給ひて、忍びて對の  
上に御暇聞え・給ひて・忍びて・出で給ふ。日頃降りつる名残の雨す  
こしそそぎて、をかしき程に月さし出でたり。昔の御ありきお  
ぼし出でられて、艶なる程の夕月夜に、道のほどよろづの事お  
ぼし出でておはするに、常陸宮かたもなく荒れたる家の、木立繁く森

そこはかとなき どころからとも  
なく一面に匂ふよい薫りであ  
る。さし出で給へるに 源氏が車か  
ら。

おくれねば お供を缺かした事  
がないから、お供して居つた。

此處にありし人 末摘花。

とぶらふ 河内本に「ととふ」  
とあるは本の儘。  
よく尋ね寄りを 十分確めた  
上で口をきけ。

いとどながめまさる 侍従の去  
つた後で一人物思に沈んで居る  
折柄で、屈託の内に日を送つて  
居られたのだが。

のやうなるを過ぎ給ふ。大きな松に藤の咲きかかりて月影に  
・うち・靡きたる、風につきてさと匂ふが・いと・なつかしく、そこは  
かとなきかをりなり。花・橋には變りてをかしかれば、子こし・さ  
し出で給へるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば、柳・亂  
れ伏したり。源氏の心に見し心地する木立かなとおぼすは、はやう此の宮  
なりけり。源氏の心いとあはれにて、車を押しとどめさせ給ふ。例の惟光は、  
斯かる御忍びありきにおくれねば、さぶらひけり。召寄せて、  
源「ここは故常陸の宮ぞかしな」。惟光しか侍り」とときこゆ。此  
處にありし人は、なほまだやながむ・らむ・とぶらふべきを、懸々訪ふわさ  
と物せむも所せし。斯かるついでに入りて消息せよ。よく尋ね  
寄りてを打出でよ。人たがへしてはをこならむ」と宣ふ。此處  
には、いとどながめまさるころにて、つくづくとおはしけるに、  
末摘の夢晝寝の夢に故宮の見え給ひければ、常陸宮さめていと名残悲しくおぼ  
して、漏り濡れたる庇の端つかたを押しのごはせて、此處彼



例ならず世づき給ひていつになく、人並の氣持になつて。□き人並の歌 故宮を慕ふ涙で袂の乾くひまもないのみか、軒の雫までが降り添うて、杖は入濡れるのも、いぢらしく思はれる際であつた。「ありける」とある河内本に従ふべきである。

格子二間 間とは柱と柱との間をいふ。

名のりして 惟光は我名を告げて。

おぼし分くまじき 侍従と同じに思つて頂いてもよい女が居ります。これが侍従の伯母少將である。

處の御座引きつくるはせなどしつ、例ならず世づき給ひて、亡き人を戀ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふも、心苦しき程になむあめりける。惟光入りて、めぐるめぐる、人の音する方やと見るに、いささか人げもせず。さればこそ、行き來の道に見入る、れど人住みげもなきものを、と思ひて、歸り參る程に、月あかくさしいでたるに見れば、格子二間ばかりあげて、簾垂動く氣色なり。わづかに見つけたる心地、怖ろしくさへ覺ゆれど、寄りてこわづくれれば、いと物ふりたる聲にて、まづしはぶきを先に立てて、老女かれはたれぞ。何人ぞ」と問ふ。名のりして、侍従の君と聞えし人たにたいめん賜はらむ。とて尋ね聞えさせになむ」といふ。老女それほほかになむ物し給ふ。されどおぼし分くまじき女なむ侍るといふ聲、いたうねび過ぎたれど、あてはかなるけはひしていらふ。天夫は聞きし老人と聞き知りたり。内には、思ひ

忍びやかに 人目を忍ぶ風情でやさしい物ごしだから。見ならず 男など久しく見馴れなくなつた目から見れば。

尋ね聞えさせ 殿もお尋ねしてあげようといふ御好意は始終持つていらつしやうと立寄りになつたので、何と返事しませうか。御心配には及びませぬ。

變らせ給ふ御有様ならば 心な變りなざる姫君ならば、お心淺茅原を移轉しなば、いらつしやれませうか。御推察の上申上げてもおとづれない草原の低い意。人もおとづれない草原の中年經たる人の心にも、年寄つた私共の心にも、かうした類は珍たし御夫婦仲をけふまで傍觀つややくづしして、段々ぼつぼつ話し出して。

寄らず、狩衣姿なる男の、忍びやかにもてなしてなごやかなれば、見ならずなりける目にて、もし狐などのへんげにやとおぼゆれど、近う寄りて、惟たしかになむ承らまほしき。變らぬ御有様ならば、尋ね聞えさせ給ふべき御志も絶えずなむおはしますめるかし。今宵もゆきすぎがてに、とまらせ給へるを、いかが聞えさせむ。うしろやすくを」といへば、女どもうち笑ひて、「變らせ給ふ、御有様ならば、かかる淺茅が原を移ろひ給はでは侍りなむや。ただ推し量りて、聞えさせ給へか。年經たる人の心にも、たぐひあらじとのみ珍らかなる。世をこそは、見奉り過ぐし侍れ」と、ややくづし出でて、事は、問はず語りもしつべきがむつかしければ、よし、まづ斯くなむと聞えさせむ」とて參りぬ。蓬などかいと久しかりつる。いかにぞ。昔の跡も見えぬ蓬のしげさかな」と宣へば、惟しかくなむたどり寄りて侍りつる。侍従が伯母の



變らぬ有様ならば 昔の儘で居  
られるなら會つて見よう。成程  
さうもあらうと(昔のまゝだら  
うと)おもはれる人柄だから  
ね。  
ふと入り給はむ事 末摘花を信  
じながら猶どうかと疑はれて  
不意にはひつて行くことも

たづねても歌 道もない深い  
蓬原で誰も尋ね訪ふ人もない深い  
自分こそ訪ねて姫君の昔ながら  
の深い心を慰めてあげよう。

あまそそぎ 催馬樂東屋「東屋  
のまやのあまりのあまそそぎ、  
われ立ち濡れぬそのとんのどひ  
あらかせかすがひも、とどしひ  
あらばこそ、そのとんのどわれ  
さゝめ、押しひらいて來ませ、  
われや人妻」  
御笠さぶらふ 古今東歌「みさ  
ぶらひ御笠と申せ宮城野の木の  
下露は雨にまされり」  
むとく 荒蕪して、見るかげも  
ない。

さりともと いくら何でも自分  
をお見捨てなさる事はあるまい  
と今迄待つて居られた豫想が當  
つて。

奉りおきし御ぞども 前に「さ  
そひ立てむの心にて、奉るべき  
御装束など調じて」とあつた。  
一六三頁。

さしもおどろかい給はぬ 格別  
お手紙も下さなかつた恨めし  
さに今迄お心をためした居つ  
たので、木立が目にしつたので、  
通つたが、来ず、根氣負けて立

少將といひ侍りし(おねび)人なむ、變らぬ聲にて侍りつる」と有様  
聞ゆ。・いみじうあはれに、斯かるしげき・なかに、何心地  
して過ぐし給ふ・らむ、今まで訪はざりけるよ、とわが御心  
のなさけなさも思し知らる。源「いかがすべき。斯かる忍びあり  
きも難かるべきを、斯かるついでならではえ立寄りらじ。變らぬ  
有様ならば。げにさこそはあらめと推し量らるる人さまになむ」  
とは宜ひながら、ふと入り給はむ事、・なほつつましう思さ  
る。故ある御せうそこもいと聞えまほしけれど、見給ひし程の  
口おそさもまだ變らずば、御使の立ちわづらはむ・もいとほし  
う、おぼしとどめつ。惟光も、「更にえ分けさせ給ふまじき蓬の  
露けさになむ侍る。露すこし・拂はせてなむ入らせ給ふべき」  
と聞ゆれば、  
たづねても我こそ訪はめ道もなく深きよもぎのもと心の心を  
と獨りごちて、なほあり給へば、御さきの露を馬のむちして

拂ひつづ入れ奉る。あまそそぎもなほ秋の時雨めきてうちそそ  
げば、惟光御笠さぶらふ。げに木の下露は雨にまさりて」と聞ゆ。  
御指貫の裾はいたうそぼちぬめり。昔だにあるかなさか  
なりし中門など、ましてかたもなくなりて、入り給ふにつけ  
ても、いとむとくなるを、立ちまじり見る・人  
・なきぞ・心やすかりける。  
姫君は、さりともと待ち過ぐし給へる心もしるく、嬉しけれど  
ものから、いと恥かしき御有様に、たいめんせむもいとつ  
ましく思したり。大貳の北の方の奉りおきし御ぞどもをも、心  
ゆかずとおぼされしゆかりに、見入れ給はざりけるを、この  
人々の香の御唐櫃に入れたりけるが、いとなつかしき香・し  
たるを奉りければ、いかがはせむに、著かへたまひて、かの煤  
けたる御几帳引き寄せておはす。入り給ひて、年頃の隔てに  
も、心ばかりは變らずなむ思ひやり聞えつるを、さしもお



杉ならぬ木立 古今雑下「わが  
庵は三輪の山本戀しくばとぶら  
ひ來ませ杉立てる門」  
帷子 几帳の垂布。

思ひおこしてぞ 勇氣を出し  
又變らぬ心ならひに あなたの  
心は變つてしまつたやら、詮索  
もしないで分つたはあなせぬ  
が、自分の心が變らぬ癖から  
あなたも昔のまゝと信じて  
あなただけの草を分けて尋ねて  
すか。私に何とお思ひなり  
同様に今迄の疎遠も併し誰に  
さるでせう。たのどお許し下  
今よりのちの 以後お氣に召さ  
ぬ仕打が私にあるならば、約束  
うに背いたといふ責任も負ひませ  
いとどこにたがふ 奥入引歌「い  
とどひしに違ふ事にまされ忘れ  
まばゆき御ありさま 家屋を初  
い花やかな源氏ではそのはな  
宣ひすくして 河内本「宣ひ  
引き植ゑし」と後撰雜「引き植  
ゑし人高なりけるかな」

夢のやうなる 左遷などの事で  
源氏の身上に變化のあつた事。

藤波の歌 松に咲きかゝつて  
るやうに見えたのは、やはり松  
がお宿の目ざしたの、やがて  
す。お寄りせぬにわづらな  
つたのは、あなたが待つて居  
て下さつたからです。「打ち」は  
藤波の縁語。  
部別れにむかし 年月が、  
まして居つた當時の物語も申上  
ませう。古今雑下「思ひきや鄙  
の別に衰へて登の繩たぎいさり  
せむとは」私の外には訴へる人  
もなからうかと。心からたよつて  
うらもなくのやうに。甲斐もな  
年を経るの歌 待つ甲斐もない  
私のお宿をお尋ね下さつたのは  
藤波の花を見る事なのですか。

軒のつまも残りなければ 朽  
らして軒先も無くなつてゐるか

どろかい給はぬ恨めしさに、今まで試み聞えつるを、杉ならぬ  
木立のしるさに、え過ぎでなむ負け聞えにける」とて、帷子を  
すこしかきやり給へれば、例のいとつつましげに、とみにも  
いらへ聞え給はず。かくばかり分け入り給へるが浅からぬに、  
思ひ・おこしてぞほのかに聞えいで給ひける。漸かかかる草隠れ  
に過ぐし給ひける年月のあはれもあるかならず。又變らぬ心な  
らひに、人の御心のうちもたどり・知らずながら、  
・分け入り侍りつる露けさなどを、いかがおぼす。年頃の怠り  
はた・なべての世におほし許すらむ。今よりのちの御心  
にかなはざらむなむ・いひしにたがふ罪も負ふべき」など、  
さしもおぼされぬ事・も、なさけしう聞えなし給ふ事ども  
もあめり。立ちとどまり給はむも、所のさまより始め、  
ばゆき・御ありさまなれば、つきしう宣ひすくして出で  
給ひなむとす。引き植ゑしならねど、松の木高くなりける年  
源氏の植ゑた松ではないが  
程よく言ひのがれて

月の程もあはれに、夢のやうなる御身の有様もおぼしつづけら  
る。

「藤波の打過ぎ難く見えつるはまつこそ宿のしるしなりけれ  
かぞふれば、こよなう・積りぬらむかし。都に・變りにける事  
の多かりけるも、さま／＼あはれになむ。今・か・かにぞ鄙の  
別れに衰へし世の物語も聞えつくすべき。又年経給ひつらむ春  
秋の暮しがたさなども、誰にかはうれへ給はむとすらもなく覺  
ゆるも、かつは怪しうなむ」など聞え給へば、  
木摘花 待に松をかた語  
身動き

年を経たつしるしなき我宿を花のたよりに過ぎぬ許りか  
と忍びやかにうちみじろき給へるけはひも、袖の香も、昔より  
はねびまさり給へるにやと思さる。月入りがたになりて、  
西の妻戸のあきたるより、さはるべき・渡殿だつ屋もな  
く、軒のつまも残りなければ、いと花やかにさし入りたれば、  
あたり／＼見ゆるに、昔に變らぬ御しつらひ・のさまなど、  
月影が



忍草にやつれたる 古今秋上  
松虫のねぞ悲しかりける 忍草  
が生えて見苦しかりける 忍草  
その外見より苦しかりける 忍草  
さまがみやびやかに 御部屋飾りの  
たう毀ちたる 帳は河内本  
の如く「即ち」は河内本  
に「即ち」は河内本  
が「即ち」は河内本  
に「即ち」は河内本  
に「即ち」は河内本

あざやかに 目立つて當世風  
など華美な事をせぬと格別な  
ともないの常陸宮の缺點も  
餘程隠れて分らなかつた。

祭御禊 賀茂祭、齋院の御禊。  
御いそぎどもに その準備にか  
こつけて。  
さるべき限り 然るべき愛人だ  
けに厚意を表せられる。  
睦まじき人々に 源氏が親しく  
召使つて居る家來衆に。

二條の院いと近き所 二條院の  
東の院の事。東の院造營の事。  
松風卷二〇五頁にも見える。源  
氏が六條院を造つて移り住む  
では花散里などもこの東の院に  
住んで居つた。

なげの 源氏は、假初の戯れ事  
でも、並々の女には目もつけず  
耳も貸さず、世間では多少の女  
はと思はれ且つ我が心を惹き付  
ける點のある女を捜し寄るお方  
だと誰も知つて居たのに。  
かく引きがへ かう見當違ひ  
にも足らぬお方を引立てられる  
のはどうした料簡なのか。

忍草にやつれたるうへの見る目よりは、みやびかに見ゆるを、  
昔物語に、たう毀ちたる人もありけるをおぼし合するに、同じ  
さまにて年ふりにけるもあはれなり。ひたぶるに物づつみした  
るけはひの、さすがにあてやかなるも心にくくおぼされて、さ  
る方にて、忘れじと心苦しく思ひしを、年頃さまの物思ひ  
に、ほれしくして隔てつる程、つらしと思はれつらむとい  
とほしく思す。かの花散里も、あざやかに今めかしうなどは花  
やぎ給はぬ所にて、御目移し、こよなからぬに、咎多う隠れに  
けり。

祭、御禊などの程、御いそぎどもにこつつけて、人の奉りたる  
物、いろく多かるを、さるべき限り御心加へ給ふ  
なかに、この宮には、こまやかに、おぼし寄りて、奉れ給ふ、  
睦まじき、人々に仰せごとたまひ、下部どもなど遣はして、  
蓬拂はせ、めぐりの、見苦しきに、板垣といふもの

うち堅めつくるはせ給ふ。かう尋ね出で給へり。聞き傳へ  
むにつけても、わが御ためめんぼくなければ、渡り給ふ事な  
し。御文いとこまやかに書き給ひて、二條の院いと近き所を  
造らせ給ふを、そこになむ渡し奉るべき。よろしきわらはべな  
ど求めてさぶらはせ給へ」など、人々のうへまで思しやりつつ  
とぶらひ聞え給へば、かくあやしき蓬のもとにはおきどころな  
きまで女ばらも空を仰ぎてなむそなたに向きて、喜び聞えけ  
る。なげの御すさびにても、おしなべたる世の常の人をば、目と  
どめ耳立て、給はず。世にすこしこれは、とおもほえ心にとま  
るふしあるあたりを尋ね寄り給ふものと人の知りたるに、かく  
引きがへ、何事もなめにだにあらぬ御ありさまを、物め  
かし出で給ふは、いかなりける御心にかありけむ。これも昔の  
契りなめりかし。今は限りとあなづり、果てて、さまざまにき  
ほひ散りあかれし上下の人々、我もく參らむと争ひいづる人



心やすくならひて、吞氣癖がついて、吞氣な奉仕癖がついてある人。義心やすくならひてある人。殊なる事なき、格別な事もなかつたらぬ受領などの家に奉公して居る女は、したなき、今迄かうした経験も持たないで、當座の目見えに来る者もあつて、當座こまやかに、懇切に末摘を世話されたので。

かく「遣水かき拂ひなどして」を受けた語で、「追従し仕うまつる」にかかると、源氏が深く末摘を御寵愛に成るのち、いと見取つて、源氏の御機嫌を取りなす。東の院、末摘が二條東院に移り住んだのは、花は皆そこに條院が竣工して、人々は皆そこに移り住んだが、末摘は皆そこに居残つたらしい。折にも、何かの序においでに

いとあなづらはしげにも、さう輕んじたやうにもあつかはれな。嬉しきもの、姫君の幸福を嬉しくは思ひながら。

も・あり。心（何事も）ばへなどは、たうもれいたきまでよくおはする御有様に、心（何事も）やすくならひて、殊なる事なきなまざりやうなどやうの家（など）にある人は、ならばはしたなき心地するもありて、うちつけの心見えに參り歸る。君は、いにしへにもまさりたる御いきほひの程にて、物の思ひやりもまして、添ひ給ひにければ、こまやかに、ぼしおきてたるに、匂ひいでて、宮の内やう／＼人目見え、本草の葉も、ただ凄くあはれに見えなされしを、遣水（下家司が）かき拂ひ、前栽（根ぎは）のもとだちもすずしうしなしなどして、殊なる覚えなき下家司（など）の殊に仕へ、まほしき（さる）は、かく、御心とどめて思さる事なめりと見取りて、御氣色賜はりつつ追従し仕うまつる。二年ばかりこの舊宮（ふるみや）にながめ給ひて、ひんがしの院といふ所になむのちには、渡し奉り給ひける。たいめんし給ふ事などは、いと難けれども、近きしめの程にて、大方にも渡り給ふ（ういさ）に、さしのぞきなどし給ひ

つつ、いとあなづらはしげにももてなし聞えたまはず。かの大貳の北の方（上落）のぼりて驚き思へるさま、侍従が嬉しきものを、今暫し待ち聞えざりける心淺さを恥かしう思へる程などを、今すこし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたううるさく物憂ければ、今又もついであらむ折に、思ひ出でて、聞ゆべきとぞ。



世  
米  
屋



伊豫介 空蟬の夫。  
故院 桐壺院の崩御は賢木卷四  
〇〇頁。  
須磨の御旅居も 源氏が須磨に  
謫居して居る事も常陸から遙  
に聞いて。

筑波根の山を 常陸から京に往  
復する人も稀にはあるが、それ  
に託するものも不安な気がして、  
古今東歌一甲斐が根を根越し山  
越し吹く風を人にもがもやこと  
づてやらむし。

常陸はのぼりける 常陸介は任  
滿ちて上洛した。  
關入る日しも 丁度常陸介が逢  
坂の關を越す日に。  
御願果たし 須磨での立願が叶  
つてのお禮詣。

道の程 途中で出遭つては混雜  
だらうと心配して、まだ暗い中  
から急いで来たのだが、  
所せうゆるぎくるに 所せばし  
と悠々と来るので。 源氏の  
御ぜんの人々 源氏の前驅の人  
々。  
道もさりあへず 道もよけきれ  
ぬ程、大勢なだれ込んで来たの  
で。  
關山 關所のある山を一般にい  
ふ。

伊豫介といひしは、故院<sup>(の御門の)</sup>かくれさせ給ひて又の年、常  
陸<sup>(任國に)</sup>になりてくだり。しかば、かの常木<sup>(空蟬も常陸に)</sup>もいざなはれにけり。須  
磨<sup>(おほむら)</sup>の御旅居も遙に聞きて、人知れず思ひやり聞えぬにしも  
あらざりしかど、傳<sup>(源氏に)</sup>へ聞ゆべきよすがだになくて、筑波根の山  
を吹越す風も浮きたる心地して、いささかのつたへ<sup>(こ)</sup>だになく  
て年月かさなりにけり。限<sup>(無期限の謫居ではあるが)</sup>れることもなかりし御旅居なれ<sup>(り)</sup>か  
ど、京<sup>(源氏が)</sup>にかへり住み給ひて又の年の秋ぞ常陸はのぼりける。關  
入る日しも、この殿<sup>(源氏)</sup>・石山に御願<sup>(か)</sup>・果たしにまうで給ひけり。  
京より、かの紀の守<sup>(常陸介の子)</sup>などいひし子ども、迎<sup>(關に)</sup>へに來たる人々、こ  
の殿<sup>(源氏)</sup>かくまうで給ふべしと告げければ、道の程<sup>(常陸の用意)</sup>さわがしかりな  
むものぞとて、まだ曉より急ぎけるを、女車<sup>(常陸介一行の)</sup>多く、所せりゆる  
ぎくるに、日たけぬ。打出<sup>(うちいで)</sup>の濱くるほどに、殿<sup>(源氏)</sup>は栗田山越え給  
ひぬとて、御ぜん<sup>(まき)</sup>の人々、道もさりあへず來込みぬれば、關山<sup>(常陸の一)</sup>  
に皆ありて、ここかしこの杉のしたに車どもかきあろし、木<sup>(こ)</sup>



類 眷族。

漏りいてて 下簾垂の下から。

旅姿 源氏一行の。

襖 狩襖ともいふ。狩衣の事。表は布で裏は絹。縫模様や絞染などを施す。

昔の小君 源氏を空蟬に媒ちした。

今日の御關迎へは 今日わざわざ御關迎へに参つた私の志は、知らぬ顔は出来ませぬまい。おほぞうにて一通りの傳言故何の甲斐もない。

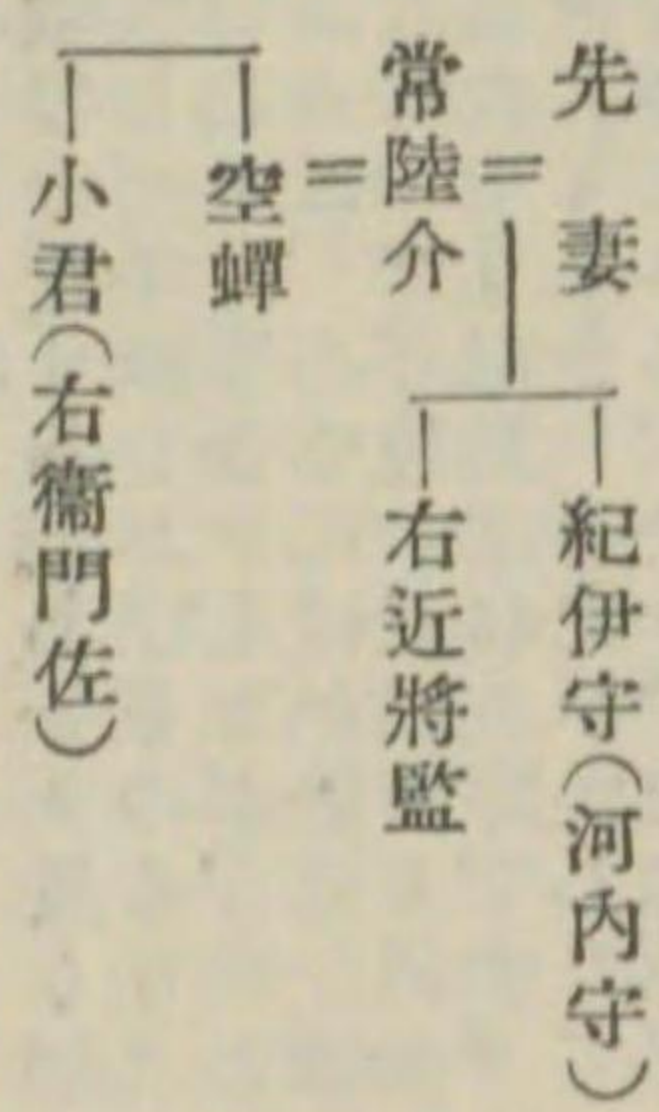
隠かくれにみかしこまりて過すぐし奉る。車など、かたへはおくらかし  
 先に立たてなどしたれど、なほ類る廣く見ゆ。車十ばかりぞ袖口物衣  
 の色合なども漏りいでて見えたる、田舎びずよしありて、齋宮  
 のおくだり何ぞやうの折の物見車おほしいでらる。殿も、斯く  
 世に榮え出で給ふ珍らしさに、かずもなき御ぜんども、  
 皆目とどめたり。九月晦日ならば、紅葉のいろくこきませ、  
 霜枯の草むらくをかしう見えわたるに、關屋よりさとはづれ  
 出でたる旅姿どもの、いろくの襖のつきしき縫物、  
 くくり染のさまも、さるかたにをかしう見ゆ。御車は簾垂  
 おろし給ひて、かの昔の小君、今は右衛門の佐なるを召寄せて、  
 今日の御關迎へは、え思ひ捨てたまはじなど宣ふ。御心の  
 うち、いとあはれにおほしいづる事多かれど、おほぞう  
 にてかひなし。女も、人知れず昔の事忘れねば、取りか  
 へして物あはれなり。

ゆくとくととの歌 行きにも歸りにも、せきとめ難く流れる清水の涙を、絶えず湧き出る關の清水と思ひちがひなきでせう。

一日 常陸の入洛の日。まかり過ぎしお目に懸つただけでお供しなかつたお詫を申上げる。

この御徳 源氏のお蔭を蒙つたの。

紀の守 常陸介の子。



一日は 先日お目に懸つたのは深い因縁と私には思はれたが、あなたもさうお分りになつたらうか。

ゆくとくととせきとめ難き涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ  
 心に思ふ歌故源氏は御存じあるまいと思ふとつまらない  
 え知り給はじかしと思ふに、いとかひなし。  
 源氏石山下向の迎に  
 石山より出で給ふ御迎へに、右衛門の佐まぬれり。一日まかり  
 過ぎしかしこまりなど申す。昔わらはにていと睦まじうらう  
 たきものにし給ひしかば、かうぶりなど得しまで、この御  
 徳に隠れたりしを、覺えぬ世のさわぎありし頃、物の聞えに憚  
 りて、常陸にくだりしをぞすこし御心おきて年頃はおほしけれ  
 ど、色にもいだし給はず。昔のやうにこそあらねど、なほ親し  
 き家人のうちにはかぞへ給ひけり。紀の守といひしも今は河  
 内の守にぞなりにける。その弟の右近の尉とけて御供にくだり  
 りしをぞ取りわきてなし出で給ひければ、それにぞ誰も思ひ知  
 りて、などてすこしも世に隨ふ心をつかひけむ、など思ひ出で  
 ける。佐召寄せて御消息あり。今はおほし忘れぬべきことを、  
 心ながくもおはするかな、と思ひ居たり。一日は契り知られ